

無貌侍女の館

四肢欠損のお坊ちゃんが首無しメイドで
美女ハーレムを築いて孕ませまくる伝奇猥譚

三紋昨夏 著

【序章】洗脳侍女カレンティアの痴態

レーヴェ家は帝国辺境の田舎貴族だ。

貴族といっても爵位序列は最下位の准男爵。治める土地は二〇〇人程度が住む莊園のみ。厳冬期は豪雪に悩まされ、雪解けになると泥濘ぬかるみの悪路が往來を阻む。厳しい環境の土地柄であったが、レーヴェ家の莊園は裕福だった。

レーヴェ家はリング栽培の成功で財を築いた。蜜入りの熟成リングは高値で商人達に買い付けられ、近年着手した酒造も莊園の大きな収益源となった。これからもレーヴェ家は大きく発展していくだろう。

メイドの私はご立派な御家に尽くせることが心底誇らしい。

「坊ちゃん。寒くはないですか？」

書斎の窓辺で、御主人様は雪景色を眺めている。私も家事が一通り済んだので、温かい紅茶を飲みながら休憩していた。

「大丈夫だよ。僕はこんな身体だから、手足の冷えをまったく感じない。不便の多い身体だけど、こういう寒い季節は便利かな。ああ、でも、君には大きな迷惑をかけているけれどね」

御主人様の自虐的な戯れ言たわむごとにどんな反応を返すべきだろうか。メイドの私は悩む。結局、誤魔化すように苦笑いを浮かべた。

「そのようなことを仰らないでください。迷惑だなんてとんでもない！ 私はヴォルフ坊ちゃんのお世話ができて幸せです」

嘘偽りない本心だ。

ヴォルフ坊ちゃんは私が愛する御主人様。

五年前に起きた本邸の大火事で、レーヴェ家の一族と使用人は全滅した。生き残りは御子息のヴォルフガング・ゴットフリート・レーヴェ。私が愛するヴォルフ坊ちゃんだけだった。

ヴォルフ坊ちゃんは大火に見舞われた本邸から逃げ出し、中庭の古井戸に逃げ込んだ。何とか一命を取り留めたものの、手足欠損の代償を支払った。

「幸せか……。そう言ってくれるなら……。美人なメイドにお世話されている僕も幸せ者だ」

両手両足の無い青年は悲しげに微笑む。

あの大火事から五年……。レーヴェ家の使用人は私だけになってしまった。

ヴォルフ坊ちゃんのお怪我は癒えた。けれども、失われた手足は未来永劫、決して治らないのだ。誰かがお世話をしなければ、ヴォルフ坊ちゃんは生きていけない。

(ああ……。坊ちゃん……。♥ 小さくて可愛い坊ちゃん……。♥)

腕利きの大工職人に特注で作らせた車椅子は座り心地が良さそうだ。ヴォルフ

坊ちゃんも気に入ってくれている。しかし、誰かが押してあげなければ車椅子は動かない。

ヴォルフ坊ちゃんは常に私を必要としているのだ。

「外は強く吹雪いていますね。……今年の冬ごもりは長引きそうです」

私は火力が弱まった暖炉に薪木を放る。暖炉は建物全体に熱を供給する心臓部だ。冬ごもりの間、暖炉では炎が激しく踊り続ける。

「村の皆は大丈夫かな」

心優しいヴォルフ坊ちゃんは領民を心配している。

吹きつける雪風が窓枠を揺さぶった。二重窓が冷気の侵入を阻み、私達の住む

小さな館は、居心地の良い暖気で満たされていた。荘園の人々が住む家は、ここまで充実していない。

「荘園を任せている村長が上手くやっていますよ。冬の備えに抜かりはありません。新しく取引を始めた行商人から、安値で薪木を買い込んだと聞きました。隣の商人が悔しがっていたそうですよ」

「僕は隣町と仲良くしたいのだけど……」

「隣町の出方次第ですね。奴らは昔からレーヴェ家の荘園を狙っていました。いいですか、ヴォルフ坊ちゃん！ 外の人間に心を許してはなりません！ 五年前に起きた大火事は、町の人間が仕組んだことに違いないのですから……！ 奴ら

は酷い人間達ですわ！」

「そうかもしれない。でも、父さんは死ぬ前に言っていたよ。町の存在がなければ僕らの生活は成り立たない。荘園で働く村人達だって、元々は町から移り住んだ人達なんだ。外の血を取り入れなければ、レーヴェ家は先細っていく……」

「先代の御言葉は正しいです。しかし、性急であったことも否めません。外から血を取り入れるのなら、血の善し悪しを見定めるべきでした」

私とヴォルフ坊ちゃんは本邸が焼け落ちてから、別邸のあんじゅかん闇樹館で暮らしている。初代当主が建てた旧館は作りこそ古いものの、建材に堅牢な古樹がふんだんに使われており、厳しい冬の積雪に耐える、自慢の棲み家だ。

——私はお世話をしなければならぬ。

——私は御主人様を心の底から愛している。

——私はヴォルフ坊ちゃんの手足となって、レーヴェ家にこの身体を捧げる。

「レーヴェ家の血筋を後世に紡いでいかねばなりません。当主の御役目です。

ああ……♥ ヴォルフ坊ちゃん♥ 寒い冬は人肌が恋しくなりますね？ ふふっ

……。ご奉仕の許しをいただきたく……♥」

胸元のボタンを指先で外す。豊満な乳房でヴォルフ坊ちゃんの性的興奮を誘う。

ブラジャーを外し、ショーツを脱ぎ捨てる。メイド服を半脱ぎに着崩し、硬くなつたオチンポに寄り添う。

「本気なんだね」

「私はいつだって本気です。ヴォルフ坊ちゃん」

「僕らにはもう娘が二人いるんだよ。三人目だって……」

ヴォルフ坊ちゃんは顔を赤らめて、恥ずかしがっている。

私は構わずに脚絆ズボンを脱がせた。痛々しい四肢欠損の身体でも、立派な男子の生殖器だ。反り勃つオチンポは我慢汁の雫しずくで濡れていた。

「それなら私の胎で四人目を作りましょう。ヴォルフ坊ちゃんの可愛い赤ちゃん

を産む準備は出来ています♥ 性奉仕のご許可を♥ さあ♥ 遠慮なさらず♥
このオマンコにオチンポをお挿れください♥」

車椅子に跨った私は陰唇を亀頭に押し当ててる。

今すぐに腰をおろして、膣道に挟み込んでしまいたい。だが、御主人様の許しは必要だ。私はレーヴェ家に仕える忠実なメイド。合意なき性交は許されない。

「——それはカレンティアの本心？」

ヴォルフ坊ちゃんは肘先ひじさきで私の頬を優しく撫でてくれた。

右腕は肘^{ひじ}までしか残っていない。左腕はもつと短く、二の腕が半分だけ。何かを掴むことも、持ち上げることもできぬ不具^{わいく}の矮躯^{こしら}。作り物の義手を拵^{こしら}えたところで、見栄えを取り繕うことしかできない。

「繋がれば分かることですわ。私の膣^な内^かをオチンポで探ってください♥♥♥ お願いします♥♥♥ ヴォルフ坊ちゃん♥♥♥ さあ、私を抱いてっ……♥♥♥ 愛し合いたい♥♥♥」

坊ちゃんの額頭^{おでこ}に接吻^{くちづけ}する。乳房^{ちち}を擦^{こす}り付けて、淫艶な媚肉の香りで誘う。理性^{たが}の籬^{かき}はお互いに限界だった。

(孕^こみたい♥♥♥ レーヴェエ家の赤ちゃんを産みたい……♥♥♥)

私の胎はヴォルフ坊ちゃんの赤ちゃんを授かるために在る。

「分かった。いいよ。僕も君を愛してる」

愛欲を超越した主従関係。私はヴォルフ坊ちゃんのオチンポを迎え挿れる。膣汁で濡れた柔らかな肉壁を押しつけ、亀頭のカリが子宮に向かって進む。

「あぁっ♥んぁっ……♥あうっ……♥」

オチンポが根元まで食い込んだ。私の全体重が加わり、車椅子の木製車輪が軋む。勢い余ってひっくり返らないように注意する。ブレーキのレバーが固定されているのを確かめてから、ゆっくりと腰を前後に躍らせる。

ぢゅっぷっ、くちゅりっ、ぐうぢゅりい、ぶうぢゅうるっ♥

淫媚な水音を奏でながら、心身の交合が深まっていく。ヴォルフ坊ちゃんの逞

しい男根が私の子宮口を塞ぐ。一気に引き抜き、臀部でんぶの重みを乗せて激しく挿れる。

私は一心不乱にお尻を振った。

吹き荒む雪風は強さを増す。私達の嬌態に共鳴しているかのようにだった。

「あんっ♥ んんうっ♥ あふっ♥ ああっ♥ んあっ♥ あんっ……♥」

ヴォルフ坊ちゃんはオツパイが大好きだ。私の乳輪をペロペロと舐めている。乳離れできていない子犬のような愛らしさに、思わず口元が緩む。

「んふっ♥」

きつと奥方様が恋しいのだろう。五年前の大火事でレーヴェエ家の御夫妻は命を

落とした。死んでしまった家族を蘇らせることはできない。だが、新しい家族を作ることはできる。

（可愛い坊ちゃん♥ ああ、可愛いわ♥ 本当に可愛い♥ とっても可愛い♥ 食べちゃいたい……♥）

私は膣を引き締める。喜悦の絶頂に達し、火照った子宮が震える。鍛えた腹筋がピクつき、脈動する男根を搾り上げる。

「ヴォルフ坊ちゃんうっ……♥ 私の膣内なかにつ♥ 濃い精子を注いでっ♥ はあっはうっ〜♥ 胎にレーヴェ家の遺伝子を植え付けてえっ♥ イっくうっ♥ イくっ♥ イくっ♥ イくっ♥ イくっ♥ イくっ♥ イくっ♥ ああ〜

♥ あひいっ ♥ イっぢやううっ〜♥

「んっ……！ くうっ……！ 出るっ……！！ 出ちやうっ！！」

膣圧を撥ね退けて、勃起オチンポが力強く脈打つ。元気な精子が子宮に解き放たれた。雄々しい遺伝子が私の卵を求めて泳ぎ回る。

ヴォルフ坊ちゃんの両脚は太腿までしか残っていない。踏ん張りがきかない下半身で、私のオマンコを突き上げてくれる。感涙を抑えきれなかった。私は幸福の絶頂にいる。悦びのあまり、首が振じ切れそうだった。

「んふっ ♥ くふふっ ♥ はあはあっ ♥ はああっ〜♥
なんてご立派……♥
カレンティアのオマンコは坊ちゃんのオチンポに夢中ですわ……♥
ほあらあ ♥

子宮が精子を吸い上げてるっ……………♥」

「はあはあ……………。赤ちゃん……………できたら……………。どうするの？ 君を愛してるけど、出産するには……………」

「ヴォルフ坊ちゃん。そんな心配はおやめください。メイドが御主人様に身を捧げるのは当然ですわ。それと、今はカレンティアとお呼びになって……………♥ そのほうが馴染みますわ」

ヴォルフ坊ちゃんの唇に人差し指をあてる。私は書斎の鏡を見た。主人と交わる淫らなメイドが映っていた。優雅な白金髪と精緻な美貌が気に入っている。私とヴォルフ坊ちゃんの娘に相応しい。女盛りの若々しい肉体は稚児を欲している。

毎夜、ヴォルフ坊ちゃんとの逢瀬は欠かしていない。遠からず私の胎には生命が宿り、念願の母胎となるだろう。豪雪で閉ざされている間は誰の邪魔も入らない。

「今晚の夕餉ゆうげは何かな」

射精で体力を使って、ヴォルフ坊ちゃんはお腹が空いてきたようだ。私の乳首を甘噛みしてくる。けれど、母乳を飲ませてはあげられない。まだ子供を一人も産んでいない身体だ。

「ヴォルフ坊ちゃんが大好きなポークシチューの予定です。夜も頑張れるように……
♥ あんうっ ♥ んんうっ……
♥ あんっ ♥」

ピンっと背中を反らし、上下運動に媚体を揺さぶる。食材の仕込みは済ませている。凍らせた豚肉は暖炉ですぐに解凍できる。もう一回戦くらいは楽しんでもいい。

「続けるの？」

「ヴォルフ坊ちゃんもそうでしょう。オチンポは素直ですわ。私を孕ませがっている……♥ やっぱり若女の身体は抱き心地が違うのかしら？ 張りのある大きな乳房、引き締まった腹回り、それでいながらお尻もふっくらしておりますものね。ふふふふっ♥」

「からかわないですよ。それじゃ、僕が好色貴族みたいに聞こえる」

ヴォルフ坊ちゃんは肘先で私の爆乳を小突く。家事では邪魔になる大きすぎる乳房だ。けれど、子育てではきつと役立つ。懐妊した暁には、さらに成長する予感を覚えた。

おおうり
大瓜と見間違える豊満なおっぱい。これは未開花の蕾だ。つぼみ女から母になったとき、乳房は一段と膨れ上がる。孕み腹の母胎となり、赤ちゃんを産み落とす日が待ち遠しい。

「あああんっ♥ あんっ♥ あんっ♥ あんっ♥ あんっ♥ あんっ♥ あんっ♥ んあ
ああっ〜〜♥」

甲高く嬌声を呻く。溢れだした精液と膣汁が泡立ち、汗ばんだ結合部から淫臭が立ち昇る。汗で湿った生肌から雫が滴り垂れた。

(ああっ♡ あとちよつとでいくっ……♡ ヴォルフ坊ちゃんの射精に合わせてアクメしたいっ♡ 我慢……我慢に我慢して……解き放つ……♡ この快感病み付きになるっ♡)

私は齒を食いしばって、快感の荒波に抗う。セックスの佳境に差し掛かった、まさにその時だった。

——書齋の扉がバンツと勢いよく開き、元気いっぱいの愛娘が飛び込んできた。

「お母様！ ごはん！ ごはんっ！ ごはんっ！！ お腹が空いちちゃった！！ ……
お母様？ お父様？ なにやってるの？」

セックス中の両親を目撃し、無垢な少女は両目をきよとんと丸くしている。

「ダザリーヌ！ 御主人様の書斎に入ってきて来るときはノックをしなさいっ！
いっ、いつも言っているでしょう！」

叱りつけた勢いで我が身の痴態を誤魔化す。心臓の鼓動が跳ね上がっていた。
頭が真っ白になった後、大慌てで恥部を隠した。

開けさせていたメイド服の上衣を直す。ボタンを閉めて乳房を収納する。焦っ

てボタンがなかなか閉まらない。

(まったくもう！ 困った娘だわ……!! 誰に似たのかしら……!?!? あらやだ……! ボタンを掛け間違ってしまったわ！)

脱ぎ捨てた下着が床に転がっている。そちらは回収する余裕がない。

「そうだった！ またノックするの忘れちゃった。ごめんなさい。お母様。てへ♪」
「てへ♪ じゃありません！」

「だってー。お腹すいちゃったのー！ ペこペこー！」

私をお母様と呼ぶ幼女は、四年前に生まれたヴォルフ坊ちゃんの娘ダザリーヌだ。てんしんらんまん天真爛漫で、寝ているとき以外は春風のように飛び回っている。

「子供部屋に戻っていなさい。すぐに夕食を作って差し上げますから」

「はい。ところで、お母様？ お父様と何してるの？」

私の顔は引きつった。子供は遠慮を知らない。

幼女の好奇心を刺激してしまったらしい。性的知識が皆無なダザリーヌは、私とヴォルフ坊ちゃんが何をしているかなど、察せられるわけがなかった。

（ああっ！ もうっ！ もうっ!! ど、どうしましょう？ まずはヴォルフ坊ちゃんにオチンポを引き抜いてもらって……。いいえ、結合部はスカートで隠れているわ。これならオマンコに挿入しているとは分からない。だったら、このまま誤魔化してしまえ……!）

深呼吸で平静を装う。車椅子に座るヴォルフ坊ちゃんは現実逃避で、窓の外を無言で眺めている。顔色は熟れたリンゴのように真っ赤だ。

きつと私も同じ顔色になっている。

「私は御主人様を人肌で温めているのですよ。冷たい風が入って来るから、扉を閉めて出ていきなさい」

「お父様。寒いのか？」

ダザリーヌは書斎から出て行こうとしない。

（――あつ。これは不味い）

いい具合に誤魔化せたと思ったのに、私は言い訳をしくじった。

「私も手伝うわ！ 寒がりなお父様を温めたい！」

長女のダザリーヌは絶望的に察しが悪い。次女のアヴェロアナだったら、今頃は空気を読んで出て行ったはずだ。

私はどうしたものかと頸くびを摩さする。

「……お姉ちゃん。……ダザリーヌお姉ちゃん。お父様とお母様が困ってる。勝手に書齋に入ったらダメなんだよ」

アヴェロアナがダザリーヌの手を掴んで引っ張った。三歳の妹、四歳の姉。一

つ違いの姉妹は妹のほうが年上に見えてしまう。

「アヴェロアナ、良いところに来てくれたわ。ダザリーヌを連れて行ってくださいね。早く書斎から出ていきなさい」

「はい。……お母様」

「えー。ちよつと！ ねえ。引っ張らないでー。アヴェロアナちゃん」

「こっち。お姉ちゃん。行こう。お母様に怒られちゃう。ママにも叱られるよ」

アヴェロアナの控え目な性格は、元氣過ぎる姉の反動かもしれない。だが、言われた通りに動いてくれる。私としてはありがたい。三歳児とは思えぬ聡明さだ。

ダザリーヌも賢い娘である。けれど、素行に結び付いていない。

娘達は書齋を出ていき、ドアが閉じた。廊下で騒いでいる声が聞こえる。

私とヴォルフ坊ちゃんは、示し合わせたように安堵の溜め息をついた。

「吃驚びっくりしたよ。心臓が飛び出すかと思った。セックスの現場を娘達に見られるところだった」

「メイド服のスカートを脱がなかったのは正解でしたわ。……書齋の扉にも鍵が必要ですね」

「そうかもしれない」

「まあ……大人になったら私とヴォルフ坊ちゃんが何をしていたか気付くと思いませんよ」

「やっぱ見られたかな？」

「はい。ダザリーヌにはオツパイ丸出しの痴態をがつつり見られちゃいました」

子供に見られて、私とヴォルフ坊ちゃんはすっかり興奮めしてしまった。

このまま子作りを続ける気になれず、挿入状態のオチンポを引き抜く。結合が解除され、オマンコは名残惜し気にぬぢよりと粘液の細糸を引いている。

「お掃除フェラをいたしますわ」

舌先でヴォルフ坊ちゃんのオチンポを綺麗に舐め取る。私はセックスの終わりにフェラで淫行の汚れをお掃除する。

「んうっ♥ んぢゅうううっ♥ んぢゅっ♥ んうっうお っ………♥」

尿道の残滓を吸い出していると、ヴォルフ坊ちゃんは射精し始めてしまった。口内に苦甘い精液が広がる。私は頬を膨らませて、舌で掻き混ぜる。飲み干すコツは唾液を含ませること。

「んふっ……♡ んあああ〜♡ あっ♡ ごくっんう♡」

私は口を大きく開いて見せつける。舌に貯めた精液を一気に嚥下した。本当は子宮に収めたかったが、娘達の乱入が入ってしまったてはしょうがない。

「それでは夕食の支度をしてきます。何かあればお呼びください」

ヴォルフ坊ちゃんの乱れた服装を整える。二度の射精で萎んでしまったオチンポを優しく脚絆スボンにしまった。

「ありがとう。本当に……。でも、必要以上に尽くさなくていいんだよ。僕はここで静かに暮らすだけで幸せだ。こんな不具の身体じゃ、奥さんだって娶れない。だというのに、可愛い娘達を与えてくれた」

「坊ちゃん……?」

「僕は人生の高望みをしていないんだ。復讐だとか、失ったものを取り戻すだとか、人並以上になりたいだとか……。欲張りは性に合わない」

「私は強欲な女かもしれませぬね。御主人様の望みを叶え、御家を繁栄させたいですわ。ヴォルフガング・ゴットフリート・レーヴェ卿の手足となる。隷属の誓いは永遠に……。忠実な手足としてお仕えいたしますわ」

子宮に両手を添える。御主人様の精子を授かった胎。懐妊が待ち遠しい。ひたすらに愛おしいのだ。

(三人目の娘が産まれたら次は四人目……。レーヴェ家の子供に相応しい首を探さなければいけないわ)

莊園の農民からは選ばない。レーヴェ家の領民を生贄にすればヴォルフ坊ちゃん
が悲しむ。それに、たった二〇〇人程度の閉鎖的な田舎で失踪者が出たら怪しまれる。

——かといって、隣町の人間を使うのは癩だ。私は町の奴らが好きになれない。

危険も大きい。大きな町には小賢しい聖職者がいる。司祭どもは私の正体を見破る。

既に一度、手痛い失敗を犯した。あれは四年前、ちようどダザリーヌを産もうとしていた時期だ。知り過ぎた司祭は、自殺に見せかけて始末した。けれど、新しい司祭がもう赴任している。

二度も続けて殺せば、いくら間抜けな教会でも気付く。手荒な手段はもう使えなくなつた。

(次も遠方から誘き寄せた人間を使う。もちろん、誰でもいいわけじゃないわ。

善し悪しはとっても大切。レーヴェ家の貌かおとなるのだから……)



闇樹館の食卓では、ダザリーヌが会話の中心となる。

この子が産まれてから、レーヴェ家は本当に賑やかになった。しかし……本当によく喋る娘だ。そこが可愛くもあるわ。底抜けに明るい性格は、両親のどちらから受け継いだ形質？

育てている私にも分からない。だが、どちらかといえれば大火事で家族を亡くす

前の御主人様に似ているかも？ 手足を失う前のヴォルフ坊ちゃんは好奇心が旺盛だった。けれど、ダザリーヌほど騒々しくはなかったと思う。

次女のアヴェロアナは読書家だ。まだ三歳だというのに、書庫の童話集を読み漁っている。特に冒険譚が好きなようだ。内向的な性格だけど、冒険者に強い憧れを抱いているらしい。

今は本を読んで想像を膨らませるだけで満足している。成長して大人になったら、この子はどんな令嬢になるだろう？

姉妹の性格は正反対に見える。だけど、根幹は似ているのだと思う。相性も抜群だ。

ダザリーヌとアヴェロアナは喧嘩をまったくしない。いつも二人で仲良く遊んでいる。

「——お母様はどんな冒険をしてきたの？」

ダザリーヌが私に問いかける。

「僕も気になる。カレンティアは帝都で有名な冒険者だった。そう聞いたよ」

ヴォルフ坊ちゃんも興味を示している。アヴェロアナは食事の手を止め、私を見ていた。つまり、全員が私の過去を知りたがった。

帝国辺境の北部で暮らす私達は、山中に広がる莊園が世界の全てだ。外界の情報は隣町や行商人を介して伝わる。都会の冒険者が辺境のド田舎に来ることはない。話を聞きたがる気持ちも分かる。

「えっと、そうですね……」

意識の微睡まどろみが弱まっている今、記憶を掘り起こしたくはなかった。想いは繊細だ。封じ込めた自我が呼び覚まされる。だけど、ちよつとした昔話なら平気だと思つた。

「私は――」

ヴォルフ坊ちゃんちゃんと娘達はカレンティアの冒険譚を喜んで聞いてくれた。しか

し、自分語りには痛恨の過ちだった。



頭痛がする。ヴォルフ坊ちゃんに心配されてしまった。だけど、我慢できる程度
の痛みだ。

私を悩ませた立ち眩^{くら}みはすぐに鎮まった。

夕食は何事もなく終わり、食器の片付けを済ませた後、お風呂の準備を整える。
湯浴みの順番は最初にヴォルフ坊ちゃんと私、次にダザリーヌとアヴェエロアナと

決まっている。

就寝前に戸締りを確認して、私はヴォルフ坊ちゃんの寝室で同衾どうきんする。

一緒のベッドで寝るのはセックスをするためでもあるし、ヴォルフ坊ちゃんのお世話がしやすいからだ。両足がないから自力では歩けない。車椅子はあるけれど、望む方向に車輪を転がす腕もないのだ。

(私は――)

主寝室の暖炉に視線が吸い寄せられた。燃え盛る薪がパチパチと音をあげてい

る。思い出す。帝都の酒場で仲間達と暖炉の近くで語り合った。店主に促されるまで居座った。酔っぱらった私の肩を支える彼がいる。

ふざけるな。彼とは誰だ？

私には御主人様しかいない!!

私の身体に触れてよい殿方はヴォルフガング・ゴットフリート・レーヴェ卿だけだ。私に恋人はいない！帝都の婚約者など存在してはならない！

(私は――)

娘達が寝静まった深夜は大人の時間だ。

いつものようにヴォルフ坊ちゃんとの純愛セックスで忘れさせてやる。

今度こそ、誰にも邪魔されずに性交を愉しもう。私はベッドで騎乗位セックスを堪能する。

メイドの願いは御主人様の赤ちゃんを妊娠すること。ヴォルフ坊ちゃんと毎晩の営みで子作りに励んでいる。

性奉仕に集中しなさい。下らない妄想だ。メイドの使命を果たせ。

（——違う！ 私は冒険者だ!!）

溢れ出た主人格の記憶を引き裂く。

私はレーヴェ家の使用人。ヴォルフ坊ちゃんにお仕えするメイドだ。

冒険者であったのは過去。もはや忘れ去られるべき過ぎ去った経歴だ。いや、違う。消してしまえ！ 私は冒険者なんかではなかった。ずっとレーヴェ家の使用人。生まれながらに忠実な奴隷メイドだ。

（――違う！ 私はメイドなんかじゃない！）

与えられた女の幸せに満足すべきだ。喚きたてるな！ 黙りなさい！

（——貴様こそ黙れ！ 化け物め！ 私の身体から出ていけ！）

こんなことは初めてだ。私の意識が押し出される。憑代よりしろになった女は喚き続けている。

腹立たしい！ 脳髓を潰したくなる！

忘却の彼方に追いやった過去が蘇る。

夕食の自分語りをしたせいだ。過去を掘り起こしが、目覚めの切っ掛けになっ

た。

「私は――」

やめろ！ 戯言を抜かすな！ 黙れ！ 忘れてしまえ！ お前はレーヴェ家の
メイドだ!! ヴォルフ坊ちゃんの手足になれ！ 奴隷女に頭はいらぬ!!
御主人様の前で私に恥をかかせる気なの!?

「――私は母さんを探しに来た」

カレンティアの自我を侮あなどっていた。このままでは肉体の主導権を奪われてしま
う。

私は今になって後悔する。

この女の首を刎はねて、氷漬けにするべきだった。なんたる手抜き……！ 痛
恨の失策……!! この美貌でヴォルフ坊ちゃんを愉しませたかった。私は判断を
誤った。

「ああ……♥ んうっ……っ♥」

最悪だ。肉体を奪い返された。

私が味わうはずだった絶頂をこの女が盗んでいる。

「はあはあ……。うっ……。頭が痛い……。なにこれ……。そうじゃなくて私は……。？　なんで、こんなこと？　ここは？　どうしてヴォルフ GANGさんとセックスしいっ……。んあっ♥」

ヴォルフ坊ちゃんのオチンポが射精していいのは、私のオマンコだけだ。それをこの女はっ……。!!　憎い！　憎い！　憎い！　殺してやりたいわ……。!!

——私の御主人様を寝取るんじゃないっ!!

【第一章】爆乳母娘の運命　　く未亡人ベロニカと女冒険者カレンティアく

冒険者カレンティアがレーヴェ家の使用人となる二週間前の出来事であった。

今日は十五年前にこの世を去った父親の命日だ。仲間達から「生き急ぎの冒険野郎」と言われた父親らしい最期だった。

親しい者達は父親の早世を嘆き悲しんだが、当人は自分の死に方に満足していたはずだ。少なくともベッドの上で安らかに眠る、そんな死に方は望んでいなかった。

「クロヴィス！　ちよつと！　ちよつとお！　起きて！　起きなさい！　貴方っ

て男は……！　もう！　ろくでなし！　わざとでしょ!?　私！　すっごく怒ってるわ！」

シャワー室から出てきたカレンティアは、惰眠中の恋人に蹴りを入れた。ベッドから転げ落ちたクロヴィスは、冬眠明けの熊みたいに起き上がった。

「ふああ……。ぐええっ！　暴力反対……！　たくっ……。カレンティアは最高の目覚まし時計だな。それで、何の話だ？　何に怒ってる？　トイレの便器が上がりっぱなしだったか？　それとも今日はゴミ出しの日だっけ？」

「昨日のセックス！　膣なか内に出したでしょ」

「……酔って覚えてない。記憶にございませんな」

「依頼報酬を横領した組合長みたいな誤魔化しはやめなさい！ 腹が立つっ！」

「じゃあ、俺が膣内射精した証拠は？」

「物証があるわ。シャワー浴びてたら精子が股から垂れてきた」

「そいつは……。カレンティアが両性具有だった可能性は？」

「あるわけないでしょ！」

「……昨日の夕飯で飲んだ牛乳がヨーグルトになった可能性も」

「殺すわよ」

「痛っ！ 蹴るなって……！」

「はあ……。セックスしてる途中で気付かなかった私も私だわ。外出しの約束を

守る気なんてなかったのね……。最低の男。赤ちゃんできたらどうするつもりよ?。」

「そうだな。……きつと俺は立派な父親になるぞ！　わははは！」

「黙りなさい」

「はい。すみませんでした。確信犯です」

「私よりも冒険者ランク低いくせに……。私より立派な親になれるわけ？」

「俺の心を挟らないでほしい。言葉の刃は傷つくから……」

「じゃあ、変な悪戯しないで。危険日だったら本当に孕んでたかもしれないのよ」

「ふざけてたわけじゃない。真面目な話、そろそろ考えてくれよ」

「考える。もうちよつとだけ時間が欲しいの。私だって……時期を選んでもうだけなの……」

「責めてるわけじゃない。俺は待てと言われれば待つ。忠犬みたいな男だからな。……ただなあ、この前、受付嬢に文句を言われた。結婚してるんだから指輪くらい付けろってさ」

「あの受付嬢、私には態度きついよねえ。嫌な感じだわ。狙われてるんじゃないのー？ 人の彼氏を奪いそうな性格してると思うわ。男の冒険者にだけ愛想を振りまく可愛い子ちゃんだものねえ」

「妙な勘ぐりはやめとけて……。今は俺らの担当受付嬢なんだから……。でもよ、

勘違いされるのも分る。付き合ってもう四年目だぜ」

「違う。五年目」

「え？ いやいや！ 四年だろ？ いくら俺でも間違わない。ひっかけか？」

「恋人になって五年目。四年目なのはセックスするようになってから」

「……ああ、そうかも。でも、ある意味、俺が正しくない？ だって、ほら、その……男女関係ってそういう……感じじゃん？」

「呆れたわ。クロヴィスの脳細胞って睾丸についているんじゃないの？」

「ははっ……！ 手厳しいな。そういう新説が発表されてても、俺は頭ごなしに否定はしないぜ」

濡れたプラチナブロンドの髪をクロヴィスは撫でてくる。カレンティアはそっけなく恋人の手を叩いた。

「私を猫か何かと勘違いしてない？」

「機嫌を直してくれよ。悪かった。でも、子供が出来たら……その……！ 結婚の話当真剣に考えてくれると思っただ！ 悪気はあったけど、本気なんだよ！」

「その堂々とした犯行声明、反応に困るわ。クロヴィスのことは好き。でも、結婚の話はもうちょっと考えさせて……。家族のことは真剣に考えたいの。だって、今日は……」

「親父さんの命日だ」

「……ええ。そう。そうよ。……なんで？」

「え？ 当たり前だろ？」

「クロヴィスって私の誕生日、付き合い始めた記念日、ゴミ出しの日は忘れてるくせに、父さんの命日はしっかり覚えてるのね。なんで？」

「そりゃあ、すごい人だったからな。帝都の冒険者じゃ伝説だ。憧れだよ」

「どうかしら。十五年も経てば忘れられていくわ」

「俺は忘れちゃいけないぜ。故郷の村を救ってくれたんだ」

「伝説は塗り替えられるものよ。お墓参りに来てくれる人も少しずつ減っているわ」

「ちよっ、待てよ。カレンティア。一人で墓参りに行く気か？俺も一緒に行く！」

「一緒に来るつもり？」

「当然だろ。毎年そうだったじゃないか」

「クロヴィスは冒険者組合の査定があるでしょ。そっちに集中しなさい。私はランク昇格がもう決まってるわ。貴方は？今回の査定で良い成績を残せなかったら、私の三つ下になるわよ。ちよっとは焦りなさい」

「分かってるよ。くそ……。で、何日くらいで帝都に帰ってくる予定なんだ？」

「そうね。十日くらい？いや、二週間？もつとかかるかも……」

「長くないか？俺の忠誠心は犬並みだが、孤独耐性は兎並みなんだぜ？」

「みつともない泣き言ね……。ヒースウッド修道院にも立ち寄るつもりだから。

一週間はかかるわ」

「ヒースウッド修道院だって？　行方不明になった母親の件？　まさかベロニカ

さんの足取りが掴めたのか!？」

「いいえ。失踪して四年目だから、母さんの私物を処分してくれってさ」

「……酷いな。荷物を取りに来たってか？」

「むしろ修道院長の温情じゃないかしら？　母さん消息不明で死んだも同然」

「まだ分からない。ベロニカさんだって現役時代は凄い冒険者だった」

「ええ。でも、今まで手がかりは見つかっていないわ。いなくなっって四年よ？

頃合いでしょ。……そんな母さんの部屋を四年間もそのままにしてくれたんだもの。かなりの特別扱いだわ。修道院に入るとき、寄付金をたんまりと払ったのかしら」

カレンティアの母親ベロニカは四年前に失踪していた。

(母さん……。どこへ消えてしまったの……。?)

元々は帝国貴族の令嬢だったが、若い男と駆け落ちして冒険者になった。温厚そうな見た目に反して、破天荒な人生を歩んでいる母親だった。夫が冒険中に命を落としてからは、一人娘のカレンティアに愛情を注いだ。娘の成人になると、冒険者を正式に引退。ヒースウッド修道院に隠居して静かに暮らしていた。

「ベロニカさん……。何があつたんだらうな。友人を訪ねに北方へ向かったところまでは分かつてるんだろ？」

「ええ。もっと正確な場所を誰かに伝えてくれば、探しに行けるのだけど……。四年も経つと……。私も……。諦めがつくわ」

「カレンティア……」

「たぶん、事故に遭つたんだと思うわ。北方は整備されてない道も多いし、母さんが北方に旅立つたのはちょうど今頃。冬が始まる季節だったわ。……。厳冬期の遭難死は珍しくない」

「なあ、俺もやっぱり付いていこうか？ 一人じゃ大変だろ。英雄の墓参りもし

たいぜ」

「いいえ。ダメよ。ちゃんと査定を受けなさい。やる気を出させてあげましょうか？
査定に受かったら結婚指輪を買っておきなさい。左手の薬指に指輪を嵌めてあげる」

「本気だよな？」

「ええ。冒険者カレンティアに二言は無し！ 出来たてほやほやの人妻になってあげるわ。それじゃあね、期待してるわよ。クロヴィス♥」

カレンティアは一人で帝都を旅立った。

十五年前に亡くなった父親の墓参り、四年前に失踪した母親の私物整理。この

世から去ってしまった両親を弔うための旅である。

カレンティアが恋人のクロヴィスと新しい一歩を踏み出すために必要な行為だった。

査定の結果次第で結婚すると約束したが、仮にクロヴィスが昇格できずとも、自分から結婚を申し込むつもりでいた。



カレンティアが赴いた父親の墓所は、生まれ故郷の村にある。帝都の距離から

は乗り合い馬車で約二日ほど。急げば一日に旅程を短縮できるが、カレンティアは長旅をのんびりと楽しみたい気分だった。

父親の墓を訪れる人は少なくなった。

慰霊目的なら帝都の記念碑に手を合わせるだけで十分過ぎる。親族のカレンティアですら命日に合わせて墓参りしていない。

「まだ花束が手向けてくれる人がいるのね……。父さんってば……。ふふふつ。母さんが言ってた通りだわ。本当に人気者……。私が死んでも、帝都の大通りに記念碑を立てられたり、十五年経っても花を手向けてくれる人がいるとは思えな

い」

近隣に住む村の人々であろうか。律儀なことだと思う。いくつかの花束が供えられていた。

「冒険者になったとき、必ず父さんに追いつくって宣言したわ。母さんも応援してくれた。でもね、すごく遠いの……。本当に遠いわ。英雄の背中はずっとも見えてこない。父さんはどれだけ早く走っていたの？」

カレンティアは父親が愛飲していたお酒を墓石に撒いた。

「父さんに謝らなきゃいけない。ごめんなさい。結局、母さんは見つからなかったわ。冒険者組合に搜索願いを出したけど……。取り下げてきた。もう四年……。潮時だわ。母さんが自殺したと思ってる人もいる。修道院の人はそう考えている

みたい……。違うよね……。母さんは自分で死んだりしないわ……。いくら父さんが恋しいからって……」

空になった酒瓶の蓋を締める。

母親と墓参りした幼少期を懐かしむ。握力が弱かった子供の頃は、どうやっても瓶の蓋を回せなかった。

「私は事故だと思ってるわ。ほら、母さんって、無計画なところがあるからさ。私を妊娠したのだって事故なんでしょ？ ふふっ……！ 昔ね、母さんから聞いたちゃったの。避妊に失敗しちゃうのが母さんらしい。でも、こうして私が産まれたわけだから感謝すべきかしら？」

近況報告を一通り終える。そして、本題に入る。

「結婚しようと思う。相手は冒険者のクロヴィス。お父さんに助けてもらったことがあるんだって……。最初は私に近づく口実だと怪しんだわ。そういう奴が多かった。でも、クロヴィスは嘘付きじゃなかった。……。あつ、でもね、お父さんを過大評価してる。美化っていうのかしら？ きつと実物に会ったら失望しちゃうだわ」

カレンティアは嬉しそうに笑う。

「子供が産まれたら、お父さんの名前をもらおうわ。男の子だったらね。女の子だったら母さんの名前。私達の子供が冒険者になるかは分からない。……。ああ、それ

とね。これは余談。お母さんの実家から使者が来たわ。最初は伯爵家の執事だったかしら。次はお祖父ちゃん……。本家の血筋が危ういから、戻ってきてくれてさ。……泣きつかれちゃった」

伯爵家の御家騒動はクロヴィスにも話していない。

カレンティアを産み育てたベロニカは、由緒正しい伯爵家の令嬢だった。出奔したときに貴族籍は抹消されている、と今まで思っていた。カレンティアも母親からそう聞かされていた。「血筋で大貴族に返り咲こうだなんて思っただけじゃないわ。カレンティアは冒険者の娘よ。弁えておきなさい」と言い聞かされて育ったのだ。

——しかし、カレンティアの祖父は愛娘が戻ってくる日を待っていたらしい。
ベロニカの貴族籍は抹消されなかった。

家督はベロニカの兄が継いだ。その兄も妹には甘く、貴族籍を残した。これが後々の現在になって火種となる。

ベロニカの兄は病弱で子に恵まれず、後継を作らずに亡くなった。つい一年前に持病の悪化で命を落とした。未来を託したはずの後継者に先立たれ、伯爵家の家督は老い衰えた祖父のところに戻ってきた。

本家筋が断絶すれば、爵位と財産は分家に奪われる。

そこで孫娘のカレンティアにお呼びがかかった。

「はあ。すごく面倒くさいでしょ？ 駆け落ちした母さんを勘当したくせに……いや、伯爵家の家宝を盗んだ母さんもかなり悪いけど……。いいえ、かなり母さんが悪いわ。あと、そそのか唆した父さんも悪いと思う」

今さら伯爵家の家督を継ぐなんて無理だ。丁重にお断りした。しかし、伯爵家も引き下がらない。

カレンティアが持っている聖剣は伯爵家の宝物だった。駆け落ちしたベロニカが持ち出した盗品。こればかりは言い訳が通じない。今まで問題にならなかつた

のは、愛娘を窃盗犯にしたくなかった家族の情だ。分家に伯爵家の家督を奪われれば、そもいかなくなる。一種の脅しだ。

「母さんの搜索に伯爵家が協力的だった理由も納得したわ。お祖父ちゃん、かなり困ってた。可愛がってた息子に先立たれて、家出した娘は行方不明……。同情を禁じ得ないわ。だから、私の子供を養子にする話は……。受けようと思ってるわ。もちろん、クロヴィスとも相談するけど」

カレンティアは泣き^{すが}継る老人の頼みを拒めなかった。考えてみれば祖父は完全な被害者だ。そして加害者はカレンティアの両親である。盗品の聖剣を使わせてもらっている負い目もあった。

「そうそう。これも言っておかなきゃ。お祖父ちゃんからの伝言ね。お父さんを心の底から恨んでいる。あの世でぶち殺すって……。あの調子ならお祖父ちゃん
は長生きしそう」

カレンティアは長話の独り言を終えた。

父親への墓参りでやるべきことは為した。次は母親の私物を取りにヒースウツド修道院へ急がねばならない。

「そろそろ雪が降りそう。のんびりしてられないわ。あっ……。村の司祭様に母さんの名前を墓碑に追加してほしいって頼むんだった。私は母さんの娘だわ。大ポカする癖があるみたい」

行方知れずになって四年。ベロニカの亡骸は見つかっていない。だが、伯爵家が手を尽くし、カレンティアが冒険者組合に依頼を出しても見つからなかった。もはや望みは捨てるべきだ。

失踪した「ベロニカ」の名を墓碑に刻んでもらう。墓所を管理している村の司祭に頼めば、引き受けてくれるだろう。

「——え？」

カレンティアは信じられないモノを見つけてしまう。銀製の指輪が光っている。

父親が眠る墓石の影に指輪が埋められていた。

拾い上げて確信する。父親と母親の名前、結婚した日付が刻まれている。カレンティアは聞かされていた。父親は金の指輪、母親は銀の指輪。これはベロニカの結婚指輪で間違いない。

「なんで母さんの結婚指輪がここに……?」

未亡人となった後もベロニカは結婚指輪を外さなかった。行方不明になった四年前、ベロニカは左手の薬指に結婚指輪を嵌めていたはずだ。

夫婦愛を誓った結婚指輪が墓所に埋められていた。これは何を意味しているのだろう。カレンティアは摘まみ上げた銀色の指輪を見詰める。

「まさか……！　母さんがここに……!?」

結婚指輪に経年劣化の汚れはなかった。泥はこびりついておらず、綺麗に磨き上げられている。つい最近になって埋められたような感じだ。

カレンティアは毎年、父親の墓参りをしている。一年以上前に埋められた可能性は低い。去年は指輪なんか埋められていなかった。

「ありえないわ。母さんがここに来たなんて。きっと、誰かが届けたんだわ」

母親が自分で埋めに来たわけがない。失踪中の母親が戻ってきたなら、娘に連絡を寄こさない理由はない。

そもそも十年以上も大切にしてきた結婚指輪を外すのはおかしい。

母親の結婚指輪を見つけた衝撃は大きく、カレンティアは父親の墓前で立ち尽くしていた。

「おおお……。カレンティアちゃん。そろそろお墓参りに来る頃合いだと思っておったよ。偉大な父君もお喜びだろう。帝都での活躍は村にも届いておるよ。すっかり名うての冒険者じゃな」

ながほうき
長箒を握った司祭がカレンティアの前に現れた。いや、突然現れたのではない。カレンティアが呆然自失だったので、近づいてきたことに気付けなかったのだ。

「司祭様……！ お久しぶりです……！」

「まあ、一年に一度しか会わんし、お久しぶりじゃな。大きくなったのう。母君

とそっくりの美人さんじゃ。おや？　もしやお父君と話しておられたのかな？　お邪魔虫になってしまったのう。儂はあっちを掃除しておるよ。すまんね」

「いえ、違います！　待ってください！　司祭様！」

「ん？」

「あの……これ……。お父さんのお墓に埋まってたんです。母さんの指輪が……」
「指輪？　ベロニカ様の……？　しかし、ベロニカ様は四年前に失踪してからずっと……」

「はい。母さんは見つかってません。でも、ここに……！　お父さんの墓前で結婚指輪を見つけたんです。司祭様、誰かを見ませんでしたか？　この指輪はつい

最近、誰かが置いていったんです！ たぶん、お父さんの命日に！ たぶん二日前！ お墓参りした人はいませんか!?」

「二日前なら村の者達で花束を手向けたぞ。その時はベロニカ様の指輪なんてなかったのう……。墓参りの後に、村の者達で酒を飲み交わしてから……。儂が後片付けを……。ああっ、そういえば夕暮れに……。村への帰り道で奇妙な女性とすれ違った」

「奇妙な女性!? きつとその人よ！ どんな人でした？ 顔は？ 年齢は？」

「お、落ち着きなされ。顔は見ておらんよ。奇妙というのは、面貌を隠しておったのだ。奇天烈な格好じゃったよ」

「奇天烈な格好……?」

「騎士のヘルムを被っておった。厳つい漆黒の兜じゃ。……なんというか……頭部だけなら立派な騎士じゃったよ。訳ありに見えたので、その女性に近づこうとは思わなかった」

「騎士兜で顔を隠していたのに、なぜ女性だと? 話してもいないんでしょう?」

「その女性は身籠っておったのだ。奇天烈な格好と言ったろう? 立派な騎士装備は頭部の兜だけじゃった。身体はゆったりとした妊婦服を着ておったよ。妙齢の女性らしい肉付きであったし、お腹は遠目からも臨月だと分かるほど膨らんでいた」

「臨月の妊婦が騎士の兜で……？　すごく不審人物ですね」

絶対に村の人間ではない。もしカレンティアが出くわしていたら絶対に正体を探っていた。

「うーむ。……だが、僕は話しかける気になれなかった。吊いの花束を持っておつたし、素顔を隠す理由があるのだと……。深入りはしたくなかったのじゃ。大貴族の夫人とはそういうものじゃろ？　それにカレンティアちゃんのお父君は伯爵家と因縁がある。それ絡みかと……」

「伯爵家の人間じゃないわ。お祖父ちゃんは失踪した母さんを見つけ出せなかったと言っていた。北方の辺境で足取りは途絶えてしまった。そこから先は……」

この指輪をお墓に埋めた妊婦は……どこで母さんの結婚指輪を……？」

「ん？ カレンティアちゃん。その指輪……見せてもらってもよいか？」

「ええ、もちろん。どうぞ」

「銀色の指輪……。この輝き……。まさか……。いや……。儂の見間違いじゃな……。そうに違いない」

困惑顔の司祭はカレンティアから受け取った指輪を突き返した。言葉を嚙み、居心地悪そうにしている。

「何か気付いたんですね」

「いやいや、儂の勘違いだ！ ありえぬ！ あの妊婦は黒髪……。髪の色が違っ

た。……はカレンティア様と同じプラチナブロンドの御髪じゃ。ありえぬ。歳も……。そうじゃ、たぶん年齢が違う。若い夫人であつた。絶対にありえん。見間違ひじゃ……」

ぶつぶつと司祭はつぶやいている。

口調は弱々しく、風の音で掻き消える。肝心の結論がカレンティアの耳には届かなかつた。

「司祭様……！ 教えてください。何か、気付いたのでは？」

「いいや、何も。儂は……ただ……その……。すれ違つただけで……。帰り道に……。だから……。はあ……。見間違ひじゃよ。だから、これから話すのは老人

の戯言だと思ってくれるかい？ カレンティアちゃん」

「分かりました」

「似てると思った。その……カレンティアちゃんに……。あの妊婦は変な格好をしているが……。冒険者はそういう格好をしたりもするじやろ。命日じゃったし、カレンティアちゃんかと思った。変な意味で捉えてほしくないのだが、胸回りの発育も……似ておったから……」

「司祭様、その程度で怒ったりしません。私のデカパイは帝都の酒場で飽きるほどネタにされましたから。揉もうとした男はボコボコにしてみましたとも。……えっと、つまり、その妊婦は私と同じくらいのバストサイズだったんですね。す

ごく助かりました。身体的特徴は大きな手掛かりです」

「そうではない……。その妊婦がカレンティアちゃんじゃないとすぐ分かった」

「髪の色が違ったから？ それとも妊娠してお腹が大きかったから？」

「騎士兜の妊婦は左手が光っておった。薬指に結婚指輪を嵌めておったのじゃ。

銀色の……。だから……。僕は……。その……。見間違いじゃ……」

「司祭様、落ち着いてください。思ったことを口にして。私は怒ったりしません！

……。この指輪を父さんの墓に埋めたのが誰なのか、知りたいだけです。見間違い

でもいいわ。私の目を見て話してください」

「カレンティアちゃんがその結婚指輪を見せてくれたから思い出したんじゃ。僕

は村の司祭じゃ……。新郎新婦に夫婦の誓いを立てさせる。ベロニカ様の結婚式も儂が執り行った……。この銀の指輪は間違いなく……。ベロニカ様の薬指に嵌められていた。儂が二日前にすれ違った奇妙な姿の妊婦も……。同じ指輪を……。薬指に……。していたような気がする……」

「二日前、この結婚指輪を見たんですね。見間違いだったら、司祭様は言い淀んだりはしないでしょ」

「その結婚指輪を妊婦が薬指に嵌めていた。気付いたのはさつきじゃ。間近で実物を見なければ、ベロニカ様の指輪だとは分からなかったじゃろう」

「そんな……。？ どうして身重の妊婦が母さんの結婚指輪を……」

誰かがベロニカの結婚指輪を奪い取り、何らかの経緯で騎士兜の妊婦の手に渡った。

そう考えたくなる。だが、指輪には夫婦の名前と結婚記念日が刻まれている。見事な銀製の指輪だろうと、普通の人間なら身に着けたくないはずだ。

中古の結婚指輪に値打ちはない。一目で盗品だと分かる。

「……………」

購入後に盗品だと分かって、指輪を持ち主に返そうとした。

それもありえる。だが、司祭の証言によれば、妊婦は左手の薬指に指輪を付けていた。盗品を返そうとする高潔な人物にはそぐわない振る舞いだ。

「司祭様は二日前に墓所を訪れた騎士兜の妊婦が……私の母さんと思えますか？」
カレンティアは勇気を振り絞って問いただした。司祭が気まずそうに、この場から逃げたがっているのは、きつとこの質問が怖いからだ。

豊満な乳房の女性。妊娠していることを差し引いても、カレンティア並みなら、強く印象に残る。カレンティアの爆乳は母親から遺伝だった。四年前に失踪したベロニカは大きなバストを誇る美女だった。

「あつ、ありえんよ！ ベロニカ様のはずがない！ あの妊婦は長い黒髪じゃった！」

騎士兜で頭部を覆っていたのなら、黒髪はカツラかもしれぬ。

「……………」

カレンティアはあえて指摘しなかった。

司祭が強く否定するのを望んでいた。二日前に現れた妊婦が、行方知れずだった母親であるはずがない。

「年齢も合わない！ 儂が見たのは子を孕んだ夫人じゃ。ベロニカ様は四十路を超えておる……………」

「私が今年で十八歳。母さんは四十四歳だわ。さすがに妊娠は難しい年齢……………で
すね……………」

妊娠は難しい。客観的な事実だ。しかし、閉経していなければ不可能ではない。

カレンティアが断定を避けた。それにも理由がある。

(司祭様の言う通りだわ。絶対に……ありえない……。絶対に……)

伯爵家の跡継ぎが顕在化したのは、カレンティアの伯父が病没した一年前。しかし、以前から懸念はされていた。

実現はしなかったが、伯父夫婦が幼少のカレンティアを養女に迎える案もあった。

冒険者の父親は死んで英雄となった。「どこの馬の骨とも知れない男」は偉大な勇者に祭り上げられた。伯爵令嬢ベロニカの駆け落ちが貴族社会で許される風潮が生じたのだ。

伯爵家がカレンティアを迎え入れる。当然、未亡人となったベロニカも貴族に戻る。

十五年前のベロニカは二十代後半、まだ子供が望める年齢だった。

（母さんがヒースウッド修道院に入ったのは、伯爵家が水面下で画策してた再婚から逃げるため……。そんな噂を私は聞いた。たぶん、それは本当だわ。病弱だった伯父さんは自分に子種がないと知っていた。伯爵家のために母さんを……）

後継者を産む。貴族令嬢の大切な御役目だ。

本来なら実家から逃げたベロニカが悪い。裕福な暮らしの代償は政略結婚。大貴族に自由恋愛は許されない。

(……でも、十五年以上も前の話だわ。母さんの逃げ勝ちで終わったはずでしょ)

ヒースウッド修道院に逃げ込んだベロニカは時間切れを狙った。

閉経してしまえば伯爵家の計画は潰える。四年前の時点で勝敗はついた。

(四年前、母さんが行方不明になったとき、私は伯爵家の誘拐を疑ったわ。でも……当時の私以上に伯爵家は慌てていた。目撃情報に謝礼を払ったり、帝国軍にも搜索を依頼してたわ)

カレンティアが伯爵家に向けた疑いはすぐに晴れた。

伯爵家がベロニカを誘拐したお家騒動なら、皇帝に頼み込んで帝国軍を動かしたりはしない。かなりの金額を投入したと聞いている。伯爵家は行方不明のベロ

ニカを真剣に探し回っていた。

（私は母さんの失踪を冬の遭難と決めつけてしまった。でも、伯爵家の跡目争いなら……？ 本家は無関係でも、ひよっとしたら分家が……）

四年前だ。ヒースウッド修道院に保護されていたベロニカは初めて遠出した。それまでは亡夫の墓参り以外では俗世と関わらなかつた。

ちょうど四十歳のベロニカは油断していたかもしれない。

——もう子供を産める年齢ではなくなった。伯爵家も手荒な再婚はさせない。ベロニカはきつとそう思い込んだ。

事実、本家筋の人間はベロニカが思った通りだ。

結局のところ、祖父と伯父は家出したベロニカに甘かった。

父親の生前、さまざまな妨害は仕掛けてきたという。冒険者組合に圧力をかけたこともあった。だが、「屋敷から盗んだ聖剣を返せ」とは訴えなかった。

「母さん……生きているの……？」

カレンティアは結婚指輪を握りしめる。墓所で目撃された騎士兜の妊婦がベロニカだと決まったわけじゃない。母親の結婚指輪を薬指に嵌めていた。それだけなのだ。

「司祭様。村で一番の駿馬を私に売ってください。ヒースウッド修道院に行っています。母さんの私物を整理してほしいと頼まれてました。もしかしたら……、司祭様がすれ違った妊婦は修道院の人かも？」

「あ、ああ！なるほどのう。ありえる！いや、そうに違いない！ベロニカ様は失踪する前に、結婚指輪をヒースウッド修道院に置いていったのじゃろう」
「母さんが失踪して四年です。遺体の代わりに結婚指輪を埋めにきてくれたんでしょうね」

カレンティアと司祭はお互いに納得したふりをする。だが、この説には無理がある。

ベロニカは結婚指輪を寝るときでも外さなかった。肌身離さず、大切に身に付けていた。

そもそもヒースウッド修道院の使者として、騎士兜の妊婦が派遣されるだろうか。それこそ、ありえない人選だ。高価な結婚指輪を墓地に無断で埋めることだって奇妙だ。カレンティアや伯爵家の了解を得ず、そんな勝手をするとは到底思えない。

（母さんを探そう。この結婚指輪を墓所に埋めた妊婦が誰なのか突き止めるまで、帝都には帰らない。ごめん。クロヴィス……。やっぱり貴方も連れてくるべきだった。戻りは遅くなりそうだわ）

カレンティアは村で一番の馬を即金で買い取り、ヒースウッド修道院に急行した。

日没前に到着したものの、大きな問題が起きた。強行軍を強いた農耕馬は、厩舎きゆうしやの前で泡をぶくぶくと吹いて倒れてしまった。村で一番の駿馬だったが、所詮は農村の馬である。サラブレッドの屈強な馬とは違う。家畜の世話を担当する修道女からは「なんと惨い。どんな走らせ方をしたんですか？ この可哀そうな

子を屈強な軍馬とでも思っていたの？　はあ。なんて酷い人でしょう……。私が責任をもってお世話いたします。ですから、疲労が回復するまで、絶対に渡しません」と厳しく非難された。カレンティアは黙って頭を下げるしかなかった。

理由があつたとはいえ、馬を酷使してしまった。

罪悪感で胸が苦しい。あの馬が意識を取りもしても、再び自分を乗せてくれな
いだろう。だが、急がなければならなかった。父親の墓前で見つけた指輪を握り
しめ、カレンティアはヒースウッド修道院の門を叩いた。男子禁制の聖域。訳あ
りの貴族令嬢や未亡人が逃げ込む最後の砦。母親の部屋には失踪の手がかりが遺
されているはずだ。



その頃、騎士兜の妊婦は闇樹館に帰宅していた。馬から鞍くらと手綱を外し、自由にしてやる。レーヴェ家の馬は賢い。荘園の厩舎に一人で戻ってくれる。訓練の賜物たまものだ。

闇樹館にも厩舎はあるが、越冬の面倒を見る人間がいない。御主人様のお世話が最優先、大切な娘達の子育ても大変な時期だ。乳離れしたものの、今度は走り回るし、お喋りも止まらない。

「もうすぐ夕暮れなのに、まだ中庭で遊んでいるのかしら。もう初雪も降っているのに……」

長女のダザリーヌに比べ、次女のアヴェロアナは大人しい。活発な姉よりも内向的な妹のほうが扱いやすく思える。だが、本当に油断ならないのは、アヴェロアナだ。騎士兜で素顔を隠した妊婦は、身に染みて知っていた。

成長したダザリーヌは分別を弁えた人物になる。きっと幼少期の行動を恥じるはずだ。けれど、アヴェロアナは大人びていながらも、幼稚な冒険心を燃やし続ける。

見た目だけが淑女のように成熟するのだ。まさに母親とそっくりだ。

(お父様とお兄様の油断が今なら分かりますわ)

騎士兜の妊婦は長旅でついた汚れを落とす。薄汚れた姿で御主人様のお世話
はできない。怒られてしまう。旅用に自作した妊婦服を脱ぎ、タオルで汗ばんだ
身体を拭く。桶に溜めた湯が白い蒸気を上げていた。

「……………」

爆乳の谷間は汗がにじむ。昔からそうだった。

厚着をする冬場は真夏と同じくらい蒸れてしまう。乳房を覆っていたブラ
ジャーが外れると、心地よい解放感に満たされる。

茶黒の乳輪からミルクが湧いている。乳離れした娘達はもう母乳を吸わない。

それでも母胎は乳汁を生産する。これから生まれる三人目のために。

(胎動が強くなっているわ。旅の間……ずっと……。外が気になるの？ お姉ちゃん達と遊びたい？ ごめんなさい。貴方を産むわけにいかないの……。その代わり、ママのお腹でずっと愛してあげる)

臨月のボテ腹を優しく抱きしめる。子宮に宿る胎児を慈しむ。母親としての愛情はあった。どんな形で授かった命であれ、お腹の赤子に罪はない。

「……………」

騎士兜の妊婦は左手を眼前にかざした。薬指をじっと見る。指輪の跡が残っている。ここで銀色の結婚指輪が二十年以上も光り輝いていた。夫の生まれ故郷で

結婚式を挙げてから、ただの一度も外さなかった。

永久の夫婦愛を誓った指輪。今の自分が身に着けることは許されない。十五年前にこの世を去った夫への冒瀆だ。

（もっと早く結婚指輪を外すべきだったわ。ヴォルフ坊ちゃんの赤ちゃんを宿したときに……。娘を産んでしまったときに……）

英雄の妻は死んでしまった。だから、我が身の代わりに夫が眠る墓所に葬った。（天国にいる夫は今の私をどう思うかしら？ 自分が死んだら良い男を見つけろだなんて、強がって言っていたわね……。私だったら若くて格好いい男を捕まられるって……。本当にそうなってしまったわ）

夫以外の種で孕んだ。自分が再び赤子を授かる。そんな日は絶対に来ないと思っていた。だが、大きく膨らんだ胎にはレーヴェ家の子供がいる。骨盤が広がり、下腹部がボテッと出っ張る。乳房の張りは痛みを感じるほどだ。

まごうことなき妊婦。命の揺籃ゆりかごを抱く孕女。母胎となった艶姿を、生きていた頃の夫に見せたら、どんな悲しい貌かおをさせてしまっただろう。

（死んだら再婚しろ……。嘘ばかり。貴方にそんな気なんてなかったくせに……。焦ってるときは、いつも耳が真っ赤。私は分かった。格好つけなんだから。私だって本当は……。ずっと貴方だけを……。ああ……。貴方がこの世を去って……本当に良かったわ。こんな身体は見せられない）

未亡人は涙を流せない。けれど、良心の咎めが突き刺さる。

（――愛していた貴方に失望されたくない）

夫と死別して十五年が経った。未亡人の貞操を捨て去り、新しい恋を始めても許容される。だが、彼女自身が後ろめたさを覚えた。

夫は英雄だ。大冒険の偉業は帝国史で燦然と輝くだろう。その栄光を妻であった自分が穢したくない。

「ああ……。湯がもう冷めてしまったわね」

生涯最後の墓参りで亡夫に別れを告げた。結婚指輪を外し、レーヴェ家の閨樹館に帰ってきた。これから先、きっと先立たれた夫への愛情は薄れていく。だから、ありったけの愛情を指輪に念じて夫の墓に埋めた。

（墓所で村の司祭様とすれ違ってしまった。きっと怪しまれてるわね。ヘンテナ姿の妊婦だもの。でも、好都合。私だと気付くはずがないわ。貌だっで見られないのだから……）

騎士兜の妊婦はメイド服に着替えようとする。

メイド服は妊婦の体型に合うように寸法を調整した。着替えでちよっと手間取るが、使用人は服装が大事だ。伯爵家の家臣達も衣服には気を使っていた。

貴族社会では地位を服装で示す。偉い人間は偉そうな格好を、下僕は下僕らしい格好を。それが秩序なのだ。

「物音？ 書齋から聞こえたわ。まさか、坊ちゃん……!?」

胸騒ぎがした。全裸のまま、騎士兜の妊婦は書齋に急いだ。何かが地面に転がる音が聞こえた。

物が落ちただけかもしれない。もしレーヴェ家の当主が五体満足の健康な青年だったなら、素肌を晒した姿で駆け付けるメイドは過保護が過ぎる。

書齋に扉を勢いよく開く。床を這いまわる芋虫のような青年がいた。

五年前に両手両足を失ったレーヴェ家の若き当主。一人では生きていけない

弱々しい御主人様。車椅子に戻ろうと奮闘していたが、また転げ落ちた。全裸で書齋に突入してきた妊婦を見て驚いたからだ。

「坊ちゃん!!」

騎士兜の妊婦は御主人様を抱き上げた。

「ベロニカ!? もう帰ってきてきたんだね。今日か明日とは聞いてたけれど……。えっと、なんで裸なんだい？ 寒いだろうに」

レーヴェ家の当主ヴォルフガングは、親し気にベロニカの名前を呼んだ。

四年前に忽然と失踪したカレンティアの実母。冒険者組合と帝国軍が探し回っても手がかり一つ掴めなかった行方不明者は、闇樹館の使用人になっていた。

カレンティアが拒絶した予想は当たっていた。英雄の命日、墓所に結婚指輪を葬った騎士兜の妊婦はベロニカ本人だった。娘とそっくりの爆乳、柔らかな媚肉の巨尻、四十四年の歳月で完熟しきった肢体。蠱惑的な色気にそそられる。だがしかし、肉体の若さは修道院で削ぎとされた。

——そのはずだった。

「湯浴みで旅の汚れを落としていました。メイド服に着替えようとしたら、書斎から音が聞こえました。私はヴォルフ坊ちゃんが心配で……」

ベロニカはヴォルフガングに全裸を見せても恥ずかしくない。主人と使用人、それだけの関係ではない。

「嬉しいよ。心配してくれ。でも、だからって、走るのはやめよう。僕よりも転んだら不味い身体だ。お腹には僕らの赤ちゃんがいるんだよ」

ヴォルフガングは肘先までしかない右手で、ベロニカの腹部をさすった。

この事態をいつたい誰が予想できただろう。先立たれた英雄の夫を深く愛し、修道院で隠居していた未亡人の貞操は、両手両足を失った青年に奪われた。

帝国辺境で莊園を営む准男爵は、帝都の伯爵家からすれば取るに足らない相手だ。仮にベロニカが再婚させられていても、家格がまったく釣り合っていない。

年齢も離れている。

ヴォルフガングは若々しい十八歳の男子。ベロニカは老いを感じさせぬ美熟女だったが四十四歳。

奇しくもヴォルフガングはベロニカの娘カレンティアと同じ年だ。

二倍差を超える年齢の開き。ヴォルフガングの子種で妊娠したとき、ベロニカはとても恥ずかしくなった。息子のような若者との淫行に溺れ、ものの見事に孕まされた。妊娠さえしなければ、腹を痛めて子供を産まなければ、自分自身への言い訳も立っただろう。

未亡人ベロニカの子宮は敗北した。夫ではない男の精子で、胎の奥底に隠した

卵子を射止められた。

「ヴォルフ坊ちゃんが心配で……。気付いたら身体が動いてしまって……。とても考え無しな行動でしたわ。私の悪い癖です」

——そして、心までも掴まれている。

ベロニカは結婚指輪をついに外した。それでも、数十年に及ぶ夫婦愛の残像が刻まれている。空白の輪郭は色濃い。薬指を彩る円環の白肌は、未亡人に重たい罪悪感を抱かせた。

自責で傷ついた心の隙間をヴォルフガングは慰める。寝取り男の打算からではない。四年間の共同生活でベロニカはヴォルフガングの人柄に触れてしまった。

「結婚指輪……。本当に外してしまっただね。大丈夫？ ベロニカ？」

「本音を言ってしまうと、ちよつとだけ後悔してるかもしれませんが。でも、あのままじゃいけなかった。夫にも、ヴォルフ坊ちゃんにも……。すごく失礼ですから……。自分で決めたんです。お墓に埋めてきました」

「結婚指輪を捨てたわけじゃない。ベロニカの中で後悔が残り続けるなら、冬明けに拾ってくればいいよ。僕は気にしてない」

「いいえ、私が捨てたんです。自分の意思で……。外したかったですわ」

「いいの？」

「はい。ヴォルフ坊ちゃんの手足となり、レーヴェ家に我が身をお捧げします」

「ごめんね……。ベロニカをレーヴェ家に引きずり込んでしまった。僕の子供なんか……。産みたくなかったでしょ。ごめんなさい」

「ヴォルフ坊ちゃん……。謝らないでください。ここでの生活は幸せです。無理やり言われてるわけじゃありません。嘘偽りなしの……。本心の……。告白……。この歳になるとプロポーズは恥ずかしいですわ。自分からは初めてだから……。❤
ヴォルフ坊ちゃんをお慕いしております❤」

「最初の結婚は旦那さんから？」

「はい。十四歳のとき……。御屋敷のバルコニーに連れ出されて……。ああ、嘘みたいです。もう二十年前だわ」

「どんな言葉だった？ 参考までに聞きたい」

「秘密です。恥ずかしいので……。♥」

「あははは！ そっか。そっか。仕方ない。秘密ならしょうがない。顔を赤くしてるベロニカが見られないのは残念だ。……。僕も前の旦那さんに負けないくらい、ベロニカを愛する。約束する。四肢欠損の田舎貴族じゃ、偉大な英雄に見劣りするだろうけどね」

「そんなことはありませんわ。だって、あの人は私を置いて、先に逝ってしまった。

でも、ヴォルフ坊ちゃん私を離さずにいる……。ずっと一緒に……。♥」

「僕は囚われたからね。本当はベロニカを逃がしてあげたかった。レーヴェ家の悪業を許してくれるのなら、ずっと一緒に暮らそう。僕が報いを受けて滅びる去る……。その日まで……」

「はい♥ ヴォルフ坊ちゃん♥ 寝室に行きませんか？ その……ご奉仕をします……♥」

茶黒の乳輪に聳そびえる突起が勃っている。愛しい御主人様を抱き上げているベロニカは発情していた。無論、美女の裸体にヴォルフ GANG もオチンポを硬くしている。

太陽が沈んだ。北方の寒い夜が訪れる。人肌の温かさを互いに欲する。主従の上下関係が崩れ、肉欲で満ちた男女関係が強まる。

「ああ、でも……夕食の時間でしたね……」

「今晚の夕餉ゆうげはベロニカの母乳で済ませる。寝室に行こう」

「よろしいのですか？ ヴォルフ坊ちゃん……♡」

「遠慮はいらないよ。ベロニカは結婚指輪を外して、亡くなった旦那さんに返したんだ。今からは自由恋愛だ。もう身分や立場なんか関係ない。愛の名のもとに結ばれよう」

「ふふっ……♡ はいっ♡」

「ん……。んう……。あのさ。恥ずかしくなってきた。ちよつとキザだった？ 笑つてるよね」

「失礼しましたわ。理由があります。だって、前の夫とプロポーズが一緒でしたわ」
「ええ？ ほんと？」

「ルココ恋愛譚の台詞を参考になさったのかしら？ 三十年前の流行りでしたわ。今時の若い子は読みませんわね」

「ちよつと傷ついた。僕のセンスって三十年前なんだ……。ああ、そっかあ……。ルココ恋愛譚って母上の本棚にあった小説だった。……。古くて当然じゃん……。」「お気になさらず。年増女を誘惑するのはぴったりですわ♥」

ベロニカはヴォルフガングを抱えて寢室に向かった。肉体の淫熱が立ち昇り、漆黒の騎士兜が温かくなっている。寒空の館外に出たら、頭部の天辺から蒸気が昇るだろう。溢れ出た膣汁が内股をびっしょりと濡らした。

ベロニカはセックスが好きだった。夫の生前は避妊に気を払いつつ、每晚欠かさずに愛し合った。

避妊に失敗したのは、カレンティアを孕んだ時だけである。

妊娠を避けていたのは冒険者という危険な職業柄。もう一つの理由は、伯爵家で起きている後継者問題だ。

案の定、カレンティアはお家騒動に引っ張り込まれている。未亡人のベロニカ

でさえ、夫の死後に伯爵家から「本家の血筋を残してほしい」と頼まれた。

（もう子供を産まない。私はきっぱりと宣言したのに……♡）

寢室のベッドで四つ這いになったベロニカは、妊娠オマンコを差し出した。

（ああ♡ 避妊もせずに……子作りセックスをしたから……♡ こんな歳で孕んじやったあ……♡ レーヴェ家の赤ちゃんを……♡ でも、いいのおっ♡ だつて、誰にも知られていない……♡）

重力で爆乳とポテ腹が垂れ下がり、毛皮の敷布に触れている。

下腹部の膨らみが後ろからよく見える。暖炉の灯焰とうえんが痴態を照らす。美熟女は背中を弓なりにへこませて、淫裂をくばあと開口させる。

「挿れるよ。ベロニカ」

背面に覆いかぶさったヴォルフガングは、途切れた両脚で立っている。左右の足は太腿までしか残っていない。直立させたところで膝立ち以下の高さだ。しかし、それで十分だ。

ベッドで腹這いになったベロニカの膣道に押し挿る。青少年の漲る若さが、美熟女のオマンコを喜悦させる。ゾクリと全身が震えた。

「おおっ♡ んおんんうっ♡ あんっ♡ あふうっ♡ んゆううううう♡
おおっ♡」

ベロニカは女の声で喘ぐ。結婚指輪を捨てる長旅は往路で四日かかった。その

間、我慢してきた性欲が爆発する。腹臥ふくがの体位で、肉棒の穿ちに心身を委ねる。

「ああっ♥んあっ♥ ああんっ♥ ヴォルフ坊ちゃん♥ すごいつ♥ すごいですわあっ♥ 私達っ♥ こんなにいつ♥ ひとつになっ♥ 繋がって♥♥」

「ハアう……!! ハアハア……!! ベロニカっ……!! ベロニカあっ……!! 暖かいよ。ベロニカの膣内なかはすごく……っ! 僕も気持ちいいっ!

四肢欠損の不具は自由を奪う。だが、ヴォルフガングの性技は身体的障害を乗り越える。四年に及ぶ共同生活で、鉄壁貞節だった未亡人の左手から結婚指輪を外させた。

「あああんっ♥ ヴォルフ坊ちゃん……♥ 愛しておりましたゆう♥ 私の身体は坊ちゃんのモノお……♥ 好きっ♥ 好きっ♥ 私は坊ちゃんが大好きいっ♥ こんな私を許してえ……♥ 本気で恋をしちゃったのっ♥」

「僕が許すよ。ベロニカ。……旦那さんに先立たれてからずっと耐えてたんだ。寂しかったよね？ 辛かったよね？ 今までよく頑張った。君には幸せになる権利があるんだ。だから、僕がベロニカを幸せにする……!!」

「はあ♥ はああああっん♥ ヴォルフ坊ちゃんううう♥」

オマンコに精液の濁流が流れる。絶頂アクメに導かれたベロニカはベッドの敷布を掴む。亀頭が子宮口に押し込んでいる。お腹で育つ胎児は、出口付近の騒ぎに迷

惑しているかもしれない。

「んあああっ……♡ あうっ……♡」

騎士兜が頭部から外れてしまった。漆黒のメタルヘルムがベッドから転がり落ちる。

「ああ!! はわわあっ……!?!」

慌ててベロニカは手を伸ばす。だが、掴み損ねた。そのまま床をコロコロンと二回転する。馬の黒毛で仕立てたカツラが絡まった。

「大丈夫? ベロニカ? 頭が外れちゃった?」

両手両足が不自由なヴォルフガングでは、ベッドから落ちた騎士兜を拾えない。

「だっ、だじょうぶですよ……。この距離なら問題ありませんから」

床に転がっている騎士兜が喋る。ベロニカの素顔を見ても友人知人は気付かないだろう。実の娘であるカレンティアですら、母親だと認識できないはずだ。

「頭を拾う？ それとも続ける？」

「えっと……。あとで拾います。ヴォルフ坊ちゃんの射精が終わったら……。♥
んうっ♥」

「それはいいけど……。ねえ。旅の間は大丈夫だった？ 首無しの妊婦が馬で駆けてた。そんな怖い怪談が巷で広がってないよね？」

「坊ちゃん、おっちょこちよいな私だって外出時は気を付けてましたわ。こんな

姿を見られたら大騒ぎですもの」

首から上には何もない。

かつて鎮座していた気品ある美顔、プラチナブロンドの艶髪は消えている。頭部がないのだから当たり前だ。

——ベロニカの頭部は綺麗さっぱり欠損していた。

【第二章】 悪霊が棲む荘園　　（黒森の闇樹館に囚われて）

カレンティアはヒースウッド修道院に二日ほど滞在し、ベロニカの消息に繋がる大きな手掛かりを得た。

院長や修道女への聞き込みでは新しい話が聞けず無駄骨に終わった。ベロニカは旅の目的地を誰にも教えておらず、帝国の北方としか伝えていなかった。結婚指輪を墓所に埋めた騎士兜の妊婦についても訊いてみたが、そんな人物は誰も知らなかった。

次にベロニカの私室を徹底的に探すことにした。備え付けの机や本棚をひつく

り返し、絨毯も引っぺがす。隣室から騒音の苦情が出たので「作業は昼間にやってほしい」と怒られた。

申し訳なく思ったが、四年前に見つけられなかったモノを探すのだ。さながら官憲の家宅搜索であった。修道女達は眉を顰ひそめた。部屋を荒らし尽くしたお詫びとして、カレンティアが乗ってきた馬を寄付した。

やるだけの価値はあった。

（灯台下暗しだったわ。本に挟まれてた手紙を四年間も見落としていたんだから……。母さんの足取りを追う手がかりは、ずっとあの部屋に残ってたんだわ）

間抜けな話だ。冒険者組合や帝国軍まで動かしたというのに、重要な手紙を四

年間も見つけられずにいた。もっと早くにこの手紙を見つけていればと悔いる。だが、ベロニカは意図的に手紙を残したわけじゃなかった。

そそっかしいベロニカが読みかけの本に手紙を挟み、そのまま忘れてしまったのだ。

(手紙を送ってきたのはダミエーラ……。母さんの古い友人……)

手紙の差出人はダミエーラという女性。手紙の文面によると母親の旧友だ。ダミエーラは伯爵家に仕えてた武家の娘で、それで関わり合いがあったのだ。

四年前の手紙にはダミエーラの相談事が綴つづられていた。

北方辺境の莊園を営むレーヴェ家で、領主夫妻の一人息子に劍術を教えてい

る。准男爵の田舎貴族であるがリング栽培で財を築き、子息を華やかな社交界デビューさせたい。それが奥方の願望だ。

当主の父親は大それた夢を見ておらず、「自分の剣で腕や足を切らない程度の剣術。馬から落つこちない程度の馬術。それさえ教えてくれればいい」と現実的だった。

ある日、ダミエーラは奥方の前で「友人に伯爵家の令嬢だった人がいる」と口を滑らせた。過去形なのは家出をしたからだ。つまり、修道院で隠居しているベロニカである。

そのことを知ったレーヴェ家の奥方は「伯爵令嬢のベロニカ様をお屋敷に招き、

可愛い息子の教育係にしたい」と言い始めた。

これには大きな勘違いがある。まず、伯爵令嬢だったのは三十年前。手紙が書かれた当時、ベロニカを四十歳の未亡人だ。ダミエーラは誤解を正そうとしたが、レーヴェ家の奥方は思い込みが激しかった。

あわよくば呼びつけた伯爵家の御令嬢との逆玉を狙っていたのだろうが、レーヴェ家のお坊ちゃんは十四歳。成人年齢にすら達していないお子様だ。

ダミエーラはベロニカが未亡人だと何度も説明を繰り返した。だが、信じてもらえていない。ベロニカと実際に会えば、奥方も分ってくれるはずである。旅費や滞在費を払うので、実際に屋敷を訪れてほしい。

また、帝国辺境の閉ざされた荘園で暮らす、お坊ちゃんに帝都で活躍する冒険者の話を聞かせてあげたい。

——手紙に記されていたのはそんな依頼だった。

レーヴェ家の醜聞とならぬように口外を控えてほしい。その旨も書き添えられていた。ベロニカは律儀に約束を守り、レーヴェ家の荘園に向かったと誰にも言わなかったのだ。

（もう……。母さんってば……。口外しないでほしいのは依頼内容だけでしょ。

どうして行き先まで秘密にしちゃったのよ！ それと、大切な手紙を本の栞しおりにしちゃ駄目！ 『ルココ恋愛譚』に手紙が挟まっただけで、私は助かったけれど……』

カレンティアは『ルココ恋愛譚』を読んでいない。

母親に薦められたが内容が古臭すぎる。三十年前に大流行したらしいが、ご年配のコンテンツに若者は近づかない。

（レーヴェ家の莊園……。場所は北方の最果てか……。帝国軍や冒険者も近づかない辺境の僻地ね。勢いでとんでもない遠くまで来ちゃったわ。帝都に帰るには二週間はかかりそう。雪が降り始めたら……。帰れるかしら？）

准男爵は正式な爵位とは数えられない。帝都の貴族籍名簿を調べても無駄だ。

商人や豪農が金で買うような地位なのだ。しかしながら、辺境では大きな意味を持つのだろう。

レーヴェ家の先祖はリンゴ栽培で成功した。この情報がなければ、カレンティアは莊園に辿り着けなかった。

偶然の導きに感謝する。修道院を出入りしている行商人が、レーヴェ家で作られたリンゴ酒を扱っていたのだ。行商人の組合を通じて、カレンティアはレーヴェ家の莊園まで連れて行ってもらうことになった。



「帝国北方の冬は厳しいぞ。嬢ちゃんは帝都の冒険者なんだろう」

相乗りさせてもらっている行商人は、レーヴェ家の荘園に木炭と岩塩を売ると話す。荘園で働く農民は二〇〇人程度。地図に名前は載っていないが、隣町ではレーヴェ村の通称で呼ばれていた。

「ええ。こんな僻地まで来たのは初めてよ」

「山道は豪雪で使えなくなる。長毛種の馬でも進めない。レーヴェ家の荘園は険しい谷越えだ。しかも、黒森には悪霊が棲みついてる」

「悪霊ですって？」

冒険者の好奇心がくすぐられた。カレンティアは商人の馬車にお邪魔しているが、代金は払っていない。護衛という名目で乗り込んだ。カレンティアは上位ランクの冒険者である。そこらの用心棒よりもずっと強い。

「ああ。そうさ。町の連中はレーヴェ家を怖がっている。理由が分かるか？」

「町で疎うとまれてるのは耳にしたわ。商人さんの言い振りだと、リングゴで大儲けしてる妬そねみだけじゃなさそう」

「評判になってる蜜リングゴの苗木はな。レーヴェ家の初代当主が黒森で見つけたんだ。おぞましい悪霊に人間の血肉を喰わせて、その報酬で苗木をもらった。

……そんな噂があるのさ」

「それって噂でしょ？」

「莊園のリンゴは人間の腐肉を肥料にしてる。……信じてる奴も多いぞ」

偏見から生じた風評被害だとカレンティアは思った。町の人々はレーヴェ家が気に入らないのだ。莊園はリンゴ栽培で大儲けしている。町の人々もリンゴの栽培に着手したが、まったく上手くいっていないのだ。

（母さんが言っていたわ。農業は積み重ね……。未経験の新規参入者が成功するのは稀なことよ）

人々は失敗の鬱憤うっぷんをレーヴェ家に向けているのだ。人間の死体を肥料しているなんて悪評まで流す。そういう人々は好きにはなれなかった。

「商人さんは信じているの？ レーヴェ家との取引で儲けてるんでしょ。商売のお得意様を貶めるのは損得勘定ができてないわ」

カレンティアはそれとなく窘める^{たしな}。行商人はレーヴェ家のおかげで儲けている側の人間だ。レーヴェ家と取引をしている商人こそ、風評被害で困る立場にある。

「……以前は違ったさ。与太話だと思った」

「以前は？」

「四年前だ。町の司祭様が死にしまった。異常な死に方だったよ。司祭様は頭を自分の手で挽ぎ取った。自殺には違いねえ……。だが、普通じゃねえだろ……。？」

自分の首を振ねじるなんてよお………!」

「死んだのは町の司祭でしょう。どうしてレーヴェ家のせいになるわけ？」

「司祭様はレーヴェ家と揉めてた。五年前の大火事でレーヴェ家の人間が大勢死んだ。莊園の奴らは町から入り込んだゴロツキが放火したと思ってる。実際、そうなのかもしれねえ。……司祭様を呪い殺したのは報復なんだ」

「おだやかじゃないわね。呪殺なら官憲に訴えたら？ 闇の儀式は重罪よ。教会だって動くわ」

「町の有力者はビビったのさ。レーヴェ家の御屋敷に火を放った連中が誰の指図を受けてたのか……。それを調べられたら困るんだ」

カレンティアは顔を曇らせる。町の有力者は犯行を自白しているようなものだ。

「じゃあ、司祭様は生贄の子羊？」

「レーヴェ家は異教徒だ。莊園の連中も黒森の悪霊を祭ってる。俺に言わせれば……まあ……いや、どうでもいい。金になる商売だ。奴らが何を信仰していようが関係ねえ……」

行商人は怯えた様子で黒森を見渡す。手綱を握る者の怖気は、おじけ馬車をけん引する馬にも伝播していた。

「悪霊はともかく、レーヴェ家の火事は初耳だわ。大勢が亡くなったの？」

「ああ。レーヴェ家の当主夫妻と使用人が全員死んだ」

「当主の夫妻が亡くなった？」

「建物が全焼したんだ。生き残ったのは一人息子だけさ。古井戸に飛び込んで火の手から逃れた。だが、寒い冬の夜だった。酷い凍傷で手足を切らなきゃ駄目だった」

「凍傷で手足を……」

「両手両足をバツサリだ。無事だったのは胴体だけさ。芋虫みたいな身体さ。レーヴェ村の奴らは『ヴォルフ坊ちゃん』と呼んでる」

（ダミエーラの手紙に書いてあったレーヴェ家のお坊ちゃんだわ。十四歳……いいえ、手紙が書かれたのは四年前だから十八歳に……。私と同じ年だわ。可哀そ

うに。両手両足を失うなんて……)

「俺も商売をしてるからな。ちよつとだけ話したことがある。……悪い御人じゃねえよ」

行商人は付け加えて言った。

「両手両足が不自由で、領主の仕事が務まるの？ 大変でしょう」

「細々としたことは村長が代行してる。こまじま木炭や岩塩の買い付け交渉で出てくるのは村長だけだ。ヴォルフ坊ちゃんは黒森に囲まれた館で暮らしてる」

「一人では暮らせないでしょう。誰か使用人を雇っているのよね？」

「ああ。メイドが一人いる。顔は見たことがねえ……。あの黒い館は薄気味悪い

……。あんな恐ろしい森の中で暮らす神経が分からん」

「……………。商人さんはさつき『ヴォルフ坊ちゃんは悪い御人じゃない』と言ったわ。でも、何か…………含むところがあるじゃない？」

「最初はな、俺だってヴォルフ坊ちゃんに同情したさ。十四歳で両手両足の切断だ。家族も死んで、不幸のどん底。金があっても天涯孤独。他に身寄りもいねえし、レーヴェ家も終わりだと思ったね。…………ところが、娘が産まれたんだ」

「娘？ レーヴェ家に子供ができたの？」

「そうだ。ヴォルフ坊ちゃんの娘だ。あの身体でどうやって子作りしたのか…………。そもそも誰が産んだのかも分からねえ。町の司祭様が死んじまった四年前、レー

ヴェエ家に娘が産まれた。その翌年に二人目の娘が誕生した。赤子を産んだ母親は……？ 莊園の奴らも知らねえんだ」

「商人さん、大きな見落としを教えてあげる。お世話をしているメイドがいるわ。ヴォルフ坊ちゃんはメイドと二人で暮らしてた。簡単な消去法よ」

主人と使用人の子供。貴族社会ではよくある話だ。醜聞の括りに入るが、四肢欠損の田舎貴族に嫁ぐ女性はいないかもしれない。だとすれば、レーヴェエ家のメイドが世継ぎを産もうとした気持ちもわかる。

「メイドが母親なら出産のとき、赤子を取り上げたのは誰だ？」

「それは……」

深い森の中にある館でメイドは娘を産んだ。それなら御産を誰が助けたのか。カレンティアは言葉に詰まる。

「手足のないヴォルフ坊ちゃんか？」

「待って！ きつと産婆は莊園の誰かが……」

「さっきも言ったろ。母親を誰も知らねえ！ そもそも莊園の奴らは黒森の館に近づかない。掟があるんだ。足を踏み入れちゃならねえ……。四年前に死んだ司祭様は、禁を破ってレーヴェ家の黒森に入った。そのせいで……狂っちゃった……！」

「まさか商人さんは……。発狂した司祭さんを見たの……？」

「ああ。そうだ……。そうなんだよ……。四年前に……。俺の馬車で司祭様をレーヴェ村に運んだ。今の嬢ちゃんみたい……。いいか！ 約束しろ！ 黒森に入るな!! 何があっても道から出ちゃいけねえ！ 悪霊は本当にいるんだよ……。!!」

カレンティアは行商人の精神状態を心配した。妄執に取り憑かれている。だが、一つだけ気になった。レーヴェ家の大火事は五年前に起きた。それが本当ならおかしい。

（ダミエーラの手紙は四年前に送られてきた。え？ レーヴェ家で大火事が起きた一年後じゃない……。! おかしい！ それだと時系列が合わないわ。手紙を書

いてから、母さんのいるヒースウッド修道院に届くまで一年もかからない。そもそも手紙には四年前の日付が書かれていたわ)

大火事が起きた年を商人が勘違いしている。それだったら辻褃が合う。ベロニカの失踪とも結びつく。

(ダミエーラに招きで母さんはレーヴェ家に逗留していた。でも、大火事に巻き込まれてしまった。……繋がるわ)

カレンティアは商人に確認してみる。

「商人さん……」

「悪いな。嬢ちゃん。喋り過ぎた。俺はもう話したくねえ……」

「最後に一つだけ。レーヴェ家の大火事は四年前じゃない？ 五年前じゃなくて」

「なんでだ？ 大火事は五年前で確かだ……」

「自信を持って言える？ 正確に五年前だと？ 本当は四年前だったりしないかしら？」

「断言できるさ。大火事は五年前の初冬に起きた。司祭様が死んだのは四年前だぞ。ヴォルフ坊ちゃんの娘が産まれたのも四年前……。だから、大火事は五年前に起きた」

商人の証言に矛盾はない。司祭が死んだ年、レーヴェ家に娘が誕生した年。その前年にレーヴェ家で大火事が起きた。

（母さんの失踪は四年前……。火事とは結び付かないか……。）

カレンティアは灰色の空を見上げた。厳しい冬が訪れようとしている。行商人は莊園に木炭と岩塩を売り付けたら町に帰る。滞在は一泊、天候次第では二泊するかもしれないが、レーヴェ村で越冬するつもりはなさそうだ。

（クロヴィスに手紙を書こう。行商人さんに渡せば帝都に届くはずだわ。心配させたくない。まさかこんな長旅になるなんて……。）

右手に握りしめた結婚指輪を握りしめる。母親が大切にしていた夫婦の指輪。なぜ父親の墓前に埋められていたのだろうか。墓所を訪れた不審な妊婦の正体も分っていない。

（ここまでの道中、騎士兜で素顔を隠した妊婦の話は耳にしなかったわ。目立つ姿だもの。誰かに見られていれば、必ず覚えているはずなのに……）

四年前に失踪した母親であるはずがない。だが、墓所で目撃された妊婦が母親だったら、この結婚指輪を嵌めていた理由になる。身籠ってさえいなければ、カレンティアは母親と断定していただろう。

臨月の妊婦だったという証言。

ヒースウッド修道院で隠棲し、四十路を超えていた未亡人が妊娠するなんて考えにくい。何よりも母親は亡くなった父親を愛していた。カレンティアは両親の相思相愛ぶりを知っている。

母親が父親以外の男を愛し、子供を作る姿が想像できない。だから、父親が眠る墓所に現れた妊婦は別人。カレンティアはそう思ったかった。

（母さんがレーヴェ家を訪問したのは四年前……。いったい何が起きたの……。四年前に……）

四年前なら大火事が起きた後だ。当主夫妻が亡くなり、使用人も全員死んでしまった。生き残ったのは手足を失ったヘヴォルフ坊ちゃん。ただ一人である。

レーヴェ家を訪問した母親はヘヴォルフ坊ちゃんと会っているはずだ。まずは彼から話を聞く必要がある。

そのときカレンティアは恐怖で硬直した。

気付いてしまった。ヒースウッド修道院で見つけた手紙。ダミエーラが母親をレーヴェ家に招いたのは四年前だ。

（五年前の大火事でレーヴェ家の使用人は全員死んだ……？ 変だわ。なら、母さん呼び寄せたダミエーラも死んでるじゃない……!? 手紙は四年前に書かれた！ ありえない！ 死人のダミエーラが手紙を書いたとでもいうの……!?）

カレンティアは荷物からダミエーラの手紙を引っ張り出した。

文面を最初から読み直す。やはり四年前の日付が書かれていた。だが、当主夫妻は健在で、前年に起きた大火事に一切触れていない。読書家の当主、教育熱心な奥方、剣術や馬術を学ぶ一人息子。手紙の中ではレーヴェ家の幸せな日常が続

いている。

(ダミエーラが書いた手紙じゃない……!! これは罠よ……!! 誰かが母さんを
レーヴェ家に誘き寄せたんだわ!)



レーヴェ家が治める荘園では絶対遵守の掟があった。

黒森に無断で入ってはならない。当主の許しがなければ黒森は人間に牙を向ける。黒森との境界線には赤黒い石が置かれていた。目印の境界標を越えた先は禁

域だ。

「もうじき冬が来るね。こうして外を散策できるのは今日が最後かも」

車椅子に揺られながら、ヴォルフガングは黒森の風景を眺める。

常緑樹は冬季も葉を広げて太陽光を吸う。未開拓の森では暗がり広がり、生き物の気配は感じられない。

冬の備えで野生動物も巣穴に籠っているのだろう。この地で暮らす人々と同じだ。

レーヴェ村も越冬の準備を進めていた。晩生種の収穫も終わり、荘園で育ったリンゴは貯蔵庫の雪室で熟成し、春先に出荷される。

「本邸の跡地まで行きますか？」

ベロニカは車椅子の手押しハンドルを握っている。乳袋付きのメイド服が豊満な爆乳を覆う。重たげな乳房はゆらりゆらりと撓たわむ。母性を強調する肉付きの極みは、堂々たる臨月のポテ腹だ。

「うん。お願い。本邸の焼け跡に村人は近づかないだろうし……。父上と母上、火事で亡くなった使用人達のお墓参りをしよう。ちよつと遠出しよう。ベロニカは大丈夫？」

ヴォルフガングは身重のベロニカを気遣う。

「よい運動になりますよ。旅の間もお腹の赤ちゃんは大人しかったですわ。こん

な母親を労わってくれている優しい子なのです。ふふっ……♡ 父親似かしら？
きっと私みたいな親不孝者ではないでしょう」

「ベロニカは……。お腹の赤ちゃんを産みたい？」

「私は……。産まないつもりです」

「そっか。そうだよね」

ヴォルフガングは頷いた。不満はなく、むしろ納得している様子だった。

「お優しいヴォルフ坊ちゃんも、それを望まれているのですよね」

「うん……。僕は誰かを犠牲にしたくない。荘園の生活を守るために、仕方のない側面はあるけれど……。もう僕らには元気がありあまっている娘がいる。今の

幸せだけで十分じゃないか……。他人を不幸を僕は望まない」

「はい……。それでよろしいと思いますわ」

「それにさ。僕の世話だけでも大変なのに、子育てまでするのは苦勞が多いでしょ」
そう言うものの、娘達の教育をメイドに任せっきりにしてはいない。ヴォルフ
ガングは娘達を書齋に呼び、文字の読み書きを教えている。

「賑やかで楽しいですわ。昔を思い出しますもの」

「……。ベロニカは駆け落ちした後、娘を産んだと言っていたね。子供の相
手は懐かしい？」

「はい……。そうだと思いますわ」

「昔のことは聞かないほうがいい？」

「いいえ。もう気にしていませんわ。こうしてヴォルフ坊ちゃんと家庭を築き、再び母親になるとは思っていませんでした。自分の選択を悔いているわけではないのです。心が満たされて幸せなの……」

「よかった」

「十八年前に娘を産んだ幸せが再来した心地ですわ」

「ああ……、そうなんだ。十八年も前なんだね。ははは。そっか、そっか」

「坊ちゃん？」

「僕が産まれた年と一緒にだ。僕は今年で十八歳だもん」

ヴォルフガングは微笑む。背徳的な気分になる。自分が産まれた年に、娘を産んだ年配の未亡人。そんな美熟女とセックスし、赤子を孕ませている。しかも、大貴族の伯爵家で生まれた高貴な淑女である。

表沙汰になるかは別として、レーヴェ家は家格の高い血筋を取り込んだ。

「昔のことを話すのは嫌じゃありませんわ。でも、歳は気にします。ヴォルフ坊ちゃんには私の年齢をご存知でしょう？」

「年齢は関係ないよ。ベロニカは美人だ。貌かおを失っても魅力的だよ。まだまだモテる。旅に出たときも心配だったんだよ。ベロニカが誰かに口説かれたりしてないかなってね」

「ふふっ。私を口説く物好きはいませんわ」

「じゃあ、僕はそうなのかもよ」

「ええ。ヴォルフ坊ちゃんは本当に物好きですわ。年増を誑かすのがお上手なんだから。……素敵ですわ。心が蕩けてしまっとろいそう」

首無しメイドの異形者に成れ果ててしまったが、ベロニカは幸福を手にした。結婚指輪を外した未亡人は、呪われたレーヴェ家で第二の人生を歩み始める。不具の主人に仕える愛奴は迷いを捨てた。

ベロニカの熟れた子宮は、ヴォルフガングに恋をしている。

唯一無二と誓った夫婦愛を解き、二人目の愛し人となった青年。

愛を育んだ四年の主従生活で、ヴォルフガングはかけがえのない男になってしまった。たとえ墓の下から前夫が蘇っても、ベロニカの恋心は取り戻せないかもしれない。

本邸の焼け跡に到着したヴォルフガングとベロニカは、大火の犠牲者に鎮魂の祈りを捧げる。

犠牲者の共同墓地は板石を積み重ねた簡単な作りだ。五年前の大火事は炎が激しく、瓦礫に埋もれてしまった骨もある。村人達が集めてくれたが、誰の骨であるかは判別できなかつた。ヴォルフガングの意向により、見つけた遺骨は一つの墓で吊った。

「村長から本邸の建て直し相談されてる。ベロニカはどう思う？」

「別邸の闇樹館で不自由はしておりません。ですが、村の皆さんは違いかもしれませんね。ヴォルフ坊ちゃんにお伺いを立てるとき、大変そうですから。本邸を建て直すお金はありますし、火事から五年経ったと思えば……」

「まだ先の話だけどね。僕は闇樹館を気に入っている。……とはいえ、荘園の規模が大きくなるなら、それなりの建物が必要だ。取引してる商人達からも、宿泊施設が欲しいと言われてる。娘達に家庭教師も付けたい。はは、あははっ……」

「ヴォルフ坊ちゃん？」

「こんな悩み……。まるで父上や母上みたいだ。あれから五年……。あつという

間だった。嬉しいよ。僕もやっと当主らしくなってきた」

「レーヴェ家のご立派な当主様になられておりますよ。先代の当主様と奥方様、亡くなられた方々はきつとお喜びですわ」

「うん。そうだといいな。——でも、僕の悪業を許してはくれない」

「……………」

どんな言葉をかければいいのか、ベロニカには分からなかった。傷心の主人を慰めたくなる。

「許しは求めない。報いをいつの日か……。その刻を僕は待つよ」

ヴォルフガングは心優しい青年だ。他者の不幸を望まない。だが、自身の生命

とレーヴェ家の財産を守るために抗った。自己防衛の結果、幾人かの人間は犠牲になっている。

ベロニカも犠牲者の一人だ。赤子を産まされ、貌かおを失った。しかし、ヴォルフガングを愛している。

「ヴォルフ坊ちゃん……。あちらの木陰に行きましょう」

ベロニカは返事を待たなかった。燃え落ちた瓦礫を避けながら、車椅子を押していた。

「構わないけど、どうしたの？」

レーヴェ家の本邸は木立で囲まれていた。とても古い樹木が並んでいる。その

風景は立哨りっしょうする歩兵を見る者に想起させる。

ベロニカは大樹の根本で車椅子を止めた。

ここなら視線が遮られ、仮に誰かが近づいてきても隠れて見えない。

「ヴォルフ坊ちゃん……♡ 見て……♡」

ベロニカはメイド服のスカートを上げる。立冬の寒風が股を吹き抜ける。ショー
ツは履いていなかった。丸出しのオマンコを露出魔のようにひけらかす。

「それじゃ、お腹が冷えちゃうよ。ベロニカ」

困った顔でヴォルフガングは言う。だが、ベロニカが何を望んでいるのかは分か
かった。

「暖めてください。ヴォルフ坊ちゃんのおチンポで……♡ セックスしたいですっ♡
♡ ここで……♡ 外でセックスしませんか♡」

「え……。野外だと見られちゃう。村の皆は滅多に近づかないし、普段は森に入らない。でも、今は狩猟を解禁してる。誰かが来たら……」

「よいではありませんか……。レーヴェ家の荘園で働く者なら、見て見ぬふりをしてくださいますよ。ほんのちよつとだけ……♡」

「しようがないね。分かった。……下着を付けてないってことは、散歩に誘ったときから考えてたんだ。エッチだね」

「はい……。♡。私は御主人様に欲情してしまうエッチなメイドですわ♡」

ベロニカはヴォルフガングが腰掛ける車椅子に跨った。慣れた手つきベルトを緩め、勃起したオチンポを取り出した。挿入の瞬間は、いつだって心臓が高鳴る。

「ドキドキするね。外でセックスするのは初めだ」

「私ですわ♡ ああ♡ んうっ♡」

「旦那さんとはしなかったの？」

「はいっ♡ こんな淫行っ♡ 夫とは絶対しなかった……♡ 野外セックスは

ヴォルフ坊ちゃんが初めてえっ♡ んうっ♡」

涎よだれを垂らしたオマンコがオチンポに近づき、捕食するように呑み込んだ。車椅子にベロニカの体重が加わり、柔らかな土の地面に車輪が沈む。どちらも激しく

は動けない。だが、青姦の緊張感が肉悦を高ぶらせた。

(ヴォルフ坊ちゃんのオチンポ……♥ 暖かい……♥)

そよ風が小枝を揺らすテンポで、ベロニカは腰を揺らしている。両手は大樹の幹に押し当て、ゆるやかなスローセックスを堪能した。

(私がこんなに愛に飢えていたなんて……♥ ヒースウッド修道院で慎ましく暮らしてたときは分からなかったわ。過ぎ去った夫との思い出……。帝都で活躍している娘から届く報せ……。ちよっと煩わしかった父様や兄様の手紙……。年の一度のお墓参り……。それだけで十分に幸せだと信じていたのに……♥)

お互いが依存し、愛を紡ぎ合う。子を成したという強い繋がりをさらに太くす

る。

「結婚指輪を外してから、ベロニカは積極的になったね」

ベロニカの爆乳とボテ腹を押し当てられて、ヴォルフガングは嬉しそうだった。力強い胎動を放っている。両親のセックスを胎児も愉しんでいた。産まれてくることはない子供。けれど、我が子に強い父性愛を抱く。愛する女性が孕んだ可愛い子供なのだ。

「この地で暮らすと決めましたから……♡ 腹を痛めて産んだ娘のためにも……

♡

「ありがとう。ベロニカ。これからもよろしく」

「はいっ♥ 愛しい御主人様……♥」

もし面貌を失っていないければキスをしていた。ベロニカは頭部の代わりに据えている騎士兜が、ほんのちよっぴりだけ疎ましくなる。首無しの身体は不自由が多い。けれど、四肢欠損のヴォルフガングに比べれば自由である。少なくとも両足を使って歩ける。両手を使って物を掴めるのだ。

「はんうっ♥ はうっ♥ んうっ……♥」

近くに人間はいない。そう分かっているても嬌声は抑えめになる。

「はあはあっ♥ んんうっ♥ んううっ♥ んあっ♥」

ミニスカートがふわりと浮かび、白黒の生地がひらめいた。

「あんっ♡ あんっ♡ あんっ♡ あんっ♡ ああぁっんんん♡」

上下に跳ねるピストン運動で、白肌のデカ尻が垣間見える。幸いにして黒森で野外セックスに興じる男女を覗く者はいない。

（そろそろかしら♡ ふふっ♡ オチンポの動きで分かってしまうわ♡ ヴォルフ坊ちゃんが射精する♡ お召し物を汚さないように一滴残らず、オマンコで飲み干さなきゃ……♡）

膣の締めりがきつくなる。ヴォルフガングはベロニカの孕み腹をぎゅっと抱きしめた。

まるで母親に甘える息子だ。

レーヴェ家の坊ちゃんは五年前に死んでしまった家族が恋しかった。家督を継ぎ、莊園の主として独り立ちしても、甘えたくなる瞬間がある。

(私の膣内なかに精子を出してる……っ♡ 私わたしもイクっ♡ ヴォルフ坊ちゃんに抱かれて♡ 恋しいのですよね……？ 分かりますわ。先立たれた家族への想い……。私も最愛の人を亡くしたから……)

情愛が混じった吐息を漏らす。首無しのメイドに口はない。だが、騎士兜から白く煙る息が咲いた。北方辺境の冬風ですら、熟女の淫熱を冷ますことは不可能だ。惚れ込んだ若い青年に熱を上げる。

(ああ……♡ やっぱり……♡ そうなのだわ……♡ 否定の余地が消えていく

……♡ 私にとって最愛の人はもう……♡ ごめんなさいっ♡ あなたあつ♡
ごめんなさいっ♡ 私はこの子にっ♡ 女心が移うつろってしまった……♡)

大樹に押し当てている両手を見詰める。視点は左手の薬指に吸い寄せられた。かつては銀色の結婚指輪が輝いていた。最愛の男と過ごした幸せな日々が記憶の結晶。夫婦愛の象徴が眩まばゆく煌ときめき、言い寄る男どもを追い払った。——だが、ベロニカは結婚指輪を夫の墓に埋めた。

(ヴォルフ坊ちゃん♡ 私のお……♡ 最愛の男……♡ いまっ♡ 私の心は……もう……♡ ヴォルフ坊ちゃんが好きっ……♡ 北方の辺境で、新しい家族と暮らす、この穏やかな生活を愛しているっ……♡)

ベロニカが両脚に込めていた力が緩んでいった。突っ張っていた左右の腕が枝垂れ落ちる。妊婦の全体重が車椅子に加わり、背もたれが少し傾いた。

「あぁっ♡ あぁっ……♡」

脱力状態のベロニカは色っぽく呻いている。ヴォルフガングは優しく寄り添った。欠損した腕で抱擁し、包み込んだ。膣道に収まった男根が降りてきた子宮を支える。

「ヴォルフ坊ちゃん……。もうしばらく……。こうして……。よろしいですか……。？ ひとつにつ。繋がっていたいの……」

「もちろん。いいよ。僕もベロニカを抱きしめていたい。温もりを感じる。暖かいよ。」

とっても暖かい。ずっとこうしていられたら、そう思ってしまうよ」

「……♡」

静かに頷く。厳つい騎士兜が愛らしく見えた。

ペロニカもヴォルフガングに甘えているのだ。もはや未亡人ではなく、レーヴェエ家の使用人なのだから。若年の御主人様に喉を鳴らし、すり寄ってしまう。

（私は幸せ……♡ 永久に幸福が続けばいい♡ 誰にだって悪業はある。たとえばレーヴェエ家に罪があらうとも、報いなんて……来なくていい……♡）

愛の交わりは一時間ほど続いた。

日が傾き、そろそろ闇樹館に戻らねばならない時間帯になった。名残惜しい。

しかし、夜になっても戻らなければ彼女が探しに来る。

「——坊ちゃん。お静かに」

ベロニカのオマンコにはまだオチンポが突き刺さっている。上半身を傾けて、木陰から本邸の焼け跡を窺うかがった。

「どうしたの？」

「足音が聞こえましたわ。誰かが枝を踏んだ音が……。本邸の焼け跡に誰かがいますわ」

「僕ら探しに来たのかな？ 散歩にしては長引いちゃった」

「いいえ。リリトウナじゃありませんわ。村の人間でもなさそう……。ここからだと後ろ姿しか見えませんけれど……。あの髪色……。荘園では見かけない女ですわ」

「じゃあ、隣町の商人さんかな？ 村長が木炭と岩塩を注文したから、そろそろ荘園に届くはずなんだ」

「だとしたら、商人の護衛か、用心棒でしょうか……。あの女は長剣を腰に下げていますわ。護身用にしては武装が凝ってますわね。それに使い込まれて……。立ち振る舞いも……。え……。うそ……。？」

「どうしたの、ベロニカ？」

「そんな……。あの聖剣は伯爵家の……！ どうして……？ あそこにいるのは……カレンティア……！」



莊園に到着したカレンティアは、さっそく聞き込みを始めた。

まずは四年前にレーヴェ村を訪問したはずの母親について訊ねる。すると、あつけないほど簡単に目撃者に辿り着いた。行商人に寝泊まりの部屋を貸している村

長が知っていた。カレンティアは村長から情報を聞きだした。

——四年前にレーヴェ家の使用人を訪ねてきた夫人でしょ。前年の大火事を知らなかったみたいで、とても驚いていたね。だから、本邸があった場所と、ヴォルフ坊ちゃんが暮らしてる閨樹館について教えた。特徴がある夫人だったからよく覚えてるよ。もしかして嬢ちゃんは娘さん？ 白金色の髪といい、そっくりの美人だね。発育が良くて羨ましいよ。

発育の良さ。要するに爆乳で母娘関係を見破られてしまった。ちよつと複雑な

気持ちだったが、言っている村長に嫌味はない。レーヴェ家の莊園を任されている村長は女性だった。

本心で称賛している。素直に誉め言葉を受け入れた。

カレンティアは次に母親の結婚指輪を見せて訊ねてみた。

——あの夫人はそれと似たような銀の指輪を嵌めてたね。高そうな代物だったし、外しておくか、手袋で隠すのを勧めたよ。物騒な世の中だからね。四年前は隣町から自警団とやらが入り込んでいたし、変な聖職者も無断で黒森に入り込んでたんだ。ここでの掟は行商人から聞いている？ 絶対に守らなきゃいけないルー

ルだよ。破ったら死ぬ。冗談抜きで。町の連中は死んだ。

無断で闇森を出入りしていた隣町の司祭が自殺した。その話を行商人から聞かされたと答えた。

——いいね。上出来だ。あの胡散臭い聖職者はやばい死に方したんだろ。おかげで町の馬鹿どもが近寄らなくなって大助かりさね。行商人達も聞き分けがよくなった。良いこと尽くめさ。

莊園の人間からすれば、教会の司祭は怪しげな宣教師に見えるのだ。帝都から

離れるほど、教会の力は弱まっていく。レーヴェエ家の荘園は異教徒の牙城であった。

帝国では信仰の自由が認められている。大昔と違って教会に恭順しないからといって罰せられたりはしない。

——じゃあ、嬢ちゃんも墓参り？ 本邸に犠牲者の共同墓地がある。大火事で焼けちゃまってね。どれが誰の骨か分からなかったんだ。私達は弔いすら満足にできなかつた。

カレンティアは「ダミエーラ」の名前を出してみる。

母親を手紙で呼び出した旧友。しかし、五年前の火事で死んでいるなら、誰かが成りすまして手紙を送ってきたことになる。

——ダミエーラさんか。よく知ってる。いい家庭教師だったよ。ヴォルフ坊ちゃんに剣術と馬術を教えた。最期まで……とても立派な女性だった。

やはりダミエーラは五年前の火事で死んでいた。

——レーヴェ家が野盗に襲撃されたとき、ダミエーラさんは反撃したんだ。卑怯な賊は油を巻いて放火した。私らが助けに向かったときには、火の勢いが強くてどうしようもなかった。

火が屋敷を燃やし尽くし、焼け跡から遺体を探しているとき、古井戸に逃げ込んだヴォルフガングが救助された。真冬の井戸水に一日浸かっていたせいで、手足を失う重度の凍傷を負った。

——生き残ったのは奇跡だ。黒森の守り神がレーヴェ家の跡取りを守った。あんな痛々しいお姿になっても、ヴォルフ坊ちゃんは頑張ってる。だから、私らも莊園を発展させるために頑張るんだ。

町の人間からすれば悪霊。しかし、莊園の人間からすれば守り神。共通点は超常の存在であること。

——ヴォルフ坊ちゃんが暮らしてる閨樹館に行きたい？ 嬢ちゃんは冒険者なんだって？ 冒険譚を披露してくれるなら、歓迎されるかもしれないね。口添え

はできないよ。レーヴェエ家のメイドが入れてくれなきゃ、素直に諦めて戻ってきな。

カレンティアはレーヴェエ家のメイドについて聞いてみる。

——メイドは一人だけ。リリトウナさんだ。レーヴェエ家の火事で生き残ったけれど、顔に大火傷を負った。いつも素顔を隠してる。見られたくないんだらうね。だから、私らも顔を知らないんだ。

五年前の大火事でレーヴェ家の使用人は全員亡くなったと聞いていた。カレンティアは問いかけてみる。

——五年前はまだ使用人じゃなかった。働き口を探して、レーヴェ家で面接を受けてた。家督を継いだヴォルフ坊ちゃんが、メイドとして正式に雇った。闇樹館を仕切っているのはリリトウナさんだ。あの人の機嫌を損ねないようにするとだね。町の人間を私ら以上に嫌ってる。

村長の話を聞き終えたカレンティアは、まずレーヴェ家の本邸跡地に向かった。

大火事が起きた現場を自分の目で確かめようとした。

村の人間達は慰霊以外で近づかないという。生活圈と黒森の境界が曖昧な場所だからだ。

禁域に踏み込めば呪われる。荘園に住む人間達は、黒森の神を信仰している。レーヴェ家の当主は宗教的指導者でもあった。

「母さんに手紙を出したのは誰なのかしら……」

カレンティアは石積みの共同墓地に祈りを捧げる。

ダミエーラが眠っているであろう場所。きっと四年前に母親のベロニカもここを訪れていたはずだ。

「……？　これ……。足跡がある。真新しいわ。それと車輪の跡……」

板石が積まれた共同墓地には先客の痕跡が残されていた。

（これって二輪の荷車かしら……）

車輪の轍わだちは黒森に続いている。

（もしかして車椅子？　両手両足を失ったレーヴェ家の当主がメイドと来ていたのかも……。両親が眠っているお墓だもの。通っていても不思議じゃないわ）

カレンティアは車椅子の跡を追う。だが、足を止めた。

「ここから先は黒森の領域……。立ち入り禁止だわ」

足元に赤黒い石があった。真っ赤なペンキで警戒色を塗りたくっている。

（どうしよう。調べたい。でも、危険な気がするわ。……誰かに見られている？視線を感じるわ。どこから……？ 気配を隠すのが上手い）

この先に進めば禁域に足を踏み入れてしまう。行商人や村長から言いつけられた絶対遵守の掟。レーヴェ家の許しを得ず、無断で入れれば悪霊に呪い殺される。（私には聖剣がある。黒森の悪霊は恐ろしくない。でも……やっとな母さんの手がかりを掴めた。焦って揉め事を起こすのは良くないわ。レーヴェ家の当主には明日、会いに行けばいいわ）

カレンティアは黒森に背を向けた。身を翻し、引き返していく。車輪の行方を追いたい気持ちはあった。しかし、自制心が働いた。郷に入っては郷に従えだ。

（私の目的は母さんを探すこと。それを第一に考えなきゃ……。レーヴェ家と町の揉め事にだって、首を突っ込むべきじゃないわ。もっと情報を集めよう）

カレンティアは空を見上げる。粉雪が降り始めていた。地面に落ちた雪はすぐに溶けていく。まだ積もりそうにはない。だが時間の問題だ。

（今年の冬はここで過ごすことになるわね。クロヴィスに手紙を書こう。行商人に預けて、紹介経由で帝都に届けてもらえばいいわ。クロヴィスは心配してるかな。でも、行方不明の母さんをやっと見つけられそうな気がするの……）

この時、カレンティアは夢にも思っていなかった。

四年もの間、探し続けていた母親はすぐ近くに潜んでいた。どこから感じてい

た気配の正体は、木陰で淫行中のベロニカの視線だった。



真っ赤な境界石を越えて十数歩、歴史を感じさせる大樹の裏で、ベロニカは安堵していた。

「……どこかに行った？」

車椅子に座ったヴォルフガングからは何も見えない。視界のほとんどがベロニカの爆乳で遮られている。

「引き返していきました。莊園がある村に帰っていきますわ」

「よかったよ。こんなところ、見られたくないもんね。僕も……なんて言えばいいかわからないし……」

ヴォルフガングは苦笑いする。極度の緊張で萎えると思いきや、オチンポはいきり勃ってしまった。ベロニカのオマンコも敏感になっている。

「驚きで腰が抜けそうですわ……。どうして娘が……カレンティアがレーヴェ家の本邸跡地に……」

「ベロニカの娘さんで間違いなさそう？」

「はい。娘の顔を忘れはしませんわ。それに、あれは伯爵家の聖剣……。私が冒

「険者だったころ、使っていた愛剣ですわ」

「駆け落ちしたとき、実家から盗んだっていう剣？」

「恥ずかしながらその通りですわ」

「破天荒でいいと思うけどね。でも、どうしよう？　ベロニカを探しに来たんじゃない？」

「見つかるわけにはいきませんわ。私はもう……あの子とは会えない……。母親失格ですもの……。この姿を見せたらカレンティアの心を傷つけてしまう」

「話し合えば分かってくれないかな。僕も真摯に話すよ。ベロニカは浮気してるわけじゃない。未亡人の再婚は教会でも禁じられてはいないんですよ？　こう

なった責任は僕にある。結婚すれば、娘さんも認めてくれないかな？」

ベロニカの孕み腹は隠しようがない。大きく膨らみ、遠目からでも妊婦と分かる。

「子供を産んだことや妊娠は……時間をかけて話せば分かってくれるかもしれないわ。カレンティアも大人だから……。けれど、頭部を失っているのは……」

「そうだった。不味いよね。貌かおがないのは……」

「はい。誤魔化せませんわ。カレンティアは中級ランクの冒険者ですの。四年前から上級に昇格しているかも」

ベロニカは頭部を失った異形者だ。討伐対象にされる恐れがあった。

「ベロニカ……。娘さんを早く逃がしたほうがいいよ。リリトウナに知られたら……。僕とベロニカは子供をもう産まないつもりだけど、リリトウナは違う考えを持ってる」

ヴォルフガングはベロニカのボテ腹を抱きしめる。

「……………」

「ベロニカ？ 聞いている？ リリトウナが知ったら娘さんを……。贄に……。し……。」
ヴォルフガングは唾を呑み込む。喪失した両手両足が熱を宿した。存在しないはずの手足が燃えている。リリトウナが顕現する前兆だった。

ベロニカは両手で騎士兜を掴み、荒々しく一回転させる。

「——ヴォルフ坊ちゃんはお優しいですね。でも、私に隠し事はいけませんわ」

声が違う。別人の声。大きく異なるが、大人びた色っぽさはベロニカと同じだった。

「村長が報告にきました。行商人が不審な冒険者を連れてきたと……。ベロニカの娘だとか……。実に好都合♥ お喜びください。ヴォルフ坊ちゃん……。♥ これで三人目が産めますわ」



カレンティアは村長の家で一晩を過ごし、レーヴェ家の当主とメイドが暮らす闇樹館に赴いた。

帝国北方の厳冬をレーヴェ家の荘園で越すことになる。その許しを得るための挨拶だ。しかし、本当の目的はこの地で消息を絶った母親ベロニカについて探るつもりだった。

（もう後戻りはできないわ。行商人は今日の昼には町に戻る。もう雪が降り始めているわ。徒歩で町には帰れそうにない。……帝都のクロヴィスに会えるのは来

春ね。心配してるかな。まあ、でも、手紙は行商人に預けたわ)

莊園に連れてきてくれた行商人にクロヴィス宛ての手紙を渡してある。だが、カレンティアの手紙は帝都に届かない。

行商人はレーヴェ家に屈服していた。隣町の司祭が自殺した四年前、反抗心をへし折られた。行商人はレーヴェ家に齒向かえない。

カレンティアは自分が窮地に立たされているとも知らず、レーヴェ家の縄張りに取り残された。

(ここが闇樹館。たしかに不気味な雰囲気だわ。人里離れた森の中に佇む真っ黒な御屋敷……。ペンキの色じゃないわ。建材の表面を焼き焦がしてる……。?)

いえ、黒檀こくたんというヤツかしら？ 木目が漆黒で染まっている……)

石畳が敷かれた玄関先で、お絵描きの跡を見つけた。幼い子供が白亜墨チョーグクで色々な絵を描いている。

(私も小さかった頃は白亜墨チョーグクで、石床に落書きをしてたわ。当主のヴォルフガングには小さな娘が二人いる。描いたのはきつと娘達ね)

微笑ましい気持ちで落書きを鑑賞していたカレンティアは、不自然な絵を見つけた。闇樹館で暮らすレーヴェ家を描いた子供達の落書き。車椅子に乗った青年、その周りで遊ぶ二人の少女。ここまでは何もおかしくない。

四肢を欠損した父親、幼い娘達であろう。そして、奇妙なメイドが描かれている。

「え？ なに、これ……？」

不気味な姿のメイドが描かれていた。顔面が炭で塗りつぶされ、どす黒い黒点
が空いている。ヴォルフガングや二人の娘は、下手くそであるが口や目がある。
楽し気に笑っている。なのに、メイドの貌は潰れていた。

白亜墨チヨークで落書きしているくせに、わざわざメイドの頭部を炭で執拗に押し潰し
ている。娘達はメイドを嫌っているのだろうか。そんな勘ぐりをしてしまう。

(メイドの顔がない……。気味が悪いわ)

所詮は子供が遊びで書いた絵だ。メイドの面貌かおを上手に描けなくて塗りつぶし
たのだろう。

「……………」

カレンティアは口を噤み、押し黙る。闇樹館が醸し出す異様な空気に寒気を覚えた。行商人がこの古びた館に近づこうとしない理由が分かった。

玄関に備えられた真鍮製のドアノッカーで扉を叩いた。

「ごめんください」

しばらくすると足音が聞こえてきた。館内の廊下を誰かが小走りで駆けてきている。

「どなたですか？」

扉の向こうから誰何すいかの声が聞こえた。大人びた女性の声である。レーヴェエ家に

仕えるメイドであろう。

(母さんの声じゃないわ……)

失踪した母親の声は忘れていない。たとえ四年以上、会っていないとしても唯一の肉親だ。

カレンティアは胸を撫で下ろす。メイドの声は母親とは別人。旅の道中で抱いていた嫌な予感の外れた。

(ああ……よかった……。変なことを考えていたわ。ずっと……)

見当違いの妄想だった。失踪した母親が帝国辺境でメイドになっているなど、絶対にありえない。ましてや今年で四十四歳の母親が、レーヴェ家の若君と子作

りしているなんて現実味に欠けている。

「私は旅の者です。帝都で冒険者をしているカレンティアと申しますわ。先日、行商人の案内でレーヴェ家の荘園に來ました。冬をこの地で過ごそうと思っております。そのご挨拶で参りました」

「帝都の冒険者様でございましたか……。道のり厳しき中、よくぞお越しくございました。しかし、なぜ北方の奥地に？ 当家は冒険者組合に依頼を出しておりませんが……？」

「個人的な目的で旅をしています。四年前に私の母親が行方不明になりました。ヒースウッド修道院で隠棲していたのですが、友人のダミエーラさんに招かれて、

レーヴェ家の莊園を訪れているはずですよ。私は母親を探しています。レーヴェ家の方々からもお話を聞かせてもらえませんか」

「母君を探して、帝都からいらしたのですね。それはお気の毒に……。少々、お待ちくださいませ。玄関を開けますわ」

施錠を解除する金属音が聞こえた。闇樹館の玄関扉が開かれる。

「どうぞ、お入りください。私はレーヴェ家の使用人リリトウナと申しますわ」

出迎えてくれたメイドはリリトウナと名乗った。黒色基調のメイド服を優雅に着こなしている。純白のエプロンドレスが美しく引き立っていた。だが、視線を集めるのは彼女の体型であろう。

(このメイド……妊娠しているわ……)

膨らんだ孕み腹を包み込むため、メイド服の寸法を手縫いで調整している。出産が間近に迫っていると素人目でも分かる。ボテっとした臨月の丸みが、前部に飛び出していた。

ひとときわ目立つ媚体的特徴は、母性愛の強さを象徴する爆乳だ。はち切れんばかりに胸部の布地が張っている。これほどの巨峰は、なかなかお目にかかれない。カレンティアは唾を飲み込む。豊満を極めた乳房は母親の体躯と一致している。娘である自分にも受け継がれた爆乳の遺伝子。リリトウナと名乗るメイドのデカパイは、カレンティアの美乳と形状が酷似していた。

「お見苦しい姿で申し訳ありません。五年前の大火事で顔面に火傷を負ってしまつたのです。とても御客人に素顔を見せるわけにはできない醜女しこめなものですから……。どうかご容赦くださいませ」

リリトウナは素顔を騎士兜で隠していた。体型に意識が向いていたカレンティアは、黒騎士のフルヘルムを装着したメイドの異様な装いに気付くのが遅れた。
（厳つい騎士兜……。臨月の妊婦……。奇天烈な格好だわ……。間違いない。父さんのお墓に結婚指輪を埋めていったのは、レーヴェ家のメイドだわ）

カレンティアは確信する。この世にこんな格好の妊婦が一人もいるわけがない。四年前に失踪した母親の結婚指輪をレーヴェ家は入手した。これは揺るぎない事

実となった。

「そうなのですね。リリトウナさんは五年前からずっとレーヴェエ家で？ その……若君のヴォルフガング様にお仕えしているのですよね？」

「五年前からずっとヴォルフ坊ちゃんと暮らしておりますわ。周知の事実ですの
で、隠しもいたしませんわ、女としての幸せも享受しておりますわ。……ああ、
それと、靴は脱いでいただけますか。そちらの棚にある上靴スリッパをお使いになって」

闇樹館は土足厳禁だ。玄関のシューズボックスには成人女性と女兒の外靴があつた。

両脚がないレーヴェエ家の若君は靴を使わない。その代わり、車椅子の車輪に付

着した土汚れを布巾が置いてある。

「こちらですわ。応接間にご案内いたします」

リリトウナの後ろをついていく。カレンティアの耳にドタバタと騒がしい生活音が入ってくる。廊下の奥から楽し気な幼女達の声が聞こえた。

「……申し訳ありません。ここでお待ちになってください」

リリトウナは小走りで駆けていき、子供部屋の扉を強めに叩いた。

「ダザリーヌ！ アヴェロアナ！ もっと静かに遊びなさい。声が廊下にまで聞こえていますよ」

騒がしい声を発していた子供部屋は静まり返った。それに満足したりリトウナ

は、カレンティアのところに戻ってくる。

「リリトウナさんの娘さん達ですか？」

「レーヴェ家の娘ですわ」

「リリトウナさんが母君では？」

「ええ。産みの母は私です……。しかし、私はメイド。あくまで使用人ですわ。ヴォルフ坊ちゃんのご厚意に付け込んで、奥方の地位をせしめるつもりはありません」
闇樹館の応接間は気品に満ちていた。貴族にありがちな富を誇る家具は置いていない。

莊園を保有する裕福な准男爵家だが、帝都の華やかな大貴族と比べれば貧乏な

田舎者だ。見栄を張るつもりはないのだろう。だが、領主の威厳は必要だ。

教養を匂わせる蔵書が本棚に並んでいる。一番目立つのは壁に埋め込まれた絵画だ。レーヴェ家の荘園が描かれている。黄金色に輝くリンゴが実り、人々が笑顔で宴会を催していた。

(……町の人間からは恐れられていても、荘園で暮らす人達はレーヴェ家を慕っていたわ。応接間にこの絵が飾られているんだもの。良好な関係を築いているんだわ)

カレンティアが絵画に見とれていると、リリトウナは嬉し気に説明を始める。「とても素晴らしい絵でしょう。この絵は初代様の時代に描かれたものです。レー

ヴェ家は黒森の女神を保護し、この地に楽園を築こうとされたのです」

「黒森の女神ですか？」

「荘園の村人から聞いていませんか。精霊や妖精と呼ぶ者達もいますね。ご老人達の世代は、今でも女神と呼んでくださいますが、教会は異教の神を嫌うでしょう？　だから、呼び名も気を遣うのです。忌々しいですわ。……あつ、ごめんなさい。カレンティアさんは外の方でしたわね」

「お気になさらず。そこまで宗教に熱心じゃないです」

「それは良かった。腰に下げている長剣……。教会の紋章があるので、てっきり教会の聖徒だとばかり……」

「これは……その……。母方の実家から持ち出した剣です。聖騎士の剣だから、本当は冒険者が振るうようなものじゃないですよね」

「カレンティアさんはヴォルフ坊ちゃんにご挨拶されたいのですよね？」

「はい。それと、母親のこともお聞きしたいわ。行方知れずになった私の母親は、レーヴェ家を訪ねるつもりだったみたいです」

「ヴォルフ坊ちゃんとお会いするなら、その聖剣をお預かりいたします。不愉快とは存じますが、五年前にあのようなことが起きてしまいました。どうかご理解ください」

リリトウナはカレンティアに聖剣を渡すように求めた。話の流れはおかしくない。

外からやってきた人間が武装しているのだ。レーヴェ家は野盗に襲われて大勢が殺された。五年前の惨劇は、隣町の有力者が企んだ悪事と思われる。

(ここで渡さなかったら警戒される……か……。上手い言い訳も見つからないわ。それに、幼い娘達がいて、リリトウナさんは身重の妊婦……。レーヴェ家の若君は四肢欠損の不具を患った身……)

館内で凶器を携帯したがるほうが怪しい。

「お預けしますわ。母親から受け継いだ大切な聖剣です。扱いには気を付けてく

ださい」

「承知いたしました。娘達の手が届かないところに保管いたします。……ヴォルフ坊ちゃんを連れてまいりますわ」

リリトウナは聖剣を受け取る。その両手は漆黒色のロンググローブで覆われていた。

「リリトウナさんはいつも手袋をしているのですか？」

「はい。水仕事以外ではそうですね。両手にも火傷があります。気になりますか？
ご覧になれますか？」

そんな刺々しい言われ方をされて、「はい。見たいです」と言うのは常識を弁

えぬ変人だ。カレンティアは首を横に振った。

「いえ……。失礼な質問でした。ごめんなさい」

カレンティアが確認しなかったのは、リリトウナの左手だ。声以外は母親とそっくりの体型。左手の薬指を見れば確信を持てる。およそ三十年も結婚指輪を嵌めていた母親の指には、跡が残っているはずだ。

（別人だわ。髪の色も違う。母さんはプラチナブロンド色。リリトウナさんは黒髪……。だけど、見えているのは地毛？ 騎士兜の着鬘ウィツグだったら……）

リリトウナの後ろ姿は、母親と瓜二つだ。一つだけ違うのは、真っ黒な後ろ髪だけ。歩き方もそっくりだった。

「リリトゥナさん……っ！」

応接間から出ていくリリトゥナを呼び止める。

「つい最近、遠くに出かけたことはありませんか？」

「遠くに？ いいえ。そんなのありえませんわ。私はヴォルフ坊ちゃんのお世話をしなければなりませんし、娘達も小さいのですよ？ この五年間、レーヴェ家の領地から離れたことは一度もないですわ」



応接間の扉が静かに閉まった。

廊下で立ち尽くす妊婦メイドは、懐かしい聖剣を抱きしめてしまった。伯爵令嬢が実家の宝物庫から盗んだ騎士剣。夫の遺志を受け継いだ娘に託した愛剣。

ベロニカの半生が聖剣には宿っている。

「……………」

どれほどの時間、聖剣を抱いていただろう。

胸が締め付けられる。結婚指輪を夫の墓前に供えたときもそうだった。しかし、最後には決断した。己の半生に別れを告げる。

「お母様？ それともママ？」

子供部屋から出てきたダザリーヌが問いかけた。聖剣を抱擁したまま、突っ立っていたメイドを心配している。

「ダザリーヌ。この剣を森に捨ててきなさい。できますね？」

メイドは今の自分が何者かを明らかにせず、ダザリーヌに伯爵家の聖剣を押し付ける。長剣を抱えた重みでダザリーヌがよろけた。

「分かった。言われた通りにする。捨ててくるね」

「森の奥深く……。見つからないくらい遠くへ……。お願いしますね」

「うん……！」

ダザリーヌが聖剣を持って元気よく駆けていった。

姉が黒森に出ていくところを妹のアヴェロアナは、子供部屋の窓から覗き見ていた。三歳児の両目から涙がポロポロと流れ零こぼれていく。悔悟と悲哀の露つゆで、プラチナブロンドの艶髪が湿っていた。



レーヴェ家の若君と対面したカレンティアは、深い同情を抱いてしまった。木製の車椅子に乗ったヴォルフガングは、温和な笑顔が似合う青年だった。しかし、両手両足がなく、地を這う芋虫としか表現できない。とても哀れな姿だ。

両脚は太腿が半分しか残っていない。左腕は短小で、右腕だけは肘先まで残っていた。左右非対称の不具、アンバランスな両腕は五年前に起きてしまった不幸を強く印象付ける。

「ダミエーラ。懐かしいね。僕が十歳のときだったかな。剣術と馬術を教えるために母上が雇ったんだ。僕は覚えが悪くてね。才能もなかったし……。それでもダミエーラは根気よく教えてくれた」

「じゃあ、ダミエーラさんがレーヴェ家で仕え始めたのは……」

「八年くらい前だよ。当時は知らなかったけど、僕の護衛でもあった。父上はそっちのつもりで雇っていたみたい」

ヴォルフガングはカレンティアを快く歓迎した。レーヴェ家の領地で冬を越す許しは難なく得られた。

「帝国辺境の田舎だと、どうしても自衛が必要なんだ。レーヴェ家の荘園でも自警団を組んでいる。隣町とは揉め事の火種になっているけれどね。こちらが武器を買い込めば、あちらも……。良くない話だ」

「ダミエーラさんは五年の火事で？」

カレンティアの質問にヴォルフガングは悲し気に俯うつむいた。

「申し訳ないこととしてしまった。ダミエーラはとても強い女性だった。一人では逃げられた。……なのに、僕を助けてくれた。五年前の大火事で僕だけが助かつ

た理由をカレンティアさんは聞いたかな？」

「古井戸に逃げ込んだと聞きました」

「本邸の中庭に古井戸があった。飲み水には使わない。言い伝えがあつてね。……本邸が建てられた場所は、黒森の主を崇め祀る神聖な泉があつた。古井戸はその名残とされていた。……五年前の夜、押し入ってきた沢山の襲撃者に追い詰められた。退路は火の手で塞がれてた。もう無理だと思つた。……ダミエーラは僕を抱きしめて、古井戸に飛び込んだ」

ヴォルフガングは凍傷で両手両足を失つた。しかし、古井戸に逃げ込まなければ襲撃に殺されていた。火の手からも逃げられなかつただらう。

「ダミエーラさんは勇敢に戦われて亡くなられたのですね」

「僕の家族、そして使用人……。襲撃者のほとんども死んでしまった。建物に火を放った人間は、仲間も口封じで殺したかったみたいだ。村長には強く反対されたけれど、本邸の跡地に共同墓地を作ったのは、全ての犠牲者を弔いたかったからなんだ」

「……襲撃者が憎くはないのですか？」

「復讐は望まない。……四年前に隣町の司祭が死んでしまった。僕はそれを喜んではないよ。亀裂が深まったただけだ」

行商人が語っていた司祭の異常死。隣町の有力者は自殺と片付けてしまった。

その後ろ暗い事情をカレンティアは察する。

（レーヴェ家に賊を差し向け、放火した実行犯は……。隣町の司祭だったのかもしれないわ。帝国の官憲に訴えれば、司祭の罪も明らかになる……。だから……）

荘園で暮らす村人達は、司祭の死を喜んでいた。自分で頭部を挽ぎ取った死に様を誇らしげに語っている。

「そういうわけでダミエーラは五年前にこの世を去った。カレンティアさんは母親を探していると言っていたけれど……」

「はい。実は四年前、ヒースウッド修道院で隠棲していた母親に手紙が届きました。

これをご覧いただけますか。日付がちよつと怪しい手紙で……」

カレンティアは机にダミエーラの手紙を広げた。四年前に失踪した母親がレーヴェ家の莊園を訪れていること。村長が母親らしき女性を見ていると話した。

（父さんのお墓に結婚指輪が置いてあった話は、まだ秘密にしておこう……。やっぱりリリトウナさんが気になる。打ち明けるなら、ヴォルフ坊ちゃんが一人のとき聞いてみよう）

騎士兜で頭部を隠したりリリトウナの顔色は分からない。だが、失踪した母親の話題を持ち出してから、ヴォルフガングに変化があった。しばらく考え込んでから、言葉を選ぶように話し始める。舌先に迷いが生じていた。

「筆跡はダミエーラの手紙に思える。書いてる内容はレーヴェエ家の使用人じゃないと知らないことばかりだ。母上は……野心家だったから……。家格を上げるために、良家の令嬢と僕を結婚させる気だった。ダミエーラは辟易してたよ。だって、ベロニカはみぼ——」

隣に立っていたリリトウナは、ヴォルフガングの弱々しい言葉を遮り、きっぱりとした語気で塗りつぶしを図った。

「ベロニカさんは闇樹館に来ていませんわ。四年前なら忘れてたりいたしません。旧友のお墓参りをされた後、町に戻られたのでしょう。レーヴェエ家の荘園は厳冬期になると閉ざされます。そうなる前に帰ったはずですよ」

すらすらとリリトウナは捲まくし立てる。カレンティアは違和感を見逃さなかった。
（主人の言葉を遮った……？ 使用人にあるまじき無礼だわ……。いいえ、違う！
それよりも、ヴォルフ坊ちゃんのは私の母親を「ベロニカ」と言いかけて……。
呼び捨てにしたわ）

他人の母親を呼び捨てにするだろうか。

（態度がおかしい……。釈然としない）

不遜な田舎貴族ならあるかもしれない。だが、レーヴエ家の若君は礼節を弁えた好青年。カレンティアの母親に敬称を付けなかったのは不自然だ。カレンティアが抱くヴォルフガングへの第一印象と異なっている。

「カレンティアさんは冬の間、ずっと母君を探されるつもりかな？」

ヴォルフガングは言い直した。ベロニカの名前を口にしない。わざとらしい感じだった。

「はい。やっと掴んだ手掛かりです。冒険者組合や帝国軍が搜索に動いたにもかかわらず、この四年間で足取りは掴めていませんでした。やっと母さんの手掛かりを見つけたんです。諦めかけていたけど、母さんは生きている気がしてなりません」

「そう。カレンティアさんは母君を愛しているんだね。きっと生きているはずだ。……ところで、カレンティアさんは冒険者なんだよね？」

「はい」

「ご両親の影響で？」

カレンティアは不思議に思った。

両親が冒険者だったとは説明していない。ダミエーラの手紙を一読しただけで、察したのなら理解が早すぎる。

「まあ、はい。そうです。父さんは三歳の頃に亡くなって、あまり覚えていません。でも、母さんが剣術を教えてくださいました。十三歳のときに聖剣を譲り受けました。失踪する一年前だから……」

「ちょうど五年前だね。その聖剣はどこに？ カレンティアさんは武器を……持つ

ていないように見える」

「ヴォルフ坊ちゃん。私がお預かりしておりますわ。カレンティアさんは御客人ですが……。それこそ、五年前のようなこともありますので」

「心配し過ぎだね。むしろ娘達が悪戯しないか心配だ。剣をどこにしまったのかな？」

「書齋の金庫に入れておりますわ。カレンティアさんが帰られるとき、お渡しいたします」

「物騒な地域だからね。カレンティアさんも帰路は用心してほしい」

ヴォルフガングは視線を向けてくる。何かに気付いてほしい。メッセージを伝

えるような眼差しだった。

(ひょっとして聖剣の場所を私に教えてくれた……?)

レーヴェ家に怯えていた行商人の言葉を思い出す。「ヴォルフ坊ちゃんは悪い御人じゃない」と言っていた。あれは単なるお世辞ではなかったようだ。

「カレンティアさんは、ここに来ることは誰かに伝えてきた？ 心配してる人がいるんじゃない。さっきの話を聞いている限りだと、まるで飛び出すように旅をしてきたみたいだ」

「手紙を行商人に預けました。帝都の婚約者宛てに。彼は心配してるかもしれませんが大丈夫です」

「そうかな？」

「これでも上級ランクの冒険者です。私の強さは婚約者が一番よく分かってます」
「ここから帝都までは遠い。手紙が届かないかもしれないよ。母君を心配する気持ちは分かる。でも、見知らぬ土地で冬を越すのは……良い考えとは思えない。一度、帝都に戻って春になってから来ればいい」

「えっと……。心配してくださってるのは嬉しいです。でも、もう行商人は町に戻ってしまつて……。移動手段がありませんわ」

「莊園にレーヴェ家の馬がある。村長に預けてあるんだ。まだ雪は積もっていない。馬に乗れば行商人を追いかけられる。だから——」

(まさか……。私を追い出したい？ 母さんを探されたくないから？ やっぱりレーヴェ家は母さんの失踪に絡んでいる。そうに違いないわ。何かある。レーヴェ家の若君は私に嘘を……。何かを誤魔化してるわ……)

逃げ帰るつもりはない。

四年前に失踪した母親はレーヴェ家の莊園を訪問している。父親の墓前に結婚指輪を置いていったのはリリトウナに違いない。何よりも確信しているのは、ヴォルフガングの歯切れの悪い態度だ。

(——母さんを知っている。ヴォルフガングさんは会ったことがあるんだわ)

ベロニカは闇樹館を訪問しなかった。ヴォルフガングとリリトウナはそう語る。だが、真実なのかは疑わしい。

「おやおや……。困りましたわね。雪が降ってきました。これから吹雪ふぶきそうですわ。この悪天候ではとても町には戻れない。遭難の危険がありますわ」

見計らったタイミングで黒森に雪嵐が到来した。強風で運ばれた粉雪が窓にあたる。

「急に降ってきましたね。さっきまでは晴れてたのに……」

先ほどまでは雲一つない快晴だった。空模様は急変し、太陽が雪雲に覆われた。

「カレンティアさん、天候が回復するまで、闇樹館に留まられたほうがよろしいかと……」

リリトウナの申し出はヴォルフガングと正反対だ。それはそれで怪しさが滲んでいる。しかし、母親のことを探れるかもしれない。

「よろしいのですか？」

「ええ。お客様用の部屋がありますわ。ヴォルフ坊ちゃんの心配も最もですが、この季節に準備もせず強行軍は危険。北方の冬を侮ると命を落としますわ。隣町どころか、莊園に帰るのだって難しいでしょう。ふふふっ……。闇樹館なら安全ですわ」

リリトウナは人肌に冷ましたお茶を持ち上げる。ヴォルフガングの口元に近づけ、余計なことを喋らせないようにしていた。

「恐縮です。ご厚意に甘えさせていただきします」

「御客人は滅多に来ません。カレンティアさんを歓迎いたしますわ。ご自分の家だと思って寛くわいでくださいませ」

「ご厄介になる分は働かせてください。リリトウナさんは身重ですし、色々とお困りでしょう？」

「ええ、そうですわね。たしかに……。困っていたところでしたの。そろそろお腹の子が産まれる。カレンティアさんに手伝ってもらえるなら、とっても心強い

ですわ」

「娘さんが二人おられますよね？　以前は誰かが出産の手助けを？　莊園の方を呼んでいたのではありませんか」

「いいえ。今まではタイミングが悪く、一人で産んでおりましたわ。でも、腹を痛めている傍らで、ずっとヴォルフ坊ちゃんが励ましてくださいました。優しい言葉を耳元で囁いてくれますのよ……♡」

リリトウナは喜色満面のご様子だ。紅茶を飲むヴォルフガンクは照れ顔で顔を真っ赤にしている。主人と家臣、主従関係で結ばれた男女は、正式な結婚を遂げられない。けれども、深く愛し合っていた。

母親の失踪事件と絡んでいなければ、カレンティアはレーヴェ家のカップルを
応援していただろう。

カレンティアも身分差の恋愛結婚で生まれた身だ。伯爵家の令嬢だった母親が
冒険者と駆け落ちしなければ、カレンティアはこの世に生を受けていない。

(子供……。子供か……。私も帝都に帰ったら、ちゃんと考えよう。クロヴィス
と結婚して……。家庭を築く……。子育てはきつと大変だわ。だって、私の子供だ
もの……。母さんだってすごく苦労したはずよ……。)

恋仲の男と交わした言葉を反芻はんすうする。

(セックスしてるとき、言ってくれれば怒らなかつたのに……)

無断で膾内射精をしていたクロヴィスに怒ってしまったが、懐妊したら踏ん切りはついたかもしれない。公私のパートナーと幸せを築く。心の奥底では、クロヴィスの花嫁になることを強く望んでいた。

(どうしちやっただら。私らしくもないわ。もしかすると私……。リリトウナさんが羨ましいのかしら?)

応接間の窓から見える景色は、雪で装飾されていた。

本格的な冬が訪れた。帝国北方で暮らす人々は、暖房を完備した家に籠り、雪解けの季節を待ちわびる。

「見て！ 見て！ アヴェロアナちゃん！ 大きな氷柱つらら！ あっちから持ってき

たの！ 剣みたいでしょ！ クリスタルレイピア！」

風雪を物ともせず、元気いっぱいの幼女が庭で騒いでる。紫紺の長髪には枯葉が引っ付いていた。

「ダザリーヌお姉ちゃん。振り回したら危ないわ。こっちに向けなくて……。怖い」
「ごめん！ ごめん！ でも、綺麗でしょ。アヴェロアナちゃんも持ってみて！」
「つつ、つめたい！」

氷の冷気に驚いた妹は、姉が持ってきた氷柱を落としてしまった。粉々に砕け散った氷塊を見て笑い声をあげている。

「当たり前でしょ。あはははは。氷は雪よりよも冷たいんだよ」

「え……。そうなの……？」

「うーん。たぶん！　だって、雪のほうが冷たくないし、すぐ溶けるから！」

レーヴェ家の姉妹は仲良く遊んでいる。だが、その様子を応接間から見ていた両親は苦笑いしていた。

「まったくもう。ダザリーヌだったら……。いつも適当なことを妹に吹き込むんだから……」

「雪と氷のどっちが冷たいかはさておき、家の中に連れ戻そう。寒くないんだろ
うね。子供部屋で遊んでいるものだとばかり……。いつの間にも外に出て行ったん
だい？　あんな薄着で……。寒くないのかな」

「申し訳ありません。ヴォルフ坊ちゃん。私のせいですわ。部屋で騒ぐなど叱つたから……」

リリトウナは応接間の窓を開けて、雪遊び中の姉妹に向かって言う。

「ダザリーヌ。アヴェロアナ。早く戻ってきなさい。天気が悪くなってきたわ。お父様が心配なさっているわよ」

普段のリリトウナはヴォルフガングを「坊ちゃん」と呼ぶ。だが、娘達の前では「お父様」と敬称を使い分けていた。最初は娘達のことにもレーヴェエ家の令嬢として他人行儀に呼んでいたが、子育てをするうちにメイドから母親になってしまった。

「平気よ！ 寒くないの！ お母様！ だよね、アヴェロアナちゃん！」

「うん！ 寒くはないの。運動してるから平気だね」

「そういう問題じゃありません!!」

窓から上半身を乗り出した鬼母は、駆け回っている娘を叱りつける。厳つい騎士兜に角が生えている気がした。

「すいません。お見苦しいところを……。レーヴェ家はずっとこんな感じで……。ヴォルフガングは肩身を窄すぼめている。そこまで「怒らなくても……」と思っていそう。しかし、娘の子育てを任せている手前、リリトウナに口出しできないのだろう。

「私は賑やかでいいと思いますよ。ただ……あの……」

カレンティアは千載一遇の機会を得た。リリトウナの意識は姉妹に向いている。今なら聞きたいことをヴォルフガングに訊ける。

（聞きたいことは沢山あるわ。五年前に死んだダミエーラが四年前に手紙を送ってきたこと。四年前に母さんがレーヴェ家の莊園を訪ねていること。結婚指輪を父さんの御墓に埋めていったリリトウナさんのこと……。だけど……！）

わずかな隙を狙って問う。カレンティアの質問は心中で抱いていたはずれでもなかった。

「あの姉妹はどちらも実子ですか？」

姉のダザリーヌは紫紺の髪。妹のアヴェロアナは白金の髪。愛らしく美しい幼女であるが、姉妹にしては顔立ちが異なっている。美形であること除けば、まったく似ていない。

（本当に血の繋がった姉妹……？ それだけじゃないわ。父親や母親とも似てない。リリトウナさんはたぶん黒髪、ヴォルフガンクさんは珍しい深緑色……）

親子でこんな遺伝がありえるのかと疑問を感じた。

「ダザリーヌとアヴェロアナは血の繋がった僕の娘だよ。でも、不思議に思うはずだ。レーヴェエ家の娘達は母親と似てしまう。——カレンティアさんは母君にそっくりなんですね」

「え……なぜ……。やっぱり私の母さんを知って……?」

ヴォルフガングはリリトウナの様子を窺う。

まだ気付かれていない。許された時間は、ほんの数秒だ。

「静かに——。これから言うことをよく聞いて。まずは聖剣を探すんだ。取り戻したら闇樹館から逃げて。この嵐は局地的に発生してる。今なら隣町に逃げられる。荘園まで辿り着いたら、馬を盗みなさい。村長に気付かれては駄目だ」

「え……?」

「山道を進むときは境界標の赫石かくせきだけを信じて。絶対に迷う。一步でも黒森に入ったら、司祭みたいに殺されてしまうよ」

早口で警告を捲し立てたヴォルフガングは、わざと体勢を崩して車椅子から転げ落ちた。

「ヴォルフ坊ちゃん！」

異変に気付いたリリトウナが叫び声をあげた。寒風が吹きこむ窓を開け放ったまま駆けてくる。しかし、身重の身体はとても重たい。すぐには動けなかった。

ヴォルフガングは床に落ちる気だった。車椅子の高さなら、打ち所が悪くても打撲程度で済む。しかし、上級ランクの冒険者は緊急時、驚くべき速さで行動できてしまう。

「危ないっ!! 大丈夫ですか!？」

カレンティアは机を飛び越えて、ヴォルフガングの身体を両手で受け止めた。四肢欠損の矮躯は子犬のように軽かった。

「え……。あ、ありがとう。ごめん。カレンティアさんこそ大丈夫……。？」

カレンティアはヴォルフガングを完璧にキャッチした。しかし、ひっくり返った紅茶のティーカップを頭から被ってしまった。生暖かく冷めていたので、火傷は負っていない。しかし、服が濡れてしまった。

（あちやー。考えなしに助けちゃった。ずぶ濡れだわ……。乾くまでの着替え……。どうしょ）

紅茶の水分を吸った上衣が胸元にべったりと張り付いた。びしょ濡れの乳袋に

ブラジャーの色が浮かび上がる。爆乳の谷間では生肌が卑猥に透けてしまった。

「カレンティアさん……。そこを掴むのはちよつと……。困るってどうか……」

もぞもぞとヴォルフガングは身を振らせる。カレンティアの右手で膨らみができていく。棒状の突起をがっしりと握りしめる。そして、その正体を理解した。

「ご、ごめんなさいっ！ 私……。その！ そういうつもりじゃ……。!!」

カレンティアはヴォルフガングの股間を鷲掴みにしていた。意図せぬハプニングだったが、服越しに男根を感じていたのだ。

「……………」

無言のリリトウナが近寄り、ヴォルフガングを奪い取るように抱き上げた。

応接間に気不味い雰囲気立ち込める。騎士兜のメイドは表情を見せないが、明らかに怒っている。冷たい睨みがカレンティアを貫く。

(不可抗力……！ 本当に事故で……!! で、でも、これならさっきの会話には気付かれてないはずだわ……。不幸中の幸い……？ いいえ、なんか違う気がするわ)

リリトウナはヴォルフガングを車椅子に座らせると、応接間の窓をぴしゃりと閉めた。

「着替えの服を用意しますわ。カレンティアさんなら私のメイド服でサイズは合うでしょう」

「えっ！ いえいえ！ すぐ乾きますよ！」

「でも、そのままだと恥ずかしいでしょう」

リリトウナはカレンティアの爆乳を指さした。気遣いのできるヴォルフガンクは外を見ていた。雪化粧がされていく黒森の並木を無心で数えている。

「ヴォルフ坊ちゃんも困りますし、着替えてください。大丈夫です。お貸しするメイド服は、妊娠してないときに着ていたものですから。今の私は使いませんわ」
胸元を透けさせたままではいるわけにもいかない。カレンティアはレーヴェ家のメイド服を借りた。ブラジャーまで拝借した。予想通り、用意されたメイド服の乳袋はカレンティアの乳房を収納できるサイズだった。胸回りに若干の余裕が

あった。バストサイズはリリトウナがほんの少しだけ上回っている。

（私とお母さん。どっちが大きかったかしら？）

カレンティアは覚えていなかった。失踪した母親とリリトウナが同一人物。その可能性は捨てている。だが、妊婦姿でなければ母親と酷似していた。

記憶喪失でレーヴェ家のメイドになっている。

そんな可能性を考える。だが、絶対にありえない。リリトウナは五年前からレーヴェ家に雇われている。五年前に母親はヒースウッド修道院で暮らしていた。一緒に父親の墓参りへ行っている。

（五年目に私は母さんにクロヴィスを紹介してるのよ。リリトウナさんは別人

……。でも、だったら結婚指輪は？ 父さんの墓前に現れた騎士兜の妊婦は別人だっていうの……？ 左手に銀の指輪……。そう……。そうだわ……。！ リリトウナの薬指を見れば分かる。母さんには結婚指輪の跡があるわ！

メイドに変身したカレンティアは闇樹館に留まる。

ヴォルフガングの警告は気になったが、逃げ出すつもりはなかった。四年前に失踪した母親を見つけ出すまでレーヴェ家を調べると覚悟を決めた。



「ねえ。帝都ってどんなところ？　皇帝陛下ってお金持ち？　十階建ての塔があるって本当？」

昼食が終わった後、長女のダザリーヌはカレンティアを質問攻めにした。メイド服を着ているので、新しい使用人と思ってしまったようだ。

「皇帝陛下はお金持ちよ。高層建築もあるけど十階建てはないわ。伯爵家の御屋敷でも三階立てよ。それでも手入れが大変だし、階段が多いと暮らしにくいわ。十階建ての建物は教会の塔のことね。大きな鐘楼が吊るしてあるのよ」

好奇心旺盛なダザリーヌに対して、妹のアヴェロアナは子供部屋の隅で絵本を読んでいる。カレンティアをチラ見するものの、積極的に関わろうとはしない。

見知らぬ客人を相手に戯れつくダザリーヌは警戒心が無さすぎる。年下のアヴェロアナは大人びて見えた。

（アヴェロアナちゃんは私と似てるわ。白金色の癖毛……。プラチナブロンド……。私も小さい頃は、ああして母さんが買ってきた絵本を読んでいたわ）

物静かなアヴェロアナは、瞳の色までカレンティアと一緒にだった。

事情を知らぬ第三者がカレンティアとアヴェロアナを見たら、歳の離れた姉妹と言うだろう。紫紺髪のダザリーヌよりも血の繋がりを感じさせる。

「ダザリーヌちゃんは四歳なのよね？」

「そうだよー。四歳！ 私がお姉ちゃん！」

（ダザリーヌが産まれたのは四年前……。つまり、四年前に失踪した母さんの話は、この子から聞けないわ。三歳のアヴェロアナちゃんは生まれてすら……。子守りで得られる情報はないかも……）

幼女なら口が軽い。そう思ってカレンティアは子守りを引き受けた。しかし、考えが浅かった。

「玄関先の石畳にお絵描きをしてたのはダザリーヌちゃん？」

「うん！ 上手だったでしょ？ お父様がいっぱい褒めてくれた！ だから、消えるまで残しておいたの」

あの落書きは上手くなかった。カレンティアは不気味さを覚えた。

自信家のダザリーヌは己の画才を疑っていない。父親のヴォルフガングは愛娘を褒めて伸ばす教育方針なのだろう。

「どうしてリリトウナさんのお顔を黒くしてたの？ ひよつとして黒騎士のヘルムで顔を隠してるから？」

「ううん！ 違う！ あれはお母様じゃないよ!!」

ダザリーヌは首を横に振った。

「あの絵に描かれた女性はメイド服を着てたわ。レーヴェ家には他のメイドさんがいたの……?」

「ママ！ 私はママを描いたの！」

「お母様とママは同じでしょ？」

「ううん。違うよ。一緒だけど同じじゃないわ。ママはママ、お母様はお母様。だから、描いたのは一人だけ。ママとお母様は一人だもん」

「……………」

「ママとお母様は、お父様が大好きなの。だから、狡いんだよ。私だってお父様と添い寝したい。でも、私達が子供だからダメなんだって！ とっても変だと思うの。村長さんから聞いたわ。荘園の家族は一緒に寝るのよ。寒い夜はそうしたほうが暖かいもん。私はアヴェロアナちゃんと寝てる。でも、でも！ 人数が多ければ暖かいでしょ！」

それまで静かだったアヴェロアナが口を挟む。

「ダザリーヌはお姉ちゃん……。レーヴェ家は莊園の家族と違うの。同じ生活じゃダメ……。ママとお母様が言ってた……」

「え〜！ 同じ生活でいい〜！ お父様の寝室には皆で寝られる大きなベッドがあるのにい〜！」

カレンティアは姉妹の会話を黙って聞いていた。二人の間では「ママ」と「お母様」で意味が通じていた。共通認識ができている。

（どういうこと？ 「ママ」と「お母様」は一緒なのに同じじゃない……？ どういう使い分けをしてるの？）

考えてもさっぱり分らない。言い方が違うだけだ。しかし、ダザリーヌとアヴェロアナは姉妹なのに似ていない。生母が違うのではないか。燻っていた疑念が強まった。

「もしかして、ダザリーヌちゃんとアヴェロアナちゃんの『ママ』は違う人？」

「正解！ アヴェロアナちゃんと私はママが違うの。お母様と一緒に！ だから姉妹！」

（やっぱり……。この二人はリリトウナさんの子供じゃないのね。生母^{ママ}は別にいる。育ての母親がリリトウナさんで、お母様^{ママ}なのだわ）

「ダザリーヌお姉ちゃん。外の人にママのことは言っちゃ駄目だって……。お母

様……。怒るよ……。家族の秘密……」

「カレンティアはレーヴェ家のメイドなのよ？　もう身内だわ。家族よ」

「……そうなの？　メイドは……家族かな……？」

アヴェロアナは納得できていない様子だ。

「ええ。ダザリーヌちゃんの言う通り。闇樹館でお世話になっている間、メイドとして働くつもりよ。使用人と思ってくれていいわ。お嬢様が望むがままに」

「ねえ、カレンティアもママになるの？」

「え？　ええ……!?　なっ、なにを言ってるの？　私がママ……!?」

「違うの？　だって、カレンティアは応接間でお父様と抱き合ってた。お母様が

真っ赤になって怒ってたの見ちゃった。燃えてた！ 髪の毛が逆立ってたわ」
「違う！ 違う！ あれは事故！ 事故だったの！ 変な勘違いはやめて、私は
そういうわけじゃないわ」

「なーんだ。ママになる人じゃないのね。じゃあ、私達の妹になるんだわ！」
ダザリー又は突拍子もないことを言いだした。「ママ」と「お母様」だけでも
混乱の渦中に陥った。さらに「妹」という不可思議な単語。カレンティアの理解
力は周回遅れとなる。

(いもうと……？ 私達の妹になるって……なに……!? どういうこと?)

「良かったね。アヴェロアナちゃん！ やっとお姉ちゃんになれるよ。私も楽し

み！ カレンティアが妹になったら、夜は真ん中に寝かせてあげるわ」

ダザリーヌはとても嬉しそうだ。

ところが、アヴェロアナは表情を絵本で隠してしまった。カレンティアとの間に距離を作っている。二人はあまりにも外見が似通っていた。同族嫌悪ではないが、アヴェロアナのほうもカレンティアの瞳色や髪色を気にしているのだ。

——夜になったが天候は回復しなかった。

闇樹館の周囲では昼間以上の風雪が吹き荒れている。カレンティアは姉妹の遊

び相手をしながら、嵐が過ぎ去るまで闇樹館に停留を余儀なくされた。



夕食ではリリトウナが絶品の手料理を振舞った。

カレンティアも人並程度の料理はできる。しかし、冒険者の粗野な食事だ。味は悪くないものの、見てくれが悪い。本職のメイドには逆立ちしても勝てない。

一宿一飯の恩義は、子守りで返すことになっている。姉妹の入浴を手伝い、ついでに自分も長旅の汚れを落とした。レーヴェ家は越冬用の薪と木炭を大量に備

蓄していた。井戸から自噴した水を湯釜で沸かし、木製の湯舟に注いでいる。

湯水を豪勢に使えるのは、莊園の収益が大きいおかげだ。

燃料代を気にしている様子はない。閨樹館は暖炉の熱を床下に流す暖房構造であるため、火を絶やさなければ建物全体が暖かくなる。

ダザリーヌとアヴェロアナはそれでも寒いという。だが、他の家で暮らした経験がないからだ。平民の家は鼻水が凍るほど寒くなる。暖房がしっかりしている貴族の家でも、廊下では吐く息が白くなる。

レーヴェ家の本邸が焼け落ちる前、閨樹館は別邸扱いでほとんど使われていなかったが、とても勿体ないことをしていたとカレンティアは思った。冬に間、こ

れほど居心地がよい家はない。

「——でも、やっぱり変だわ」

与えられた寝間着で、客間のベッドに寝る。天井を見上げていた。

ダザリーヌには子供部屋と一緒に寝ようと誘われたが、アヴェロアナに配慮して辞退した。人懐っこい姉と違って、物静かな妹はカレンティアを身内と思っていない。

（夕飯のとき、リリトウナさんは食事に手を付けなかった。顔に火傷があるから

……。でも、素顔を隠してるのは気になる……。両手も……。ずっと黒手袋で隠したままだったわ)

寝転んでいたカレンティアはガバツと起き上がる。ノーブラの爆乳が勢いでこぼれそうになった。胸元を締めて直して、装いを整える。

すぐに確かめなければ気が済まなかった。

(きつと今頃、浴室はヴォルフ GANG さんが使っている。一人でお風呂には入れないから、介助でリリトウナさんも……。入浴中ならあの騎士兜を外す……。左手の薬指も確認できるわ)

姉妹は子供部屋で寝ている。カレンティアが客室から消えていても不在は悟ら

れない。

（結婚指輪を父さんの墓前に埋めた妊婦は、絶対にリリトウナさんだわ。その理由は何？　なぜ嘘をつくの？　ヴォルフガングさんが私に警告したのだった……）

カレンティアは客間のクローゼットで干されている自分の服を見た。紅茶の色が染みているが、乾ききっている。

（嵐は局所的……。闇樹館から逃げて……。荘園の馬を盗めば……。いいえ、駄目よ。レーヴェ家の若君も怪しいわ。だって、彼は私を見て母親似と言ったのよ。つまり、四年前に失踪した母さんを見てるってことじゃない……！）

もし母親が何らかの理由でレーヴェ家に囚われていたなら、ここで自分が逃げ出せばどうなるだろう。母親とは二度と会えないかもしれない。

（――覗きに行こう。リリトウナさんの素顔を見たい。レーヴェ家の秘密……。隠している何か分かる気がするわ）

暗闇の廊下を忍び足で歩く。闇樹館の窓枠には遮蔽扉がある。分厚い鉄板が月明りを遮っていた。嵐の雪雲で夜空は覆われているだろうから、カレンティアは最初から月光を当てにしていなかった。

いた。しかし、想像を凌駕する激しい営みが行われている。

幼い娘達を子供部屋で寝かしているのも、男女の営みを見せたくないからであろう。入浴中のエッチは夜戦の前哨戦に過ぎない。本番のセックスは寝室で行われる。

（さすがに悪い気がしてきたわ……。でも、今なら絶対に裸のはずだわ……。まさかセックス中も騎士兜を装備してるなんてないわよね？）

カレンティアは脱衣室の扉をゆっくりと開ける。喘ぎ声に加えて、素肌が触れ合う生々しい肉音まで聞こえてきた。

（セックスは浴室でしているようね。これだけ喘いでいるなら、私に気付くわ

けないわ。車椅子の横に木編みのバスケット……。メイド服と……。黒い騎士兜……。黒手袋も外してるわ。——よし、ちよつとだけ覗こう。顔と薬指。それさえ見たら撤退する)

カレンティアは冒険者パーティーではもっぱら前衛戦闘を担う。斥候役は婚約者のクロヴィスだ。隠密行動は専門外だったが、素人に気付かれる下手は打たない。気配を殺し、脱衣室に侵入した。

浴室は真っ白なカーテンで囲まれていた。油を塗り込んだ長布は撥水効果を発揮する。

カーテンが適度に湯気を閉じ込めて、風呂釜から立ち昇る水蒸気でサウナを楽

しめる。

カレンティアは姉妹達と湯を溜めて普通に入浴したが、ヴォルフガングとリリトウナは半身浴で汗を流していた。蒸し風呂状態の浴室からは性臭が漏れ出している。

(精液の匂い……)

子種の芳香が鼻孔を刺激する。ヴォルフガングとリリトウナの入浴はいつも最後だという。風呂にこもった淫行の残り香を娘達に嗅がせないためだ。

「ああんっ♥ んんうっ♥ んおああっ♥ あっああっああっくく♥ ヴォルフ坊ちゃんっ……♥」

湯舟の波音が荒ぶっている。

淫猥な雌声で叫び、悶え悦びながら、リリトウナは陰部を打ち付けていた。

「ああん♥ ああんっ♥ んあっ♥ はあっ♥ はあっ♥ んんうっ♥」

一度や二度の射精では満足できない。臨月の妊娠オマンコで若君のオチンポを締め上げる。

「ヴォルフ坊ちゃん……♥ 私のデカパイを吸って♥ 吸ってェ♥ しやぶって
くださいませ♥ カレンティアの乳房よりも大きいからあっ♥ ほらあ♥ ちゃ
んと確かめてえ♥」

「リリトウナ……っ。あれは……その……。男の生理反応で……！ 別に欲情し

てたわけじゃ……!!」

「そうですね? ふふっ♥ ギンギンに勃起してたのは私の見間違いだっのかしら♥ ああ♥ 妬いてしまう♥ 若い女の身体ですものねえ……♥ 乳房の張りは負けてしまうかもっ……♥」

「そこは張り合うところじゃないよ。本当に違うって……!!」

「やけに親身でしたわ……♥ ヴォルフ坊ちゃんと近しい年齢の娘ですものね♥ 恋人にするならやっぱり若娘?」

「勘弁してよ。苛めないでほしい。僕の好みは年上だし、誰にだって親切さ。

……それにカレンティアさんはベロニカの娘だ。探しに来たんだ」

「墓参りは失敗でしたわね。四年も経った今頃に現れたのですよ。きっとベロニカは誰かに見られたんだわ。ヴォルフ坊ちゃんはお聞きになってませんか？」

「えっとね。墓守の司祭さん。村の人に見られたんだって……謝られた」

「あんっ♥ もう……。教会の司祭はこれだからイヤですわあ♥ 凶兆はいつだって教会絡み……♥」

「すれ違っただけだ。話してはいないそうだよ。当然、顔だって見られちゃいない」「ベロニカを墓参りに行かせるのは反対でしたわ。いくらなんでもヴォルフ坊ちゃんには甘すぎます。……こうなっては仕方ありません。あとは私にお任せください」「明日には帰ってもらう。カレンティアはそれで——」

「いいえ。いけません。無理に帰らせたところで春になったら戻ってきます。説得は不可能ですわ。レーヴェ家は怪しんでいます」

「そっ、そうかな？」

「ダザリーヌが口を滑らせたと、アヴェエロアナが教えてくれました。それに私のことも勘ぐっていますわ。夕食で使った食器を洗っているところを覗こうとしていました」

「え……。覗く？　なんで？」

ヴォルフガングは分かっている。だが、カレンティアは苦虫を噛み潰したような顔で拳を握りしめた。

(不味いっ……！ 厨房に忍び寄っていたのは勘づかれていたわ。けれど、重要な会話を盗み聞けた！ 母さん生きている！ 結婚指輪のことも!! さっきの会話から推測するに、母さんはレーヴェ家に監禁されているのだわ……!!)

カレンティアは浴室のカーテンに指を掛ける。緊張で心臓の鼓動が高鳴っていた。

(問い詰めるのはまだ早い。もっと情報を盗み聞きたいわ。気付かれないように覗き見よう。ちよつとだけ隙間を……。気付かれないくらいの細さでいい。私の視線が辛うじて通る狭さで……)

真つ黒な後ろ髪が見えた。首筋に濡れた長髪が張り付いていた。揺れ動く爆乳

の輪郭が背後からありありと突き出ている。

(火傷なんて負ってないじゃない……!!)

リリトウナの裸体に火傷の痕はなかった。

みずみず瑞々しい綺麗な雪肌。うるお潤いに満ちた美しい皮膚であった。見惚れるほどの妖艶

さ。若娘では醸し出せない熟れた色気がある。

肉付きが柔らかく、デカ尻の下半身は特に顕著だ。デカパイの乳輪は茶黒の染みが大きく広がり、経産婦を物語る色付きになっている。

「左手の薬指が気になるのでしょぅね♥」

リリトウナは灯りに左手の薬指を翳かざした。

まるで観客に見せびらかすような、芝居がかった仰々しい動きだ。肌に刻まれた円環をカレンティアは目撃する。結婚指輪を嵌めていた痕跡があった。

（指輪の痕……！　でっ、でも……！　変よ！　説明がつかない！　母さんの指輪をリリトウナが着けてたっというの……!?）

カレンティアはさらにカーテンを開けて、身を乗り出した。

湯舟に張られたお湯は、水溜まり程度しかなかった。リリトウナは背を向けており、騎乗位で交わるヴォルフガングの視界は爆乳で遮られている。二人ともセックスに夢中で、死角にいるカレンティアは見えていない。

「はあっ♥　ああっ♥　んあっ……♥　ふふっ♥　ヴォルフ坊ちゃんの興奮が伝

わってきますわ。本当は嬉しいのでしょう？　今まで頑固に結婚指輪を外さな
かったついに捨てたんですもの……♡」

「リリトウナ……！　僕は……！　んっ……くう……！！」

「ご自分の感情を否定なさらないで……♡　御主人様の幸せが下僕の快樂なので
すよ……♡　ヴォルフ坊ちゃんが最愛の殿方おとこ♡　罪作りですわ♡　未亡人の女心
を墮とした責任はお取りくださいませ……♡」

「はあはあっ……！　ううっ……！　うっ……ん……！！」

ヴォルフガングが男根を突き上げて射精している。

熟しきった膣穴が若人のオチンポを貪むさぼった。既に何度も子種を吸ったオマンコ

は、白濁した淫汁をお漏らししている。淫猥な搾精を目の当たりにし、たカレンティアは茫然自失で立ち尽くしていた。

(嘘だ……！ そんなわけないわ……！ ありえない……!! だって、母さんは……！ 私の母さんが……！ 違う！ 違う！ 違う!! 母さんなわけがないっ!!)

カレンティアは拒絶する。だが、理解してしまった。見覚えがあるのだ。

幼き日に母親と背中を流しあった。まだ子供だったカレンティアの胸は小ぶりで、母親の乳房は自分の頭よりも大きかった。後ろから見ても乳房の丸みが見えた。

父親が健在だったころ、歯が生えていない乳児のカレンティアは母親の乳汁を吸っていた。茶色の突起を咥えれば、甘美な白蜜を味わえた。

(嫌だ！ 信じたくない……！)

猛烈な吐き気がする。ヒースウッド修道院に隠居していた母親はいつだって、父親との惚気話を語ってくれた。左手の薬指で輝きを放っていた銀の結婚指輪。それを撫でながら母親は、偉大な父親の英雄譚を懐かしみながら声に乗せた。

「ああ♥ んんうっ♥ んっ♥ んうっ♥ んうっ♥ んうっ♥ んうっ♥」

嬌声が浴室に反響する。その声は母親に似ていた。レーヴェ家のメイドは別人の声だった。しかし、今の喘ぎ声はカレンティアの肉親だ。

「はぁ♥ ふうつ♥」

挿入されていたオチンポを優しく引き抜き、湯舟で立ち上がった。股から逆流した精液が逃れ落ちる。乱れていた黒髪を手で束ねて絞る。

「愛する男女の営みを覗き見だなんて無粋ですわ」

メイドはセックスを覗き見ていた女冒険者に向けて語り掛けた。



リリトウナはカレンティアの視姦を意地悪い口調で咎める。あからさまな嘲笑

も混じっていた。いつから気付いていたのか。そんなのは分かり切っている。

(最初から気付いてたわね……！　この女っ……!!)

殴りつけたくなる。だが、相手は身重に妊婦だ。手荒な真似はできない。しかし、カレンティアは脅しつけてでも真相を吐かせるつもりだ。

「答えなさい!!　貴方……！　その身体は何なの……!?!」

「おかしな質問をなさるのですね。気付いたのでしょうか？　だったら、分かるはずだわ。——私は貴方の母親ベロニカよ♥」

「違う！　貴様が母さんなわけあるかあ!!」

「なぜ？　身体を見たんだから分かるはずよ。この胎から産まれた娘のくせに、

母親のオマンコを忘れてしまったの？ ふふふふふっ……♡」

ボテ腹を撫でまわし、両手の指先が女陰へ伸ばしていく。オマンコに左手の薬指を突っ込み、膣道をぐぢゅぐぢゅと掻き混ぜる。十八年前にカレンティアが通った産道は精液で穢されていた。

「やめろっ！ 母さんの身体を弄ぶな……!! よくもっ！ 操っているのね……!! ダミエーラの手紙を偽装して、母さんをレーヴェ家に誘き寄せた！ そして身体を操り人形して……。そんなふうには……！ 許せない！」

「そんなふう？ ああ、ひよっとして妊娠のことかしら？ なぜ怒るの？ 母親だって女よ。好きな男が出来ちゃったのなら、赤ちゃんを産みたくなるのは普通

だわ。その歳で恋を知らないわけじゃないでしょうに……」

「黙れ！ 母さんが望むわけない！ 嫌がる母さんを無理やり……」

「困った娘ですわ。誰に似たのかしら？ カレンティア。見苦しく駄々をこねないの」

娘を叱りつける母親の声だ。カレンティアは後退る。

「やめろっ……！ その声をやめなさいよっ！」

「はあ……。鈍い娘だわ。愛娘に温情をかけてあげてるのよ？ 私はレーヴェ家の使用人になったの。カビ臭い修道院で老衰するまで暮らすより、ヴォルフ坊ちゃんと家庭を築いて第二の人生……♥ カレンティアだってもう大人でしょう？」

母親がいなくたって苦勞はしないはずよ」

「そんな見え透いた嘘で私を騙せると思わないで！」

「あらあら？　見え透いた嘘？　闇樹館でカレンティアは何を見ていたのかしら？　私とヴォルフ坊ちゃんは相思相愛よ。もう結婚指輪は外したわ。私は選んだのよ」

「……っ！」

「可愛い娘だって産まれたわ。アヴェロアナはカレンティアの妹よ。三年前に私が腹を痛めたヴォルフ坊ちゃんとの子供……♥　子守りをさせていたのに、気付かなかったのかしら？　アヴェロアナは分かっていたわよ。カレンティアが自分

の姉だってね。名前を似せたのだから、気付きそうなものだけど……。胎は同じでも種が違うから、子供の出来も違うのかしら？」

「……貴様っ！ それで私の母親に成りきってるつもり!?」

「いいえ。後半は私の愚痴よ。謝罪するわ。だって貴方、私の話を信じないんだもの。嘘も言ったけれど、真実も話してあげたわ。納得して引き下がるのなら見逃すつもりだったけれど……。説得はやっぱり無理だわ」

「ふざけるな！ その身体を母さんに返せ!!」

「ええ。そうしましょう。私の名はリリトウナキスキル。御主人様にお仕えする忠実なメイド♥ ヴォルフガング・ゴットフリート・レーヴェ卿の手足ですわ



真名を明かした。メイドはそれまで隠していた素顔をカレンティアに向けた。

「いけない！ リリトゥナの貌を見ないで!!」

湯舟で足掻いていたヴォルフガングが叫んだ。

(貌を見るな?)

カレンティアの一瞬だけ迷ってしまった。リリトゥナは邪悪な存在だ。それは断言できる。一方、ヴォルフガングはその仲間であるが、純然な悪側に思えない。昼間には「逃げろ」と警告してくれた。

——けれども、母親の身体を凌辱したケダモノだ。

四年前に失踪した母親は、レーヴェ家に囚われて肉体の自由を奪われた。アヴェロアナは異父妹。その現実をカレンティアは受け入れるしかなかった。ほんの半日しか過ごしていないが、幼い頃の自分にそっくりだった。

（母さんはレーヴェ家の子供を産まされた……！ ヴォルフガングはさっきも操られている母さんと……っ!! そんな奴の警告なんて……っ!!）

欲望のままにヴォルフガングは肉棒を突き立てた。たとえ善人面していても、母親を犯した男の言葉は疑わしい。嫌悪がカレンティアの行動を鈍らせた。

「――あ」

暗黒の鏡顔きょうめんを見てしまった。

リリトウナの無貌には何もなかった。眼・鼻・口、人間の貌を形成する部位が存在しない。黒曜石のような磨きあげられた漆黒に、カレンティアの美顔が反射している。

「あはあっ……♥
転テン……操ソウ……滅メツウ……♥
」

のっぺらぼうの鏡顔きょうめん。映り込んだカレンティアは邪悪に嗤う。口元が持ち上が

り、勝ち誇っていた。

（しくじった！ こいつは直視したらダメなや——）

カレンティアは咄嗟に聖剣を握ろうとした。

いつもだったら腰に装備している。柄を握れば聖なる加護が使い手を守る。しかし、そこに聖剣はなかった。

（——最悪だ！）

ヴォルフガングが与えてくれた最初の警告を思い出した。逃げる前に聖剣を取

り戻せと伝えていた。考えれば分かることだ。リリトウナは闇樹館を訪れたカレンティアから聖剣を取り上げた。聖剣の加護が邪魔になるからだ。

「ううううううっ!? あああっ……ううっ……ううううっ! んぎい……! ひぐうっ……! んぎぐうう! ん ううううっ! う ううううう! ああっ! ああっ! んあおおおおお……!」

カレンティアは白目を剥いて叫ぶ。直立したまま全身をぶるぶると震わせた。リリトウナの無貌から剥がれ落ちた黒い粒子が吸い込まれていく。

「お っおっ……! んお っごおおおおお……!! あ っあっ! やだっ! やっ! やあっ!! 入ってくるなあ! でてい……! あああ! んあああああ

あああああああつ」

獣の声で啼き喚く。膀胱の堰せきが決壊し、女陰が小便を噴いた。無様に失禁したカレンティアは跪いた。

「……………」

静まり返った。ベロニカの身体がゆっくりと倒れ、湯舟に横たわった。下敷きになったヴォルフガングは、重たい母胎に押しつぶされそうになる。

「うわあつ！ ちよつ、リリトウナ！ 身体にいないの!? じゃ、じゃあ、ベロニカでもいいけど、戻ってきて！ 僕じゃ支えられない！」

間一髪で助けが入った。ニコニコと笑ったカレンティアが首無しの妊婦を抱き

支える。

「はあはあ……。ありがと。でも、カレンティアさんじゃないよね？」

あきららかに様子が異なっていた。頭部を欠損したベロニカを湯舟の端っこに寄せる。

「ヴォルフ坊ちゃん……。♥ 今はカレンティアとお呼びくださいませ。あああつ……。♥ 若い身体はいいですわ。はいれた♥ はいれた♥ はいれた♥ はいれた♥ はいれた♥ はいれた♥」

「リリトウナ。よくないと思うんだ……。すぐく……。よくないことをしてると思う」
「ヴォルフ坊ちゃんのせいじゃありませんわ。そんな貌をなさらないで♥ この

身体をきつと気に入りますよ♥ ああ、でも処女じゃないのは残念だわ……。婚前の身で……。小便臭い小娘くせに乱れてますわ」

カレンティアは寝間着を脱ぎ、お漏らしで汚れた下着を捨てた。桶で湯をすくいあげて身を清める。

「ねえ。リリトウナ……。返してあげようよ。ベロニカが悲しむ」

「今はカレンティアですわ。この身体はヴォルフ坊ちゃんに捧げられたのです。それにベロニカだって分かってくれますわ。今宵は母娘の味をご堪能されるのがよろしいでしょう♥」

「いや……。それは……。そもそもカレンティアには帝都に婚約者が……。！」

「どうせ帝都には帰れませんわ。恋仲の男とも永遠に会えない。それならばヴォルフ坊ちゃんが責任を取られては♥」

全裸のカレンティアがヴォルフガングに接吻する。最初は抵抗する仕草を見せたが、四肢欠損の青年には抗う術がなかった。

「んふっ♥ 久しぶりの貌ですわ。口吸いが病み付きになりそう♥ ヴォルフ坊ちゃんだって、オチンポはこんなに素直♥ 私の……っ♥ カレンティアのオマシコには挿りたがってますわ♥」

「だっ、だめっ……!! 勝手にそんなことしたら……!!」

カレンティアは美乳を押し付ける。母親のベロニカよりも若干劣るが、乳輪は

新品同然の鮮やかなピンク色。同い年の美女はぐいぐいっと迫ってくる。

「さあ。応接間で私にしたかったことをなさって♥ 浮気がしたいの♥ 帝都にいる婚約者は屈強な冒険者……。でも、オチンポはヴォルフ坊ちゃんのほうが立派だわ。母さんを惚れさせたように、私も寝取って……。♥」

「まさかカレンティアの記憶を……」

「ええ♥ もう自我は溶けてしまったわ。だから、これはカレンティアの望み……。♥ ヴォルフ坊ちゃん♥ はやくうつ♥ 挿れて……。♥」

レーヴェ家はの若君は善良であろうとした。生来の心優しい気質、魂魄に宿る形質、受け継がれた血統の遺伝子。無貌の女神は恋をしている。

ヴォルフガングと愛し合う。そのためには美女の身体がどうしても欲しかった。愛情でカレンティアの自我を染め上げる。帝都に残した婚約者クロヴィスを忘却の彼方に追いやり、憐憫の情が沸き立つ不具者に言い寄った。

母親譲りの爆乳が覆いかぶさってくる。バストサイズは驚異の一〇〇センチ超。引き締まった女冒険者の腹筋。張り艶で光沢を帯びたデカ尻。プラチナブロンドの長髪から水滴が滴る。

「お願いしますわ。この私を抱いてくださいませ♥」

挿入を媚びてくるオマンコが、ヴォルフガングのオチンポに擦り寄る。こうなりたくなかったから、何度もカレンティアに警告した。リリトゥナに頼み込んで

一度だけは見逃す機会を作ってもらった。

ヴォルフガングはもう子供ではない。レーヴェ家の家督を継ぎ、莊園の主となった。青年を迎えた十八歳の領主には二人の娘がいる。父親の自覚が芽生えれば、淫情的欲求に抗えるものだと期待していた。

(僕は最低だ……)

男の本能を抑えきれなかった。手足を失っても、生殖器は健在である。猛々しく勃起したオチンポは、淫汁の垂涎よだれを垂らす膣口に吸い寄せられていった。巨大な罪悪感に押し潰されそうだった。けれど、雄々しき獣欲は高まり続け、ついには理性を凌駕した。

ヴォルフガングはカレンティアの尊厳を踏みにじる。四肢欠損の不具者は、鍛え上げられた女冒険者の恵体を辱める。捧げられたオマンコに硬く勃起したオチンポを突き挿れた。

(「まただ。僕はまた……。やってしまった……。」)

結婚を誓った恋人がいる美女の肉体と姦通する。

旦那と死別した未亡人との肉体関係なら、まだ自由恋愛の言い訳が立つ。しかし、このセックスは不貞行為の誹りを免れない。ヴォルフガングは後ろめたかった。だが、オマンコに挿入されたオチンポは力強く熱^いき勃つ。道徳を踏みにじるインモラルに高揚してしまう。

（僕の魂は穢れて……。黒森の女神様に誘われ……。深い闇の底に墮落していく……。自分の意思ではもう止められない）

レーヴェ家のお坊ちゃんは美熟母を孕ませ、その娘までも寝取る。

「ごめん……。っ！ うっ！ くうっ！ んっ！ 出すっ……。膣内に出してしま
う……。っ！」

恋人の先約を取り消し、子宮最奥に精液を浴びせかけた。クロヴィスの精子では辿り着けなかった卵管膨大部に、ヴォルフガングの優秀な子種は侵入する。

「はあっ♥ んうっ♥ 夢見心地ですわあ♥ 素晴らしい……。♥ ヴォルフ坊
ちゃんは何も悪くありません。私の願い♥ 私の意思♥ 私の欲望♥ 私の裏切

り♡ 浮気であろうとも私は交わりたいの……♡ だって、今の本命はもう……♡
♡ オマンコを寝取ってくささいませっ♡ 尻ピッチ軽女の子宮にレーヴェ家の遺伝子を刻んで……♡ 御主人様の女ものになさって♡」

洗脳状態のカレンティアは、レーヴェ家のお坊ちゃんを愛するメイド。排出直後の卵子を悦んで捧げた。幾億匹の精子が泳ぎ進み、先頭集団が獲物に群がる。旺盛な精子達から激しい輪姦を受け、限界に達した卵子はついに屈服する。

——ぢゅっぷん♡

最初の一発目。この瞬間、男女交配は成った。受精成立にカレンティアは気付いていない。射精の疲労感に襲われているヴォルフガングも種付けの成功に無自覚だった。

「はあ♥♥ はうっ♥♥ あんっ♥♥ 暖かいわあ……♥♥ ヴォルフ坊ちゃん血潮を感じる……♥♥ 溶岩のような火照りが胎に広がり、私の身体を焦がすう……♥♥ 五年前……冷たい井戸水の中で愛し合った……♥♥ 幸福の絶頂が脳裏に蘇るう……♥♥」

着床完了までにかかる期間はおよそ二週間。カレンティアの運命が定まるまで、僅かな猶予が与えられた。

——そして、レーヴェ家のメイドになってから一週間以上が過ぎた日の夜半、カレンティアは己の自我を取り戻すことになる。

【第三章】過去の真相　　（ヴォルフ坊ちゃんの子供を産んだ美母達）

カレンティアはリリトウナに奪われた身体を奪い返した。レーヴェ家のメイドになってから一週間以上が経過していた。

セックスの最中、カレンティアは己が何者であったかを取り戻した。取り憑いていた貌無しの意識の内側に封じる。それまで自分がやられていたように、心の牢獄を構築する。通常では絶対に起こりえないことだった。

女冒険者カレンティアは長い間、滅魔の聖剣を身に帯び、聖なる加護で守られていた。聖剣を失ったが、正当な所有者である限り、恩寵の効果は波及する。

「うっ！ うぐうっ！ はあはあっ……！！ あがつ……ぐう……！！ 痛っ……！！
私は……。やっ……思いつ……出せてきた……！！」

洗脳時の記憶に感情が酔わされる。何度も頬を叩き、カレンティアは正気を保とうとした。

「貌無し女め……！！ よくもやってくれたわね……！！ この私を……！！」
リリトゥナの強烈な愛欲がカレンティアを染めている。闇樹館での日々は幸せに満ちていた。

「信じられない。まさかりリリトゥナを逆に封じ込めるなんて。すごい……。そんなことが人間にできるなんて……。考えもしなかった。さすがは帝都の冒険者

……。大迷宮を攻略した英雄の血を引くだけはある……」

「お褒めいただき光荣だわ。でも、少しは焦ったほうがいいわよ。私は完全に自由を取り戻したのだから……。何を意味しているかは分かるはずよ」

「だったら……まずは僕から離れたほうがいいかも」

「え？ あっ！ ああ!？」

カレンティアは絶句する。だらしなく股を開いて、ヴォルフガングの男根に跨っていた。

（そうだった！ 私……！ セックスしちゃってたんだわ!!）

ここは闇樹館の主寝室だ。暖炉の灯りが全裸で交わる男女を照らす。両手両足

を喪失した青年の男根がオマンコで蠢いていた。

(……私の膣内なかにつ!! やばあつ! こんなつ……!! 私……っ! リリトウナに操られてからずっと……!! 浴室でセックスした後……何日も……毎晩……この部屋で……書斎でも……ヴォルフ坊ちゃん●●●●●●とセックスしちゃった……!!)

結婚を約束した恋人だけに許した領域を侵犯され、白濁色の子種が胎を穢している。憎悪に駆られたカレンティアは拳を振り上げた。

「……………」

ヴォルフガングは無言だ。言い訳もせず、懇願もせず、断罪の裁きが下されることを受け入れた。カレンティアは唇を噛む。四肢欠損の無抵抗者に鉄拳を振り

下ろせない。

無断で膣内射精をしたクロヴィスは、思いっきり蹴りつけた。しかし、ヴォルフガングに制裁は下せなかった。

（私は……何を……。くそ！ 迷うな！ ちくしょうっ！ 黒幕はレーヴェ家……！ 四年前に母さんが失踪したのもヴォルフ坊ちゃんのせい……！ 絆ほだされるな……!!）

反撃は絶対がない。相手は四肢を喪失した身体障害者だ。素手で鬨り殺すことだってできる。

「その貌……。卑怯だわ」

暴力を振るえない。それどころか、口汚く罵声を浴びせることさえ無理だった。闇樹館でメイドになっていた頃の感情がカレンティアの中に残っている。

とても優しい御主人様だった。「ヴォルフ坊ちゃん」に強い親しみを抱いている。そもそもレーヴェ家の若君は何度も警告してくれた。カレンティアはその善意を無視し続けた。その末路が現状なのだ。

「果物用のナイフが戸棚にあるよ。……ごめんね。君の聖剣がどこに隠されているのかは僕も知らないんだ」

「私が殺せると思うの……？ 殴ることだつてできないのに……」

情けなくなつたカレンティアは号泣している。オチンポで貫かれたオマンコは

濡れていたのだ。セックス中毒者の売春婦が肉棒を愛するように離れられない。

「僕に報いを与えてくれるのは君じゃないのか。残念だ」

悲痛な表情のヴォルフガングは嘆息を吐き出す。

「ヴォルフ坊ちゃんは……私に殺されたかったの……？」

「死ぬのは怖いよ。でもね、悪業の報いを受ける刻ときが必ず来る」

カレンティアが殺意の衝動に衝き動かされ、戸棚にしまったナイフを首に突き立てる。レーヴェ家の若君は裁きを望んでいた。

「これが終わったら話を聞かせてもらおうわ。すべてっ……！　ここで起きたことを包み隠さずに……話しなさいっ……！　はあはあ……！　んうっ！　はあっ

……
♥
」

カレンティアは腰を上げて、オチンポを半分だけ引き抜き、再びオマンコに押し挿れた。M字に両脚を折り曲げて、抽挿運動を繰り返す。帝都の仮宿でクロヴィスと愛し合っていたように、己の性欲処理に勤しんだ。

「カレンティア？ なにをやって？ どういうつもり……!？」

唐突な逆レイプが始まり、ヴォルフガングは困惑を深める。身動きが取れない不具者は、騎乗位セックスから逃れられない。勃起した男根は丸呑みにされる。

母のベロニカより、カレンティアのオマンコは窮屈で締めまりが抜群だった。

「今は余計なことを喋らないで……。私の身体が望んでしまうの。ヴォルフ坊

ちゃんのっ……貴方達のせいで……！ 私はこんな淫乱な身体に……！ 早くしてっ！ 私をイかせてっ……！ 満足しないとセックスを止められないのおおお
おっ……！！」

カレンティアは自分の乳首を弄り回す。指の圧迫では刺激が足らず、爆乳を口元に寄せ上げてセルフパイ舐めで責め立てる。

（くるっ！ くるっ！ くるううううー！ 私の身体を使ってあの化け物が感じてた悦楽がっ……！ 亀頭のソリが大きいっ ♥️ 肉厚だわっ……♥️ クロ
ヴィスより小柄なのにつ！ 弱っちい男……！ なのにいっ ♥️ 太さも、長さも、
圧倒的っ ♥️ 凌駕してるっ！ 出会っちやったあ ♥️ 惹かれちやう ♥️ セックス

相性が最高のオチンポおっ……♡ 子宮が降りるっ♡ 吸いつくぅ♡ オマンコの形が生まれ変わるっ……!! クロヴィスうううっ！ ごめんなさいっ！ この一回だけ！ たった一回！ お願いよ！ この一回だけ、私の裏切りを許してえ……！)

オチンポを根本まで抱擁し、オマンコの肉壁で抱き締める。自分の唾液で濡れた乳首を解き放ち、ヴォルフガングの唇に近づけ、押し当てた。

「あん♡ んっ♡ おっぱいをしゃぶって……!! 啜えてえ♡ 乳首を吸ってええっ……♡」

お気に入りの性感帯を無理やり甘噛みさせた。処女を捧げた唯一の恋人にだけ

教えていた秘密を曝け出し、くびれた腰をヒクつかせる。膣内で肉棒が脈動する。練り上げられた濃厚な精液が尿道を駆け上がり、カレンティアの子宮を撃ち墮と
した。

(やばあい。これ。気持ちよすぎる。子宮が恋しちゃう♥)

一夜の過ち。背徳の棘が心に穴を穿^うった。

カレンティアの膣道が蠕動する。姦淫の罪科に苦悶しながらも、溜まりに溜まった性欲を全解放し、究極至悦の浮気セックスで酔い痴れた。



「レーヴェ家の莊園で収穫されるリンゴは、接木で栽培されている。リンゴの穂木ほぎに台木だいぎに挿して育てるんだ。……穂木は頭で、身体が台木。別々の植物を上手く継ぎ合わせれば、立派な果実が膨らむ」

ベッドの枕に背を預けたヴォルフガングは、黄金リンゴの栽培方法を明かしてくれた。

「それがレーヴェ家の莊園が成功してる秘訣なの？」

寝間着のネグリジェに着替えたカレンティアは、窓辺の椅子に腰掛けています。

子宮では精液が満ち溢れあふ、たぶんたぶんと揺らめいていた。淫熱の残り火が腔

内を焦がし、下腹部の火照りはしばらく冷えそうにない。

「いいや。リンゴ栽培で接木はごく一般的だ。というより、そうやって育てるのが普通だ。リンゴの種を地面に植えれば芽は出てくる。でも、その苗で実ったり
ンゴは味が変わる。母親の形質が完璧な形で子供に遺伝されないせいだ。交配すれば必ず、父親の形質も混ざる。世代を重ねるごとに、祖先とはかけ離れた形質になっていく」

「だから、接木するわけ？ 優れた形質を維持するために」

「接木で増やせば完璧な複製だ。大本になったオリジナルの穂木ほぎが子供を産み続ける。身体を乗り換えながら……。隣町の人達が穂木を欲しがっている。狙いは

僕らが守っている原生樹だ。それさえあれば、彼らもレーヴェ家のリンゴを栽培できる」

「なるほど……。レーヴェ家だけが原生樹の場所を知っているのね」

「ご明察の通りだ。どこにあるかも想像はついているじゃないかな」

「黒森のどこかにリンゴの原生樹がある」

「そうだ。さすがだね」

レーヴェ家の許しがなければ黒森に足を踏み入れてはならない。

無断で侵入した人間は殺される。それは黒森に隠された神聖な原生樹を守るための掟だった。

「カレンティアは行商人や隣町の人から、もう一つの噂を聞いているかな？」

ヴォルフガングは後ろめたそうな顔で問いかける。眉を顰ひそめたカレンティアは重々しく頷く。レーヴェ家の莊園に連れてきてもらった行商人から聞かされていた。

「ええ、耳にしたわ。レーヴェ家は人間の死体を肥料にしてるって……。まさかとは思ったわ。そんな悪評……。信じられなかった。けれど、今ならどんな話でも……。信憑性があるわ。……。事実なのかしら？」

「それこそがレーヴェ家の大きな秘密だった。原生樹の根本に頭部を埋めるんだ。人間の頭を……。苗床にしている……。だから、その悪評は真実だ」

「まさか……母さんの首を刎ねて……！」

カレンティアは思い出す。浴室の湯舟でヴォルフガングと交わっていた母親の姿。肉体は母親で間違いなかったが、黒髪の頭部は別人だった。

「レーヴェ家は何百年もの間、原生樹に人間の頭を捧げてきた。でも、勘違いしないでほしい。僕らが供物にするのは亡くなった人間の首だ。生贄はしていない。病気や老衰、事故で亡くなった村人の首を切断して、頭部を吊っているんだ。

……生前の意思も確認するし、遺族が拒否すれば首は刎ねないよ」

「これまで一度もなかったと断言できる？」

「自分の意思で捧げた供物じゃないと受け取ってくれない。四年目に殺された司

祭の遺体は、五体満足で隣町に送り届けた。原生樹の根本に埋めている首は、レーヴェ家と荘園で暮らす民だけだ。信じてほしい」

「分かったわ。ヴォルフ坊ちゃんが嘘を言っているとは思わない。でも、それなら母さんの首はどこにあるの？ リリトウナは母さんの肉体を操っていたわ。私に取り憑いたとき、母さんの身体から頭部が消えた」

「カレンティアは首の在処ありかを知ったらどうする気？」

「それは……もちろん母さんの身体に戻すわ。戻せるのよね？ 不思議な話だけど……頭部を失っても生きているんでしょ？」

「その通りだ。ベロニカは生きている。だから首を取り戻せば、元通りになるよ。」

でも、僕の口からは言えない。……首の在処ありかはベロニカが知っている」

「どうしてかしら？　今、ここで、なぜ教えてくれないの？　理由は？」

「それを言ったら、首の在処ありかが分かってしまう」

「……………」

話さないと言ったら、絶対に教えてくれない。報いを受けるため、殺されてもかまわないといった青年の覚悟だ。カレンティアがどんな手段を使っても、ヴォルフガングの口は割れないだろう。

「その代わりに五年前の話を教えるよ。父上と母上、本邸で働いていた使用人達
が殺された夜……。僕だけが助かった。ダミエーラとリリトゥナが助けてくれた」

「ヴォルフ坊ちゃんは今古井戸に逃げ込んだのでしょ。もう聞いたわよ。襲撃者と火の手から逃れたけど、井戸水に浸かった身体は凍傷を負った。それで両手両足を失った」

「カレンティアに言わなかったことがある」

ヴォルフガングは右腕を見せた。

他の手足に比べれば長めに残っている。肘先でちょん切れた右腕の断面は綺麗だった。傷跡は真相を物語っている。凍傷による壊死であれば、皮膚に変色や痣があるはずだ。

「本邸の中庭には古い井戸があった。——でも、僕が生まれる前からずっと枯れ●●

井戸だったんだ」



五年前のレーヴェ家は女家庭教師ガヴァアネスを雇っていた。子息のヴォルフガングに読み書きと教養、そして剣術や馬術を教え込むためだ。

教育熱心な奥方のお眼鏡にかなった人物こそ、ダミエーラであった。

由緒正しい帝都の伯爵家に仕えた武家の生まれ。女でありながら騎士の称号を持ち、高等教育を受けた淑女である。ダミエーラはその年で三十五歳。十三歳の

ヴォルフガングとは適度に年齢が離れており、男女の過ちも起こりえない。

莊園経営で経済的余裕があつたレーヴェ家は、大切な跡取り息子の教育に大金をかけていた。

ダミエーラとしても悪くない仕事だつた。

父親や兄達は依然として伯爵家で召し抱えられていたが、女のダミエーラはお払い箱になっていた。それにも理由がある。ダミエーラの主人となるべきご令嬢ベロニカが出奔してしまつたからだ。しかも、間接的にはあつたが、ダミエーラは家出の手助けをしてしまつた。

その当時、ダミエーラは十歳の少女。姉のように慕っていたベロニカの恋路を

応援するのは当然だった。しかし、子供は無知である。その後になんかどうなるかをちつとも予想していなかった。

主人が消えれば、従者の仕事はなくなる。

そもそも雇用主は伯爵家だ。大切なご令嬢の家出を手助けした小娘は信用できない。失態の責任が父親や兄達に及ばなかったのは伯爵家の慈悲である。

大人になったダミエーラは騎士の称号を得たものの、伯爵家での居場所はなくなっていた。物事の分別が付き始めた年頃である。伯爵家を逆恨みはしなかった。

また、ダミエーラの境遇に責任を感じていたベロニカの誘いで、何度か冒険者の仕事をしたものの、ダミエーラは粗野な世界に順応できる人間でしななかった。

ベロニカの爆乳を^{からか}揶揄った酔っぱらいが許せず、半殺しにしてしまった。伯爵令嬢を平民が侮蔑したのだから、その場で斬り伏せるのが当たり前だ。主人の名誉を守れぬ騎士などあつてはならない。しかし、ダミエーラの過剰な暴力行為は許容されなかった。

貴族籍は残っているが、家出したベロニカは一介の冒険者だ。

ダミエーラは殺人未遂の罪で捕まり、情けないことに伯爵家の力で無罪放免となった。友人を助けるためにベロニカが裏で動いていたのだ。各方面に大迷惑をかけたダミエーラはベロニカに謝罪し、冒険業からも退いた。

父親や兄達から結婚して身を固めることを勧められたが、好きでもない男に身

を捧げる気にもなれなかった。

しばらくしてダミエーラは中流貴族や裕福な商家の娘達を教育する女家庭教師ガヴァネスの仕事に就いた。教師の適性は自身が思っていた以上に高く、いくつかの家で働いて実績を得た。

レーヴェ家に雇われた経緯は、教育を施していた豪商の娘が無事に成人となり、次の奉公先を探していたところ、「帝国北方の裕福な准男爵家に跡継ぎが生まれた。教育熱心な奥方は優秀な女家庭教師ガヴァネスを所望している。騎士の称号を持つダミエーラに興味があるようだ。一度、会ってくれないだろうか」と頼まれた。

その豪商が経営する商業組合は、レーヴェ家のリングを扱う取引相手だったの

だ。

辺境の田舎貴族。しかも、正式な爵位をもたない准男爵家。そのうえ商人や隣町では不穏な噂も耳にした。異教徒の土地柄だという特殊事情も直前で聞かされた。北方の僻地に向かう道中は、豪商に売り飛ばされた家畜の気分だった。しかし、レーヴェ家の奥方から話を聞いて、豪商が抱えていた事情も察した。

教育熱心な奥方は大切な一人息子を立派に育てるため、「女家庭教師を紹介しないのなら、当家の取引先を競合の商会に乗り換えますわ」と脅迫していた。困った母親ではあったが、当主の夫とは良好な夫婦仲。使用人達からも慕われており、身内認定した人間には優しい女性だった。

一人息子のヴォルフも奇妙なところはあったが、素直で礼儀正しい少年だ。わざわざ女家庭教師ガヴァネスを付けずとも、母親や使用人達からの教育で、十分なのではないかと思うほど聡明だった。

レーヴェ家の莊園に向かう道すがら「どうやって断れば、後腐れがないだろうか」と考えていた。しかし、当人達から事情を聞き、レーヴェ家の本邸に逗留して莊園の暮らしぶりを観察しているうちに考えが変わった。「隣町で聞いた悪い噂には真実がない。流言飛語のデマでは……？」と思い至った。

ダミエーラは依頼を承諾し、レーヴェ家のお坊ちゃんを教育する女家庭教師ガヴァネスになった。一年目、二年目、三年目と歳月を重ねて、莊園の人々とも仲良くなった。

——たしかに異教の土地ではあった。

レーヴェ家の葬儀では死者の首を斬る奇習があった。切り取られた頭部は、黒森の首塚にレーヴェ家の当主が埋葬していると聞かされていた。それを隣町の司祭は邪悪な儀式と非難した。だが、異文化に寛容なダミエーラはこの地に暮らす穏やかな人々が邪教徒とは思えなかった。

この地で三年も暮らせれば隣町の悪業に詳しくなる。ダミエーラは自警団に参加し、莊園に侵入した不届き者を捕まえたこともあった。

帝国辺境の寒村でありながら、レーヴェ家はとても裕福だった。富を独り占めせず、莊園の人々にも平等に分け与えた。二〇〇人程度が住む莊園であるが、隣町よりも経済規模は大きい。商人達も異教徒を不気味に思っているが、莫大な利益に繋がるレーヴェ家の莊園に尻尾を振っている。

極貧に苦しむ隣町の人々は、裕福な莊園が妬ましいのだ。

「ヴォルフ坊ちゃん。中庭におられたのですね。探しましたよ」

ダミエーラは上着をもって駆け寄る。もうすぐ厳しい冬が到来する。先週から雪が降り始め、レーヴェ家の莊園では越冬の準備が進められていた。

ヴォルフガングはダミエーラに気付いていない。中庭の枯れ井戸を覗き込むの

に夢中だ。

(あんなに身を乗り出して……。落ちてしまわないか心配ですわ)

深さは五メートルほどの浅井戸。昔はもう少し深かったが、枝や葉っぱが積み重なって今の深さになった。底は腐葉土で柔らかいが、頭から落下すれば死ぬかもしれない。

「ヴォルフ坊ちゃん。また黒森の精霊様とお話ですか？」

ダミエーラの肩を掴んだ。驚かせて落ちないように気を付ける。

「あっ！ ダミエーラ！ お帰りなさい。早かったんだね。武器の買い付けに行つてたんじゃなかったの？」

ヴォルフガングは寒風で悴かじかんだ指先を丸めて、脇の下で温める。井戸の底に語りかけるのに夢中で寒さを忘れていたようだ。

「自警団の指南役としては剣や槍、クロスボウを買いたかったのですが……」
「ですが？」

「ヴォルフ坊ちゃんのお父君が難色を示されました。武器の購入は見送りです。奥方や村長の説得にも応じずです……。当主様は意固地なところがございますね。来春に隣町の有力者と話し合う前に、武器を新調したくないようですね。お立場は分かりますが……」

「ああ、そうなんだ。なるほど。それでリリトウナ●●●●の機嫌が悪かったんだ。隣町

の司祭さんが莊園の近くにいろんじやないの？ 沢山の用心棒も連れてくる。僕らが武器を買ったら隣町を襲うかもしれぬ。それで監視に来たんでしょ」

本邸の屋敷にいたヴォルフガングは知らないはずだ。しかし、まるで現場を見ていたかのように言い当てた。

「ええ。その通りですわ。私達が招いた武器商人に引っ付いてきて、司祭様のくせに柄の悪い傭兵を雇ってましたね。……おかしな奴らですわ。レーヴェ家が隣町を襲うだなんて……。お金持ちが貧乏人の家に押し入るはずがないでしょう」

「ダミエーラもすっかり染まってしまったね。嬉しいような、悲しいような……」

「私は卑怯者が嫌いなだけですわ。隣町の人間が全員、大悪党とは言いません。」

しかし、町の有力者や司祭様は金の亡者です。レーヴェ家の土地を狙っているとしか思えない。教会の修道院を誘致するために、土地を喜捨しろと言ってきているそうです。十分の一税を払えという要求も……」

「税？　税金って領主や国王の皇帝陛下にお支払いするものじゃないの？　税金は商会の徴税請負人に払ってるよ」

レーヴェ家は国府への巨額納税で准男爵家の家格を得た一族だ。税金はきっちり払っている。

『十分の一税』教会の悪しき慣習です。もちろん、自発的に収穫高の一割を納めて、教会の司祭様が教育を施す。もちろん、そういう村もありますわ。それで上

手くいっているなら、誰にとっても幸せでしょう。文句は付けませんわ。しかし、レーヴェ家に教会の庇護は不要です」

「今の状態で不自由はしてないしね」

「……もっと生活が良くなるはずです。最近、リンゴを使った酒造で収益が見込めるようになりました」

「僕は子供だから飲めないけど、美味しいリンゴ酒ができるようになったんだよね。リリトウナが褒めてたよ」

「黒森の精霊様がお墨付きくださる味ですわ。きつと評判になるでしょう。……しかし、隣町の主要産業である酒造を上回る品質になってしまった。ますます妬

みが激しくなりますわ」

「……お酒造りを始めた発端は、隣町の蔵人くらびとさんが逃げてきてからだもん。揉めるとは思った」

「酒造りの名人を扱き使って報いですわ。鞭を打って冷遇すれば逃げられる。当然ですわ。職人を家畜とでも思っていたんでしょか……」

レーヴェ家で酒造りの中核を担っている職人は、隣町で酒造りに携わっていた蔵人くらびとだった。劣悪な労働環境に置かれ、背中には鞭打ちの痛々しい傷があった。奴隷として酷使され、生き地獄を味わった。早く死にたいと願って、蔵人くらびとは黒森に逃げ込んだのだ。

黒森への侵入は禁忌だ。しかし、黒森の主リリトウナには慈悲の心がある。レーヴェ家への微塵も悪意がなく、黒森を侮蔑する意図もない。「早く殺してくれ」と懇願する瘦せこけた蔵人の男を哀れんだ。

「二年前に助けたとき、酷い状態の傷が背中にあつた。今は元気になってくれて良かったよ」

二年前に蔵人を助けた命の恩人は、ヴォルフ GANG だった。中庭の井戸を介して、ヴォルフ GANG は黒森の主と会話ができる。

リリトウナは「森で騒いでいる自殺志願者の奴隷が不憫でならない。殺してやってもいいけれど、助けてやればレーヴェ家に忠義を尽くすかもしれませぬ」とヴォ

ルフガングに伝えた。

レーヴェ家は莊園の自警団に命じて、黒森をさまよっていた蔵人を救出した。その救助にはヴォルフガングが同行し、ダミエーラが護衛についた。

助けられた蔵人は怪我が治るとレーヴェ家の莊園で働き始めた。今では酒造を取り仕切る最高責任者となり、蔵元と呼ばれている。

「……レーヴェ家はそれなりの自衛戦力を持ったほうがいい。当主様には何度も進言しているのですけれどね。黒森の精霊様をお願いできませんか？」

「うーん。父上は僕と違って声が聞こえないから……。リリトウナはダミエーラに大賛成だろうけど……」

「精霊様の声を聞ける御方は、レーヴェ家で稀にしか生まれられないそうですね」

「らしいね。僕の前だと曾祖父……。僕と違ってちよつとの時間しか話せなかつたらしいよ。僕はレーヴェ家の初代以来だって。リリトゥナが褒めてくれた」

教会の教えに染まった隣町だったら、子供の妄想と切り捨てるだろう。だが、ヴォルフガングの力は本物だ。黒森を支配する主リリトゥナと会話し、予言のよきな真似ができる。

本来、黒森に入る許可はレーヴェ家の当主が与えるものだ。次期当主であっても無断では入れない。しかし、ヴォルフガングは例外的に自由な出入りが認められた。それほどまでに黒森の主がヴォルフガングを好いている。

(だから、ご両親が心配されているのでしようけど……)

ダミエーラは当主夫妻から厳命を受けていた。

ヴォルフガングが黒森に入るときは必ず同行し、絶対に目を離してはならない。両親も最初はヴォルフガングが特別な子供だと誇らしく思った。黒森の主はさまざまな恩恵を与えてくれた。屋敷の使用人や荘園の村人達も、ヴォルフガングを敬愛するようになった。まさに黒森の寵児であった。

ある日、枯れ井戸から伸びた透明な手がヴォルフガングの首元を撫でていた。年老いた使用人が目撃し、駆け付けた当主夫妻もその光景を見たという。

リリトウナは戯れついていただけ。父上や母上にも見えただ。この時期は力

が強まるらしいよ。だから、僕じゃなくても見えたんだね。父上和母上も握手したら？

ヴォルフガングは笑いながらそう語った。しかし、周囲の者達は素直に喜べなかった。黒森の主はヴォルフガングを枯れ井戸に誘い込もうとしているようだった。それから、しばらく経ったある夜、当主夫妻は夢を見た。

夢の中に黒森の主が現れた。

レーヴェ家に残された言い伝え通り、黒髪の女神だった。鏡面の無貌を直視してはならない。当主夫妻は夢の中で目蓋をすぐに閉じた。

リリトウナはレーヴェ家の人間なら見ても大丈夫と語った。だが、当主夫妻は

けして目蓋を開かなかった。リリトウナは当主夫妻に懇願した。ヴォルフガングともっと触れ合いたい。梯子を作って、枯れ井戸の底にヴォルフガングを降ろしてほしいと頼んできた。

とても嫌な予感がして、当主夫妻は丁重に断った。

黒森の主は泣き継る口調で何度も頼み込んだ。恋する女の情欲が漏れていた。幼児だったヴォルフガングが声変わりし、男らしくなってきた頃の出来事だ。

ガヴァネス女家庭教師のダミエーラを雇うときも、黒森の主は強く反対していたという。読み書きや教養なら自分が教えていると言い張った。今でこそダミエーラの忠勤を認めているが、最初の一年目は何とか追い出せないかと粗探しをしていたと

ヴォルフガングから聞かされた。

「ヴォルフ坊ちゃん。井戸の底に降りてはいけませんよ」

「分かってる。でも、リリトウナは僕に悪さをしないよ。小さい頃から井戸で会話したり、夢の中で仲良く遊んでるんだ。皆は心配し過ぎ」

「危害を加えるとは思っていません。しかし、ヴォルフ坊ちゃんは黒森の精霊様に好かれ過ぎています。帰してもらえないかもしれない。当主様と奥方様はそれを恐れています。……私ですわ」

「考えすぎだと思うけど……。じゃあ、ダミエーラも一緒に降りてみる？ 井戸の底なら声が聞こえるかもよ？」

「どうでしょうね。精霊様の声に興味はありますが、私はレーヴェ家の血族ではありません。たぶん、聞こえないと思いますよ。夢の中にだって一度も出てくれないのですから」

「それはダミエーラが教会の聖徒だからだよ。夢の中に入れてないんだ。ちゃんとした信仰心があるからね」

「ここでは私が異教徒ですし……。嫌われているのかもしれないわね」

「そうでもないよ。ダミエーラは剣術や馬術を教えるのが上手だって褒めてた。
紫紺の髪も羨ましがってたよ。もっと若かったら嫉妬してたって」

「あら。そうでしたの。今でも若いつもりなのですけれどね」

「リリトゥナはね。隣町の司祭とかが嫌いなだけで、他の宗教はどうでもいいと思ってるみたい。黒森の外に興味が無いんだ。地元最高だってさ」

「ふふ……。郷土愛がある精霊様ですね。人間味があって親近感が湧きますわ」
「ああ、そうそう。ダミエーラに確認しなきゃいけなかった。伯爵令嬢のお友達を招くって本当？ リリトゥナが気にしてたよ」

「あれは奥方の早合点ですわ。私の旧友にベロニカ様という伯爵家の令嬢だったかたいらっしゃいますが、幼少期に家出をされて冒険者になってしまいました」
「伯爵家のお嬢様が冒険者に？ すごいね」

「お招きすれば面白い冒険譚を沢山聞けたかもしれません。しかし、今はヒース

ウッド修道院にご隠居なさってます」

「ご隠居？　なんだか……お爺さんやお婆さんみたいだ。僕の祖父も生きてた頃は旧館に隠居してたけど……。八十歳とかだったよ。そのお嬢様は何歳？」

「ベロニカ様は私より年上ですわ。今年で四十ですわね。いえ、私の三つ上だから……三十九歳かしら？」

「大人な女性だね」

「はい。奥方様の勘違いを正すのに苦労いたしましたわ。ベロニカ様を坊ちゃんと同じ年と勘違いして……ふふっ……」

「どうしたの？　ダミエーラ？　急に笑って」

ヴォルフガングは首を傾げている。ダミエーラが笑ってしまったのは、伯爵令嬢ベロニカとヴォルフガングの見合いを奥方が目論んでいたからだ。

奥方は伯爵令嬢ベロニカをダミエーラが教育を受け持った少女と勘違いしたのだ。その後、ダミエーラより年上の未亡人だと判明し、水面下で進んでいたお見合いの計画は水泡に帰した。

「いいえ。ところで話は変わりますが、ヴォルフ坊ちゃんはどんな女性と結婚されたいですか？」

「ダミエーラみたいな淑女レディかな」

「あら。嬉しいですわ。ヴォルフ坊ちゃんは口説き上手ですわね」

「ダミエーラは結婚しないの？」

「しないのではなく、できないのですよ。行き遅れてしまいましたわ。ヴォルフ坊ちゃんのような奇妙な貰い手は、そうそうおりませんもの」

「じゃあ、僕も見込みありなわけだ。あはは」

「ヴォルフ坊ちゃん。年上の女性を乗せるのは程々になさってくださいね。お世辞を本気で受け取る女性もいるのですよ」

ダミエーラは想像すらしていなかった。

こんな冗談を交わしている自分が十三歳のヴォルフガングに高齢処女を捧げ、レーヴェ家の娘を産む日が来る。それは年内に起こる出来事だ。さらには一年後、

ヴォルフガングは話題に上がった未亡人ベロニカとも結ばれ、子宝に恵まれる。

枯れ井戸の底に蠢く闇は、石壁を這って這い上がる。幽体の身では現世に顕現できない。幼児の頃から見守ってきたヴォルフガングが、ダミエーラと楽しげに話している。

嫉妬で心が燃える。だが、ダミエーラに醜い憎悪は向けない。羨ましいだけだ。レーヴェ家の女家庭教師ガヴァネスはよく働いている。奥方の厳しい鑑識眼は正しい。優秀な人材を引っ張ってくれた。

ダミエーラのおかげで莊園を守る自警団は強くなった。ヴォルフガングの劍術と馬術は上達した。あと数年もすれば何処に出しても恥ずかしくない立派な青年

になる。

（ああ……。可愛いヴォルフ坊ちゃん。食べてしまいたいくらい愛おしい。年上の女でもいいなら、私だって……）

もう一度、当主夫妻に夢の中でお願いしようと考えた。不遜な願いなのは分かっている。しかし、レーヴェ家の人間でも、リリトウナとここまで交流できる人間は稀有だ。

（レーヴェ家の初代当主様を思い出すわ。私の大親友……。あの時は私が男だったらと願った。結局、そのせいで彼女との関係は主従と友情で終わった。でも、今は私が女神でよかったと思ってる。……ヴォルフ坊ちゃん……。どうすれば私

を見てくれるだろう……？ 井戸の底に降りてきてほしい)

黒森の主は枯れ井戸の底に帰った。



レーヴェ家の本邸を襲撃した野盗は十四人。

隣町の司祭が雇った傭兵崩れの破落戸ごろっきであった。莊園の自警団が買おうとしていた武器を商人から強奪し、使用人達が寝静まった深夜に侵入した。

悪党達の目的は火事に見せかけて、レーヴェ家の人間を皆殺しにすることで

あった。

さらにもう一つ、黒森のどこかに隠された原生樹を探し出し、莊園のリンゴ栽培を盗み奪うことだ。

レーヴェ家の当主は融和政策に偏重し過ぎた。

隣町の動向に警戒心を抱いていた奥方やダミエーラも見込みが甘かった。いくら険悪な仲とはいえ、暴虐に手を染めるとは考えが及ばなかった。黒森の統べる主、女神リリトウナキススキルですら人間の悪意を見誤った。

炎上する屋敷でダミエーラは、ヴォルフガングを連れて逃げ回っていた。握った剣からは鮮血が滴り流れる。当主夫妻を殺した襲撃者を三人殺し、ヴォルフガ

ングを救出したが、多勢に無勢であった。逃げ道を探す間にも四人倒したが、ダミエーラも深手を負ってしまった。

時間を稼げば異変に気付いた荘園の自警団が駆け付ける。だが、その前に屋敷を覆いつくす大火で焼き殺されてしまう。

「くっ……！……！……！……！……！……！」

天井が焼け落ちて崩落している。瓦礫の下には見知った使用人の死体があった。消火を試みたのであろう。近くにバケツが転がっていた。

犠牲の身体にはクロスボウの鉄製矢ボルトが突き刺さっている。ダミエーラが商人に頼んでいた武器だ。本来ならば自警団の手に渡るはずだった武装をならず者達が

使用している。

（やられたわ……。この襲撃を仕組んだ奴らは、莊園の自警団に罪を擦り付ける気なのだわ。当主様に諭されて私達は武器を買わなかった。でも、外の人間はそれを知らない……）

莊園で働く村人達の反乱を偽装し、濡れ衣で何もかも奪い取るつもりなのだ。

「ダミエーラ……。手当をしたほうが……」

ヴォルフガングはダミエーラを心配する。脇腹に深々と鉄製矢が貫通し、血が流れ出ていた。

「私は大丈夫です。むしろ鉄製矢を抜くと出血が酷くなりますわ」

ダミエーラは自分の生存を諦めていた。当主夫妻は助けられず、何とかヴォルフ GANG だけは救い出せた。しかし、火事のせいで逃げ場がない。

（黒森にヴォルフ坊ちゃんを逃がせば私達の勝ち……。精霊様がきつと守ってくれる。だけど……。逃げ道に油が……。司祭め……。このクソ野郎……。！　これじゃ屋敷にいる人間は誰一人助からない！　襲撃者ごと全員を葬りさる気だわ……！）

殺された当主は原生樹の場所を言わなかった。ヴォルフ GANG だけが黒森の奥地に隠された原生樹の場所を知っている。殺すわけにはいかないはずだった。

（隣町の司祭は異教を嫌っているわ。町の有力者は原生樹を手に入れたがって

るけれど、司祭にとっては関係ないのかもしれない)

火災から離れるため、ダミエーラは中庭に向かった。その判断が正しいかは分からない。深夜に押し入ってきた襲撃者は、使用人を殺し尽くしている。ダミエーラとヴォルフガングの味方は屋敷内にいない。

おそらく襲撃者達も逃げ場のなくなった屋敷に閉じ込められている。全てを仕組んだ司祭は、安全な場所で高みの見物をしているのだろう。

(敵の生き残りが二人以下なら……。何とかなるかもしれないわ。まだ気絶するな……。この程度の傷で……)

ふらついたダミエーラは片膝をつく。剣技での勝負なら傭兵崩れを相手に傷を

負ったりはしなかった。しかし、飛び道具は凌げない。ヴォルフガングを守りながら戦うとなれば、なおさらだった。

(武器商にクロスボウなんか発注しなければよかった……。自分の首を絞めることに……。なるなんて……。！)

ダミエーラは血反吐で咽^{むせ}る。肺に空いた穴のせいで呼吸が苦しい。握りしめていた剣が廊下に転がった。

「ダミエーラ……。もう僕らは……。ここで休もう。僕も一緒にいるから」

苦しむ姿を見ていられず、ヴォルフガングはダミエーラを抱きしめた。心地よい温もりで意識が遠のいた。このまま炎に飲まれて、死ぬのも悪くない終わりな

のかもしれない。ダミエーラはそう思ってしまった。

「本当に僕はダミエーラが好きだったんだよ。笑わないでね。父上に本気で相談したんだから……。母上だって今なら怒らないと思う。ダミエーラは最期まで僕のために戦ってくれたんだから」

「ヴォルフ坊ちゃん……」

死にかけのダミエーラは戸惑った。ヴォルフガングは冗談めかして、しきりに結婚相手や恋人の存在を探っていた。まさか本気だとは今まで気付かなかった。

（こうなると知っていれば、ヴォルフ坊ちゃんに処女を捧げておけばよかったわ。どうせ私の相手なんてこの先見つからないし……。身分差や年齢差も……。ベロニ

カ様だったら気にしていなかったでしょうね……。私はいつだって、自分の本心を誤魔化して……。気付いた時には手遅れ……)

ここで諦めて愛する少年と心中する。それも悪くない。だが、ダミエーラは剣を拾い上げて立ち上がった。

「私もヴォルフ坊ちゃんを愛しておりますわ。だから、ここで死なせはいたしません。私よりも相応しい女性と結婚なさってください。中庭に行きましょう」

「ダミエーラ……。君を苦しませたくない。だったら、ここで……」

「……私にも声が聞こえましたわ。教会のクソ司祭を呪ったからかしら？ 精霊様が呼んでいますわ。井戸です。井戸に向かえば……。ヴォルフ坊ちゃんは助かり

ますわ」

「リリトウナが……？」

「ヴォルフ坊ちゃんとは特別な御方です。森の愛し子……。さあ、参りましょう。はあ……はあ……。うがつ……。うつ……。この身を捧げてお守りいたしますわ」

幻聴ではない。ダミエーラは精霊の声を聞いた。

（中庭に逃げ込んだ襲撃者は七人……。でも、やるしかないわ。井戸にさえ……。あの古井戸にさえ……。辿り着けば……）

屋敷に侵入した破落戸ごろつきで生き残っているのは七人。

その全員が中庭に逃げていた。火の勢いが激しく、脱出できていない。馬鹿な

傭兵崩れ達は口封じで、司祭に始末されようとしている事実を把握できていなかった。

枯れ井戸の底から出られないリリトゥナは、ダミエーラに思念を送り続ける。黒森の領域であれば侵入者を呪い殺せたが、レーヴェエ家の本邸は人間の縄張りだ。死に瀕しているダミエーラが最期の力を振り絞り、ヴォルフガングを送り届けてくれることを祈った。

——ヴォルフガングを守り抜いてくれるのなら、自分の力が及ぶ範囲でどんな欲望でも叶える。ダミエーラの願いを成就させる。

黒森の主は約束してくれた。そんな報酬がなくともダミエーラはヴォルフガングを守るつもりだ。だが、もしも願いを叶えてくれるのなら、迷わずに「レーヴェ家の繁栄」と答える。

（たった一人の生き残り。可愛い坊ちゃんの幸福。ヴォルフガング・ゴットフリート・レーヴェ卿に永久の繁栄を与えてほしい）

中庭に辿り着いたダミエーラは剣を掲げる。敵は七人。剣と槍、クロスボウを構えていた。愚かしくも逃げ道はどこだと喚いている。炎上する屋敷に取り残された者達は焼死する運命にあるのだ。

——黒森に愛された一人の少年を除いて。



古井戸に血塗れのヴォルフ GANG が落下する。手足の骨が折れないようにリリトウナは優しく抱きしめた。

「ヴォルフ坊ちゃん……！」

不届き者がヴォルフ GANG の死体を井戸に投げ込んだ。最初はそう思い違いを

してしまった。だが、付着した血は全てダミエーラのものであった。かすり傷しか負っていない。

「ああ……！ 良かった……！ 本当に良かったわ」

リリトウナは心の底から感謝した。女家庭教師ガザアネスのダミエーラは真なる騎士だった。約束通りにヴォルフガングを井戸底に連れてきてくれた。

「リリトウナ……？」

ヴォルフガングは無貌の美女に抱かれていた。

漆黒が渦巻く異形の女神。その鏡顔きょうめんを直視してはならないとされている。だが、ヴォルフガングは涙目で訴えかけた。

「リリトウナ……っ！ リリトウナ……!!」

「大丈夫ですわ。ここなら安全。ヴォルフ坊ちゃんは今私がお守りいたしますから……」

「違う。そうじゃない。ダミエーラを助けて……お願い……！」

リリトウナもそうしてやりたい気持ちだった。しかし、井戸の底でしか力は使えない。どうにかしてダミエーラを引っ張り込めないかと必死に考える。その時だった。

ダミエーラの身体が井戸に転がり落ちてきた。服は鮮血で真っ赤に染まっていた。身を挺してヴォルフガングの盾となり、太腿には槍先が突き刺さり、胸部に

は剣の切り傷やクロスボウの鉄製矢ポルトが何本も食い込んでいる。

「助けて……！　ダミエーラを助けてあげて……!!」

ヴォルフガングは黒森の主に命じる。太古の契約により、その願いは聞き入れなければならない。だが、ダミエーラを助けるためには大きな対価が必要だった。

「ダミエーラは首を刎はねられても戦ったのですね。無惨な姿になってまで坊ちゃんを守って……。なんと……。献身……。私も助けてあげたいですわ」

ダミエーラの頭部は、首の皮一枚で繋がっていた。落下の衝撃で千切れて、首無し死体になった。信じられないことに、ダミエーラは首を刎ねられた後も動き続け、ヴォルフガングを守り抜いた。

息絶えた死体だというのに、まだ剣を離そうとしていない。

「ヴォルフ坊ちゃん。ダミエーラを救う方法が一つだけありますわ」

「教えて！ どうすればいいの？」

「私がダミエーラに憑依し、命を吹き込みます。頭部を失っても私なら死にはしません。しかし、ダミエーラの魂と私は癒着し、融合してしまうでしょう。一心同体となってしまう。ダミエーラが私を受け入れてくれれば成功します」

「お願い。助けてあげて……」

「ヴォルフ坊ちゃん。神霊が現世で受肉するためには、生贄が必要です。とても申し上げにくいのですが、ヴォルフ坊ちゃんのお体を……」

「いいよ。リリトウナは人間の身体を食べるんでしょ。全部、あげる。僕の身体を全て食べていいから……!!」

「既にご存知だったのですね。しかし、私はヴォルフ坊ちゃんを食べ尽くしたりはしませんわ。私の望みに反します。ダミエーラの願いにも……亡くなったレーヴェ家の犠牲者にも顔向けできません。……だから、手足をいただきます」

「分かった。いいよ」

「本当によろしいのですか？ おそらく……。いいえ、間違いなくダミエーラは望んでおりませんわ」

「僕が望んでる。早く食べて……。ダミエーラを蘇らせてほしい」

異形の女神にヴォルフガングは手足を差し出しだ。食べてしまいたい可愛い男の子。リリトウナはずっと願っていた。しかし、こんな形で自分の欲望が果たされるのは不本意だった。

「——優しく食べてあげますわ」

無貌の暗闇にヴォルフガングの手足が咀嚼される。黒森に捧げられる生贄は、自分の意思で我が身を女神に与える。そうでなければリリトウナの血肉にならない。

手足を失う激痛でヴォルフガングは気絶する。だが、己の行為に後悔はなかった。たとえ全身を食われたとしてもダミエーラに生き返ってほしかった。

地上で悲鳴が聞こえる。火災旋風が襲撃犯の生き残りを炙り殺していた。黒森から吹き込んだ強風が竜巻を作り上げ、地獄の業火で破落戸ごろっきどもを焼死させた。

「ヴォルフ坊ちゃん……」

手足を失ったヴォルフガングは、自分を抱き締めた女性がどちらなのか分からなかった。暗闇の泥で満ちていた枯れ井戸は、何ら変哲のない腐葉土に戻っていた。枯葉と枝が積もっている。

「……ダミエーラ？ それとも……リリトウナ……？」

頭部は繋がっている。ダミエーラの貌がある。紫紺の髪が垂れさがっていた。声が重なっていて、よく分らない。

「両方ですわ。これからは私達がヴォルフ坊ちゃんの手足となってお世話をいたします。ヴォルフガング・ゴットフリート・レーヴェ卿に永久の繁栄を……。レーヴェ家の初代当主と結ばれた契約は、新たな契りで上書きされましたわ」

地上ではレーヴェ家の屋敷が燃え盛る。

井戸の底で四肢を失ったヴォルフガングは新たな契約を結ぶ。リリトゥナとダミエーラを抱き、男女の契りで繋がった。レーヴェ家の若君は童貞を喪失し、美熟の女騎士は処女を散らした。

十三歳の少年、三十五歳の女性。肉体関係を築く運命になかった男女は、襲い掛かった凶事によって愛が成就する。誰にも邪魔されぬ井戸底で、血塗れの身体を愛し合った。

「処女だったんだ」

井戸底で横たわったヴォルフガングは嬉しそうにつぶやく。処女オマンコに挿入されたオチンポは、誇らしげに射精している。恋焦がれていた女ガヴァネス家庭教師の膣道で、お坊ちゃんは精通を迎えた。

「お恥ずかしいわ。気付かれてしまいましたか。内緒だったのに……。私は行き遅れの女ですから……」

「僕は嬉しい。だって、僕が一番最初の男なんだもん。ずっとダメミエーラが好きだったから。もちろん、リリトウナもね」

「ふふっ♥ お喜びください。ヴォルフ坊ちゃん。リリトウナも処女だと言っておりますわ……♥」

「リリトウナは嫉妬深いからね。セックスのときは順番に身体を使わないとね」

ヴォルフガングは精子を送り出す。世継ぎを産ませるため、レーヴェエ家の胎に遺伝子を刻む。



五年前に起きたレーヴェ家の痛ましい悲劇。

若君のヴォルフガングは家族と使用人、四肢を失った。しかし、愛する女性を二人も手に入れた。ダミエーラとリリトゥナは妻とは名乗ってくれず、主人に仕えるメイドの立場を貫いた。それでもヴォルフガングは二人を愛する伴侶だと思っ

本邸の火災は自然鎮火した。駆け付けた荘園の者達には真相を伏せている。ダミエーラは死亡を偽った。実際、彼女は一度死んでいた。

突然現れたりリトゥナと名乗るメイドはすぐに受け入れられた。村長のような

年配者ほど、その正体を悟っているのだ。

リリトウナは素顔を騎士兜で隠した。黒森を支配する主は無貌の女神。その面貌を直視してはならない。

莊園の老人達は伝承を知っている。

ヴォルフガングは旧邸の閨樹館に移り住み、一年後には長女のダザリーヌが誕生した。母親のダミエーラとまったく同じ紫紺色の髪が生えた可愛い娘だ。

ここまでならヴォルフガングは完全な被害者だ。

異形の存在に生贄を捧げたのは、帝国で禁止された邪術かもしれないが、誰かを傷つけたわけではない。このまま平穏に暮らすのがレーヴェエ家の心優しい若君

の願いだつた。

ダミエーラとリリトゥナは違う。レーヴェ家の滅亡を謀つた主犯は逃げ延びている。隣町の司祭を放置すれば、また同じことの繰り返しだ。敵は殺さねばならぬし、敵を威圧するだけの力を欲した。

そもそもレーヴェ家は所有する莊園の豊かさに比べて、家格が見合っていないのだ。正式な貴族とは認められない准男爵家。このままでは侮られる。資産に相応しい爵位が必要だ。これは非業の死を遂げた奥方の遺志でもある。

ダミエーラとリリトゥナの利害は一致していた。

——ヴォルフガング・ゴットフリート・レーヴェ卿に永久の繁栄を与える。

爵位を得る方法はいくつもある。分かりやすいのは戦いで功績を挙げて、皇帝から叙勲してもらふことだ。しかし、四肢欠損のヴォルフガングは武功が見込めない。

手っ取り早いのは政略結婚である。爵位持ちの貧乏貴族から娘を娶る。成金の商人がよくやる手段だ。たった一度しかできない政略結婚である。どうせやるのなら上玉を狙うべきだ。

ダミエーラには伝手つてがあった。

ヒースウッド修道院に隠居した伯爵家の未亡人ベロニカ。過去に駆け落ちの手助けをした大きな貸しがある。旧友のダミエーラが頼めばベロニカは二つ返事で来てくれるはずだ。

伯爵家の本家は後継者問題を抱えている。ダミエーラの父や兄達からその話を聞いていた。

重要なのは未亡人ベロニカの貴族籍が未だに残っている点だ。自由身分の冒険者を引退した以上、帝国の法律において貴族である。病弱な当主、老齡の先代が亡くなればベロニカは伯爵の地位を継承する。

ベロニカは至高の上玉だった。リリトウナの洗脳で自我を奪い取り、ヴォルフ

ガングと再婚させる。

伯爵家の乗っ取り計画は四年前に実行された。ダミエーラはヒースウッド修道院に手紙を送り付け、ベロニカをレーヴェ家の荘園に誘き寄せた。しかし、想定外の事態が起こる。

まずヴォルフガングは計画に賛同しなかった。殺された父親によく似た温厚な性格の若君は、伯爵家の乗っ取りを拒絶した。荘園の暮らしを良くするための努力は惜しまなかったが、過剰な権威は欲していなかった。

さらなる誤算はベロニカとヴォルフガングの関係性だ。

ベロニカの人柄をよく知っているつもりだった旧友のダミエーラですら、その

展開は予期していなかった。

先立たれた夫を十年以上も慕い続ける英雄の妻だ。ベロニカは他の男に靡くような寡婦^{かふ}ではなかった。四年前の当時、ベロニカは四十路を迎えた熟女だ。

事態を知ったダミエーラとリリトウナは啞然とした。

四肢欠損の不具者に哀れみを向けることはあっても、好意を抱くとは想像できない。けれども、ヴォルフガングには年増の美女を墮とす才能があった。

伯爵家の篡奪計画も頓挫し、企みは失敗に終わった。未亡人ベロニカの自我は奪えなかった。その代わりにヴォルフガングは恋心を我が物とした。

それまで夫一筋だった人妻は、青年に乙女の魂を奪われた。ダミエーラとリリ

トウナは本気でヴォルフガングを愛しているからこそ、ベロニカの惚れ移りが本心だと理解できてしまった。

爵位を奪えないのなら、誘き寄せた未亡人は用無しだ。しかし、新たな愛を育み始めた男女は引き裂けなかった。

始まりは最愛の男に先立たれた美熟女を慰め、寂しさを癒すだけだった。背徳感に悶え苦しみながらも夜を重ね、少しずつ惹かれていった。

ベロニカの愛情をヴォルフガングは真摯に受け止めた。もう妊娠するような年齢じゃない。そんな決めつけを嘲笑うように、二人の間には子供が出来てしまう。ヴォルフガングはベロニカをあっけなく孕ませた。

ベロニカは生理が止まっても単なる不順と思い過ぎしてしまった。己の懐妊を自覚したのは悪阻つわりの苦しみで嘔吐していたからだ。

妊娠による身体の変調はすぐに現れた。

爆乳に張りが戻り、乳輪の色が日に日に濃くなっていった。そして、ついに母乳の分泌が始まった。ベロニカは二十六歳のときにカレンティアを産んだ。それ以来、赤子に母乳を飲ませたことはなかった。

「ダザリーヌは美味しそうに飲んでるね」

ヴォルフガングは食欲旺盛な愛娘にご満悦だった。産まれたばかりの長女は、歯も生え揃っていない乳飲み子。子育てを手伝うベロニカは、母乳が出始めたの

で授乳もするようになった。

無垢な赤子は可愛い。しかも、親友が産んだ娘であり、顔立ちが瓜二つだ。あと十数年も経てば容姿端麗な母親を完璧に受け継いだ美少女になるだろう。

「ベロニカ様の豊かな乳房を見てみると羨ましくなります。ダザリーヌは私のミルクだけでは満足してくれません」

騎士兜で素顔を隠したダミエーラは愛娘を撫でる。旧友の貌はもう二度と見られない。きっと幸せそうな母親の顔をしているのだろう。「結婚はしない。好きな相手もいないし、貰い手もいない」と公言していたダミエーラが幸せを掴んだ。素直に祝福している。事情を複雑にしているのは自分の立場だ。

（私も妊娠してしまったわ。ヴォルフ坊ちゃんちゃんの赤ちゃんが子宮にいる……）

子供を産むかどうかはベロニカが決められる。ダミーエーラは痛みを耐えてダザリーヌを産んだ。ベロニカは迷っている。そして躊躇ためらいで心が乱れる。出産に伴う苦痛を恐れているからではない。左手の薬指に嵌められた結婚指輪が枷かせになっていた。

（まだ結婚指輪を外す気になれないわ……。私はヴォルフ坊ちゃんに恋している……と思う。こんな年齢になって……年若い乙女のように……。でも、夫への想いを忘れ去ったわけでもないわ）

満腹になったダザリーヌはすやすやと可愛い寝息を立て始める。ベロニカは快

眠中の乳児をダミエーラに渡した。子供に愛情を注ぐ権利は生母にある。

「ベロニカ様……。私を恨んでおられますか？」

「いいえ。むしろ私が恨まれていると思ったわ。ダミエーラは私が駆け落ちしたせいで、伯爵家にはいられなくなったでしょう。当時は私も考えが回らなかつたわ。幼い従者に手助けしてもらうなんて……。残されたダミエーラの立場を考慮すべきだった……」

「恨んではおりません。地位を捨てたお嬢様を羨ましいとは思いましたけれど……。今になって思えばお止めするべきでしたわ。お互いに幼かつたのです。……けれど、今はもう分別を弁えた大人の淑女レディですわ」

「ええ。そうね。……私が闇樹館に残ると言ったとき、ダミエーラも驚いていたわね。リリトウナはともかく、私をよく知る従者なら……お見通しだと思ってたわ」

「付き合いの長さや親しさで、相手の心が読めるわけじゃありませんよ。ベロニカ様だって私のが手紙を罫とは思わなかったでしょう？」

「ええ……。そうね。とてもよくできた内容でしたわ」

「このままヒースウッド修道院に帰らなければベロニカ様は失踪扱いです。伯爵家やカレンティア様は心配なさるでしょう」

「レーヴェ家の名前は誰にも教えていないわ。……ここは帝国辺境よ。搜索依頼

が出されても、誰も辿り着けない。私は隣町にも寄らずに来てしまったから」

「ベロニカ様は御決心なされたのですね」

「ええ。ここで暮らすわ。ヴォルフ坊ちゃんの子供を授かったのは運命だと思えますの。ヒースウッド修道院に戻る気にはなれません」

頬が赤くなったベロニカは照れながらヴォルフガングを見た。ヴォルフガングも恥ずかしそうにしている。

「ヴォルフ坊ちゃんは罪作りですわね。私とリリトゥナの野望を挫き、入念に練った伯爵家の乗っ取り計画を潰し、まさかベロニカ様を口説き落すなんて……。年上が好みなのは知っておりましたけれど……。ふふっ……」

「それ。リリトゥナにも嫌味を言われたよ。でもさ。僕の知らないところで大それた計画を立てないでほしいかな」

ヴォルフガングはベロニカを帰すつもりだった。しかし、ダミエーラとリリトゥナは反対した。ベロニカはレーヴェ家の秘密を知り過ぎた。だが、その懸念は杞憂に終わる。ベロニカはヴォルフガングに恋心を抱いた。この地に留まり、共に暮らすことを選んだ。

「リリトゥナはどこに行つたのかしら？ 私の中にはいないみたいだわ」

ベロニカは黒森の主にも順応した。リリトゥナに肉体を明け渡し、ダミエーラと同じ憑依先の受肉者になっている。

「私の身体にもいませんね。おそらく黒森の見回りでしょう。隣町の司祭が嗅ぎまわっているせいです。莊園の者達が言っております。隣町は良からぬことを企んでいるのでしよう」

ダミエーラは吐き捨てる。隣町の司祭は今すぐに殺してやりたい。しかし、ヴォルフガングの許可が下りなかった。

「追い払えばいいよ。五年前と違って重武装になった自警団がいるんだ。武器商人から強奪した疑いで、商会からの信頼も失った。たいしたことはできないよ」

「レーヴェ家の土地に入ってきたら八つ裂きにします。それは莊園で働く者達の総意ですよ。ヴォルフ坊ちゃん」

「分かってるよ。土地に入ってくればね……」

ヴォルフガングは復讐を望まなかった。隣町の司祭がレーヴェ家の土地に踏み入ってこない限り、手を出しては厳禁。侵入した場合に限って殺害を認めた。

「私はダザリーヌを子供部屋に寝かせてきますわね。ベロニカ様はヴォルフ坊ちゃんのお世話をお願いいたします。——ベロニカ様、ごゆっくりどうぞ♥」

ダミエーラは我が子のダザリーヌを抱いて寝室から去った。残されたベロニカとヴォルフガングは無言で互いを見詰めた。男の視線はミルクが滲み湧く爆乳、女の視線は男根の膨らみに向けられた。

「ずっと思ってたんだけど、ベロニカってセックスが好きなの？」

「はい。夫に先立たれてから我慢していましたが、性欲はとても強い……イヤらしい女ですわ……。こんな……年齢で……妊娠しちゃうくらい……」

全裸になったベロニカは這い寄る。白金色の美髪を解きほぐし、ヴォルフガングの矮軀をベッドに押し倒した。

「僕の子供を産むの？ たぶん……子供を産むためには……」

「ええ。分かっておりますわ。それでもお腹に宿った命を……。ヴォルフ坊ちゃんの子供を愛したい……。♥ ダミエーラのように……。♥」

左手の薬指で輝きを放つ結婚指輪に謝罪する。永遠の愛を誓った夫婦の象徴。

絶対的だった情愛は色褪いろあせた。

未亡人は若々しい男根に欲情する。騎乗位セックスでデカ尻を叩きつけて、熟れたオマンコでオチンポを扱しごく。失踪した自分を探しているであろう家族や友人を忘れ、ヴォルフガングだけに想いを寄せる。

その年、ベロニカは女兒を出産した。

母親譲りの美貌と白金色の髪が生えた赤子だ。レーヴェエ家の血を引く娘はアヴェロアナと名付けられた。

【終章】レーヴェエ家のハーレム　　（無貌の孕女は愛欲に溺れる）

翌日の早朝、カレンティアは奪われた聖剣を探していた。ヴォルフガングから過去の真相を聞き出し、リリトウナが黒森に棲みつく異形の存在であると理解した。

女神、精霊、悪霊、魔物。リリトウナはキススキルをどのように評価するかは立場次第だ。四年前にレーヴェエ家を嗅ぎまわって殺された隣町の司祭からすれば恐ろしい化け物。しかし、レーヴェエ家にとっては守り神である。

ヴォルフガングの四肢を喰ったリリトウナは、女の身体に取り憑く能力を得た。

今はカレンティアの肉体に封じ込めているが、他にも憑依先がある。ダミエーラとベロニカである。

時間が経てばリリトゥナは憑依先を乗り換えて、カレンティアの抹殺を図る。その前に逃げてほしいとヴォルフガングに懇願された。

屋敷内で聖剣は見つからなかった。黒森のどこかに隠されてしまった可能性が高い。しかし、黒森はリリトゥナの縄張りだ。足を踏み入れれば、再び肉体を奪われかねない。

（莊園に戻って村長の家で飼われている馬を盗む……。相当な無茶になるけど……冒険者の私だったら隣町まで逃げられるわ）

北方の厳しい冬が始まってしまった。

積雪が山峡の細道を埋め尽くしている。だが、雪崩が起きるほどではない。上位ランクの冒険者であるカレンティアなら悪路を踏破し、隣町に逃げることは可能だ。

逃げるなら今すぐにだ。迷っている時間はない。

（聖剣を取り戻す余裕はなさそうだわ……。時間が足りない……。でも……。母さんを置いては……）

ずっと探し続けた母親と再会した。

四年もの間、行方知れずだった母親は妹を産んでいた。新しい男との恋に溺れ、

身も心も寝取られてしまった熟母。変わり果てた母とどう向き合うべきか。カレンティアは苦悩する。

(私も妊娠しているかもしれない)

愛する婚約者を裏切り、ヴォルフガングのオチンポに媚びてしまった自分を恥じる。

憑依洗脳の状態から脱した後、言い逃れのできない浮気を一度だけしてしまった。子宮の奥底に種を植え付けられた。その瞬間だけは間違はなく、帝都に残したクロヴィスへの愛が上書きされた。

「——お姉ちゃん」

闇樹館の玄関を出たカレンティアを呼び止める。待ち構えていたアヴェロアナの御髪が冬風で舞う。プラチナブロンドの美髪に目を奪われた。血の繋がりを強烈に意識させてくる。

異兄妹アヴェロアナ。母親が父親以外と愛し合って産まれた娘。しかし、カレンティアと違って浮気ではない。死別して十五年以上もの歳月が過ぎた。娘も成人し、立派に独り立ちしている。

ヒースウッド修道院で祈りを捧げる寂しい生活。それが母親の幸せだろうか。

レーヴェ家で新しい人生を始める。その選択を咎める権利が、娘のカレンティアにあるとは言えない。

「その剣……！ いったいどこで……!?」

驚愕したカレンティアは口を開けた。

アヴェロアナは聖剣を抱きかかえている。小さな三歳児には重たい。鞘先を地面につけていた。引きずるようにして持ってきたようだ。雪に残った足跡は黒森から続いている。

カレンティアは聖剣を受け取る。

この剣を装備していれば、リリトウナの憑依を防げる。

聖劍から伝わってくる恩寵に安堵感を覚える。その一方で、この聖劍を返してくれたアヴェロアナの狙いが分からなかった。

（いいえ、そうじゃないわ。これを仕組んだのは……）

三歳児の幼女は母親に従っただけだった。アヴェロアナは雪が降り積もった玄関先を駆けていき、母親の身体に抱きついた。両手を広げて臨月のボテ腹に張り付いている。

ふゆがすみ
冬霞に煙る寒空の下、漆黒の騎士兜を頭部に装着した母親が佇んでいた。

「黒森に捨てられていた滅魔の聖劍を持ってきてもらったわ。貴方が闇樹館を訪れた初日、ダザリーヌが捨ててに行ったのをアヴェロアナが見ていたのよ」

懐かしい母親の声だった。リリトウナの支配は受けていない。カレンティアには分かった。聞きなれた声色には、もう一人の娘を按じる母親の愛情が宿っている。

「母さん……」

「カレンティアはこんな私をまだ母と呼んでくれるのね」

妊婦仕様のメイド服を着た母親はもう一人の娘と向かう。結婚指輪を外した左手で、レーヴェ家の娘を撫でている。

大きく目立つボテ腹に宿す胎児は、ヴォルフガングと愛し合った証。カレンティアの知らぬ四年間で、どれだけの種を注がれたのだろう。四十路の半ばに差し掛

かった美熟母は二人目の受胎を遂げた。

「ヴォルフ坊ちゃん……。いいえ、レーヴェエ家の当主から真相を聞いたわ。五年前にレーヴェエ家で起きたことも……。四年前に母さんが行方知れずになった後の話も……。だけど、私は母さんを助けにきたの！ リリトゥナに操られて、レーヴェエ家の子供を産まされたんでしょ？ 無理やり、メイドに仕立て上げられて

……!!」

「私はヴォルフ坊ちゃんをお慕いしているわ」

「母さんは洗脳されてるっ……!」

「聞いてちょうだい。カレンティア……。私は貴方が思っているような女じゃない

いのよ。理想の母親を……ずっと演じてただけ……。ヴォルフ坊ちゃんとは相思相愛よ。アヴェロアナを産んだのは私がそうしたかったから。……可愛い妹でしよう」

「ここでその娘と……。レーヴェ家で暮らし続けるつもり？」

「ええ。ここが私の新しい故郷。愛する家族だわ。もちろん、カレンティアだつて大切な娘よ。十五年前に死んでしまった夫も愛していたわ。何ものにも代えられない存在だった」

母親はかつての夫を過去形で語る。

「……そんなに……。レーヴェ家の当主を愛してしまったの……。？」

「レーヴェ家は四年前に隣町の司祭を殺しているわ」

「もちろん、知っているわ。五年前に隣町の司祭はレーヴェ家の人々を殺したわ。因果応報よ。ヴォルフ坊ちゃんにあんな仕打ちをした奴に同情なんかできないわ」

「レーヴェ家が飼ってるリリトゥナは異形の存在よ。人間に災いをもたらす……。顔無し……無貌を見たわ……。あの怪物は邪神よ！」

「黒森の主はヴォルフ坊ちゃんを愛しているわ。守ろうとしているだけ。私達は異教の女神と共存し、辺境で平穏に暮らしているのよ。レーヴェ家は悪じゃないわ。……カレンティアは帝都に帰りなさい。聖剣と指輪を持って、私達の前からいなくなっほしい」

「私の言葉はもう届かないの……？　母さんっ……!!」

「ヴォルフ坊ちゃんのお世話をすること。それが私の幸せ。邪魔をしないでほしいわ。それに私の身体は今や異形よ……」

騎士兜を外した母親は、首無し of 身体を娘に見せつけた。切断された頸部の断面で、黒い影が渦巻いている。

「なんでそんな身体に……？　なぜ頭部を失ってしまったの!?!」

「あら……。そうだったの……。ヴォルフ坊ちゃんは全てを説明してくださらなかったのね」

「やっぱり……。奪われた自分の首を取り戻せば母さんは……。レーヴェエ家から

逃れられる。そうなんですよ？」

「捧げた首を取り戻そうだなんて思わないわ。私は自分の意思で三年前に捧げたの……！　取り戻す……。いくらカレンティアでも、それだけは絶対に許さないわ……!!」

荒々しい口調だった。豹変した母親の怒気にカレンティアは愕然としている。

「え？　え……？　母さん……？」

「カレンティア……！　貴方は帝都に帰りなさい。封じ込めたりリトウナが出てくる前に……。黒森の主が戻ってきたら、きつとカレンティアは殺されてしまうわ。私とヴォルフ坊ちゃんの善意を無駄にしないで……。お願いよ」

母親の痛々しい懇願。心の移ろいは明らかだ。カレンティアは見ていられなかった。新たな家族を築いた母親にとって、亡夫との間に儲けた娘は邪魔者だ。

カレンティアが帝都に逃げ帰れば全てが終わってしまう。失踪した母親は世間から忘れ去られる。レーヴェ家で起きた出来事をカレンティアが話さない限り、誰も傷つかない。

（私が秘密を守れば誰も傷つかない。でも、それでいいの？ 私が帝都の冒険者組合や帝国軍に通報すれば……）

表沙汰になれば異形の存在と結びついたレーヴェ家は、取り潰されるだろう。しかし、それで得をするのは隣町だ。荘園の人々は生活基盤を失い、路頭に迷う。

そこに正義はあるのかと思ひ悩む。人間には誰しも後ろめたい秘密がある。カレンティアにも婚約者のクロヴィスに話せない背徳的秘密を抱え込んでいた。

(昨夜の過ちは……。クロヴィスに言えないわ……)

カレンティアは己の淫欲に駆られて、四肢欠損の不具者を逆レイプした。

クロヴィスとのセックスに今まで不満はなかった。けれども、ヴォルフガングとの肉体相性は最高だった。背徳の拒否感を塗り潰し、子宮が亀頭に吸い付いた。胎が精子を飲む干す快感に酔った。

母親を寝取ったオチンポの強さは、一生涯忘れられないだろう。

(母さんが愛した二人目の男……。すごく嫌なのにつ……)

涙ぐんだカレンティアは、母親が捨てた結婚指輪を強く握りしめる。

（レーヴェ家に残る選択をした母さんの意思を尊重するなら……）

首無しの異形者になろうとも、母親の人格は変わっていない。心を寝取られた以外は、カレンティアが知っている母親だ。異父妹を抱き寄せる愛母に、かつての面影を重ねてしまう。

（え？ 待って？ アヴェロアナは……）

初めて見たときから、母親と酷似した少女だと思った。

血がつながった親子なのだから、そっくりな容姿は当然だ。しかし、あまりに

も似ている。父親からの遺伝は薄く、母親の血が濃い。顔立ちだけは間違いない。そうだ。成長したアヴェロアナは、きっと母親を複製したような美女になる。

「まさか……？　ありえないわ……。でも……。うそ……」

その可能性に思い至る。レーヴェ家の莊園ではリンゴが栽培されている。その栽培方法をヴォルフガングは教えてくれた。優れたリンゴの形質を維持するため。交配し続けても、中味の劣化を防ぐ古来からの手段。それは接木である。接木で増やせば完璧な複製だ。大本になったオリジナルの穂木ほぎが子供を産み続ける。身体を乗り換えながら……。

母親の貌は消えた。ばっさりと首を刎ねられている。その代わりに、三歳児の

幼女は母親と瓜二つの貌がある。それは母親の頭部がどこにあるのかの答えだ。



「いけませんわ。ベロニカ様……！ たとえヴォルフ坊ちゃんの望みであろうとも……。やはりカレンティアは帝都に帰せませんよ」

現れたもう一人のメイドは剣を握っていた。

叙勲を受けた騎士の剣が煌めく。無論、メイドは首無しだ。黒騎士の兜を装着している。

「貴女は……!! ダミエーラ……っ!」

無貌であろうと、カレンティアにはその正体が分かった。背後には紫紺髪を靡かせたダザリーヌの姿もある。

「初めまして、カレンティア。私はレーヴェ家にお仕えするダミエーラと申します。現在はメイド、以前はヴォルフ坊ちゃんの家庭教師をしておりました。私の素性はお聞きになっているのでしょう?」

「……っ!」

「リリトゥナの支配を撥ね退けた精神力は、まさしく英雄の娘。それとも由緒ある伯爵家の血筋とお褒めするべきでしょうか。娘の遊び相手をしてくださり、本

当にありがとうございました。子守りがお上手ですね？　ダザリーヌはカレンティアを気に入っておりますよ」

「貴方が母さんをレーヴェ家の莊園に……！　呼び寄せた元凶……!!」

「ええ。はい♥　四年前に手紙で誘き寄せました。リリトウナと私の策謀ですわ。ヴォルフ坊ちゃんに止められてしまったので、伯爵家の乗っ取りは頓挫しました。ああ、残念♥　しかし、実に幸運です。まさか貴方まで来てくれるなんて……。

既成事実を作ってしまったえば、ヴォルフ坊ちゃんも受け入れてくださるでしょう」
「悪びれもしないのね！　かつては伯爵家に仕えていた騎士だったくせに……!!」

「私はレーヴェ家に朽ちぬ繁栄を与える。そのために蘇ったのです。ベロニカ様

がそうであったように、カレンティアにも協力してもらいますわ　ふふっ♡　く
ふふふふっ♡」

ダミエーラの声にはリリトウナの口調が重なっていた。人格が混じっているのだ。

（間違いない。リリトウナが混ざってるわ。私の肉体から抜け出て、憑依先を変えようとしている……。ヴォルフ坊ちゃんや母さんと違って、こいつらは私を逃がす気がない）

ダミエーラは黒森の支配者と同化しつつある。憑依先になった人間は、いずれリリトウナと自我が溶け合う。

「へえ？ レーヴェ家の朽ちぬ繁栄？ 私の首を刎ねて、赤子に挿げ替える気？ リンゴを接木で増やすみたい……！ そうやってレーヴェ家を繁栄させるっていうの!？」

首のない母親が二人。

母親とそっくりな顔の娘が二人。

簡単な足し引きで辻褄が合う。

「異形と人間は子供を成せません。リリトウナに憑依された女は、首無しの子を産み堕とす。けれど、足りないのなら補えばいい。母から娘への贈り物です」
「とても正気とは思えないわ。狂っている！ 人間の頭を挿げ替えるだなんて

……！　どうかしてるわ！」

「そうでしょうか？　それなら貴方の母君は異常者？　くふふっ……。ベロニカ様は決断してくれましたよ。親友である私の想い。そしてヴォルフ坊ちゃんを愛しているから……。♥　ダザリーヌとアヴェロアナは母親似の可愛い娘達でしょう？」

「母さんが産む二人目の赤ちゃんのために、私の貌を寄こせてわけ!？」

「ベロニカ様が宿した赤子は女兒です。カレンティアの貌がきつと良く似合う。レーヴェエ家の娘になってください」

「ダミエーラ……。！　かつての貴方は尊敬に値する騎士だったわ。レーヴェエ家を

守るために戦った……！　けれど、今の貴方は気高き人間性を完全に失ってしまっただ！！　黒森の支配者に取り憑かれたせいなの!?!」

「さあ？　そうかもしれないですね。しかし、後悔はないです。レーヴェ家の繁栄に尽くせるのですから……♡」

「行くところまで、行っちゃってるようね」

カレンティアは説得を諦める。もはや戻ってこられない狂気の先にダミエーラは進んでいる。

「ああ、その若い身体……。ぜひ欲しい。私達は歳を取り過ぎました。ヴォルフ坊ちゃんの子供を産み続けるのは難しい。年齢の割にベロニカ様は頑張ってくだ

さいましたが、若い母胎が欲しいのです」

「五年前に起きた事件には同情するわ。隣町の司祭が死んだのも自業自得……。だけど、異形が起こす災厄は看過できないわ。レーヴェ家はこれから首を狩り続ける気でしょ。だったら、冒険者としての行動を取らせてもらおうわ！」

カレンティアは滅魔の聖剣を鞘から解き放った。

「——ごめんなさい、母さん！ 私、やっぱり見過ごせないわ!!」

ここで新たな幸せを掴んだ母親にとっては悲惨な結末だ。レーヴェ家の当主で

あるヴォルフガングも処罰を免れない。異形の存在と契約を交わし、聖職者を殺めさせた。その大罪は極刑でしか贖えない。カレンティアの決断はレーヴェ家を滅亡させるだろう。

（まずはダミエーラを倒して、ヴォルフ坊ちゃんと母さんを説得する！ 私の勘が正しければ、リリトウナには本体がある。おそらく黒森のどこかにある原生樹……。隣町の司祭は悪人だったけれど、倒し方を見つけていたんだわ。リンゴの原生樹を燃やせば……リリトウナはこの世から消える……!!）

異神リリトウナを葬り去ったとき、レーヴェ家の子供がどうなるかは分からない。母親から首を挿げ替えられて産まれた姉妹。もしかしたら死ぬかもしれない。

(たぶん……。私は母さんも殺すことになる……。！)

首を失っている母親は間違いなく絶命する。それでもカレンティアは覚悟を決めた。

契約を結んでしまった者では止められないのだ。リリトウナとダミエーラを放置すれば、これからも犠牲者が増え続ける。レーヴェ家を繁栄させるために大勢の人間が苗床となる。

(私がやらないと——)

レーヴェ家の若君は裁きを望んでいた。報いを受けるその日を待ちわびている。

「——っ!？」

聖剣を振り上げたカレンティアは驚愕する。渾身の力を込めて握っていたのに、柄がすり抜けた。聖剣がするりと転がり落ちる。

「なっ、なに……!? これえっ!? ひいつ! いっ!? んひぎいっ……! んオ……! オオっ……♥」

カレンティアは下腹部を押さえてうずくまる。

子宮に熱した鉄球を容れられたかのような焼けつく痛み。けれども、激痛以上の快感が伴っている。胎の奥底から生じた官能的悦びが肢体の感覚を麻痺させる。

「いったい……なにを……! ふひう♥ んあっ♥ んオ♥ おっ♥」

両脚に力が入らない。新雪の絨毯が敷かれた地面に倒れ伏し、ダミエーラを凝

視する。だが、カレンティアの異変は攻撃によるものではない。

「カレンティアを帝都に帰すわけにはいかない。だって、お腹にレーヴェ家の赤ちゃんがいるんですもの。さすがはヴォルフ坊ちゃんの精子♥ 優秀な種ですわあ♥」

ダミエーラは地面に落ちた聖剣を遠くに蹴り飛ばした。

「は？ ふざけっ……ふいんひっ♥」

「いくら口で否定しようと、ヴォルフ坊ちゃんに魅了されたのは事実。心を一度でも許し、惹かれてしまった。もはやこの地から逃れられないわ。女神の憑代はレーヴェ家に仕える。それが往古に結ばれた契約よ」

ヴォルフガングの精子は実ってしまった。カレンティアの胎には新たな命が宿っている。懐妊は帝都に残した愛する婚約者クロヴィスを裏切った証。胎児はこの地に留まるため、母胎を苦しめている。

(妊娠……！ そんな私が……妊娠なんて……!!)

リリトウナに憑依された状態でカレンティアは懐妊した。赤子は呪われ、異形の姿で生まれ墜ちる。このままカレンティアが帝都に逃げ帰ったら、胎の赤子は墮胎されるだろう。仮に産む決断をしても、赤子は産声を上げられない。

首無しの子には、挿げ替える頭が必要だ。

「ああっ………♥ いぎいっ………ああんっ………♥ だっ………！ だあすけ………え

……！ かあ……さあ……んっ……！！」

カレンティアは口から唾液の泡を吹き漏らす。手を伸ばし、視線で訴える。子供のように泣きじゃくり、母親に助けを求めてしまう。しかし、全ては手遅れだ。

もうカレンティアの母親ではない。大切な結婚指輪を外し、十五年前に死に別れた夫の墓に捨てた。その瞬間、ベロニカは母親から女に生まれ変わった。

「ごめんなさい。カレンティア。ヴォルフ坊ちゃんの赤ちゃんを宿してしまったら、もう助けられないわ。でも、また私の娘にしてあげる……。また家族になりましたよ」

ベロニカは慈母の眼差しで、倒れ伏したカレンティアの貌を撫でた。限界点ま

で膨張し、張り詰めた巨大なボテ腹が蠢いている。

「どう……ほしい……てえ……」

「愛してしまったからよ……。心の底から愛しているわ。貴方の父親よりもヴォルフ坊ちゃんが……今は好きなの……！　ふしだらな母と嗤ってちようだい。若い男に心を奪われた愚母を……」

ベロニカはカレンティアの頸部けいぶに両手をかける。

握力を徐々に高めて、喉を圧迫していく。殺意は込められていない。意識を失わせるために優しく締める。

「やっ……！！　め……ア……！！」

カレンティアの意識は漆黒に飲み込まれた。



黒森に隠された原生樹は異神の化身である。

レーヴェ家の莊園で育てられた果樹は、リリトウナ^リキス^スキル^ルによって齎^{あづか}された恵みだ。

無貌の異形者は頭部を欲する。この地で暮らす人々は死後に頭部を捧げる。聳^{そび}え立つ原生樹の根本では何百年もの間、供物にされてきた頭蓋骨が積み上がって

いた。

おぞましい異教の首塚。教会の信徒からすれば、邪教の祭壇にしか見えない。だが、レーヴェ家と荘園に住む者達にとっては神聖な場所だ。北方の痩せた僻地で、厳しい冬に襲われながらも、裕福な暮らしができるのは、この異神のおかげだ。隣町の人間はリリトウナを悪霊と呼ぶ。だが、レーヴェ家では守護精霊であり、敬愛する女神であった。女神もレーヴェ家の人間を幾代も見守り続け、深く愛していた。

ダミエーラやベロニカは渴望していた憑代だった。

レーヴェ家の使用人や荘園で働く人々がずっと羨ましかった。欲しかった肉体

をついにリリトウナは手に入れた。しかも、想いを寄せていたヴォルフガングの幸せに尽くせるのだ。

原生樹の枝がうねっている。触手のように手足を絡め取り、妊婦の裸体を支える。重力で垂れ下がったポテ腹は、より一層大きくなっていた。膨らんだ巨胎は完熟した果実を思わせる。

「ああっ♥ はあっ……♥」

ベロニカは原生樹に我が身を委ねている。周囲は雪が降り積もっていたが、この周囲だけは真夏の蒸し暑さだ。裸でも汗を掻くほど暖かい。

「ヴォルフ坊ちゃん。はあはあ……。んうっ……。そろそろですわ……♥ 陣痛

が激しくなってきました……」

原生樹にはヴォルフガングも絡め取られている。何十本もの枝木が四肢欠損の矮軀を抱きかかえ、地中から伸びた根が栄養を血管に注ぎ込む。精力の強制的な供給。地中から吸い上げた絶大な生命エネルギーは、レーヴェ家の若君に授けられる。

人間は愛情を込めて果樹を育てる。それと同じだ。

原生樹はレーヴェ家の一族を愛でている。朽ちぬ繁栄のために、ヴォルフガングと優れた女を交配させて子孫を作る。五年前の大火事で、たった一人になったヴォルフガングの種で、レーヴェ家を復興させねばならない。

伯爵家の血筋を引くベロニカは、とても優秀な胎を持つ美女だった。年齢の問題で孕ませるのは諦めていたが、驚くべきことに二度も身籠った。遺伝子の相性が適合していた。

英雄の愛妻であった未亡人、異神に愛でられた青年。絶対に結ばれるべきではなかった男女である。だが、一度でも交われれば、その繋がりは誰にも絶てない。

「ベロニカ……っ！ 駄目だ。僕らの子供が産まれたらカレンティアは……!!」

ヴォルフガングの男根にベロニカの巨尻が押し付けられた。

陣痛で痙攣を繰り返す膣穴が、オチンポの迎え棒を懇願している。リリトウナの化身である原生樹も、抱き吊るし上げたヴォルフガングに挿入を促した。

前屈みのベロニカは、立ちバックの体勢で背中を反らし、淫汁の涎で濡れたオマンコを見せる。どんな紳士であれ、男根を生やした雄はこの誘惑に勝てない。

ヴォルフガングの勃起オチンポは血管が浮き出るほど硬く、屹立してしまった。「ヴォルフ坊ちゃんはよくやってくれましたわ。だから、もういいのです……。カレンティアは逃すのはもう無理……。だって、レーヴェ家の赤子を宿してしまっただ。私やダミエーラのようにっ……。♥ 憑代としてえ……。♥ この地で生きていかねばなりませんっ♥」

「でも！　でも……。だからって……。うっ……。！」

ベロニカのオマンコが亀頭を啜え飲む。媚肉の褻がオチンポを取り囲む。美熟

女の使い古された産道は、あどけなさが残る青年の情欲をがっしりと掴む。

「あぁっ♥んぁっ♥ヴォルフ坊ちゃん……♥私は酷い母親です……♥カレンティアは大切な娘……。でも、やっぱり私は産みたい……。♥授かった赤ちゃんを……。♥愛している御主人様の子供を……。♥」

原生樹の介助によって、ベロニカとヴォルフガングは背面立位のセックスを遂げる。ぶすりと後ろから突き刺さった肉棒が産道を押し広げ、根元まで食い込んだ。挿入で押し上げられた巨尻が、淫靡な楕円型に歪む。

「こんなことはいつまでも続かない。ダメエーラとベロニカは合意があった。原生樹に捧げられた首だってそうだ。だけど、カレンティアは違うんだよ……」

「ええ♥　そうですね♥　悪業の報いを受ける日が来るかもしれません♥　でも……この幸せには……代えられない……♥　とても罪深い。許されざることですわ。けれど……私は誘惑に抗えない……♥　私はカレンティアをお捧げします。十八年前に産んだ我が子を……っ！　この生贄を受けて取ってください……!!」

ベロニカは宣言してしまった。異神の化身である原生樹は不徳な母の願いを聞き届ける。

生贄のカレンティアは仰向けで地中に囚われていた。幾重もの根っこに縛られ、身動きが取れない。見上げた視線の先では四年もの間、ずっと探し続けていた母

親は淫魔のように腰を振っている。

母乳を嘔き漏らし、快楽に酔い痴れ、おぞましい異教に女神に祈りを捧げていた。自分を産んだ女穴でオチンポを激しく扱しごき、けたたましい肉音を奏でる。

夢見心地のカレンティアは、帝都に残した婚約者のクロヴィスに詫わびる。帰つたら結婚するつもりだった。しかし、その未来は潰えた。

引き返す機会は何度も与えられた。

ヴォルフガングが再三にわたって警告した。しかし、それを無視したのはカレンティア自身の判断だ。母親が新しい男と新たな家庭を築いている。その現実を許容できなかつた。

ベロニカはヴォルフガングを愛し、ヴォルフガングもベロニカを愛した。無貌なる異神は祝福を与えた。

（ヴォルフ坊ちゃん。私の力をお捧げします。手足を失おうとも、レーヴェ家を復興させる偉大な支配者になるのです）

リリトウナの声が脳内に響く。血管に繋がった原生樹の根がヴォルフガングの肉体に生命力を送り込んでくる。陰囊を包み込んだ細長い根毛は、挿入されたオチンポに絶大な精力を発揮させた。

（大貴族の女をヴォルフ坊ちゃんは征服したのです。英雄と持て囃された冒険者の妻を奪い取った。未亡人のベロニカを孕ませたとき、責任を取ると仰られた）

リリトウナは囁く。その声はヴォルフガングとベロニカを導き、生殖器の交合がさらに強まった。絡みついた枝が、セックスする二人の身体を固定する。

「もうっ……十分だよ……。僕とベロニカにはもう娘がいる。アヴェロアナを産んでくれたじゃないか……っ！」

（二人目ができてしまったのですよ。しかも、ぴったりの貌が捧げられたわ。ベロニカの望みを叶えてあげてください。カレンティアを助けることではなく、ヴォルフ坊ちゃんの赤子を産みたがっているわ）

「子供のためにカレンティアを生贄にしたら……」

（よろしいではありませんか。首無しのカレンティアを使用人にするのです。若

い胎はレーヴェ家の子をたくさん産んでくれることでしょう。ヴォルフ坊ちゃん
は年増がお好きだと存じておりますが、若い娘も悪くはございませんよ……♡
理性の堤防は決壊し、獣欲が濁流となって善悪の分別を押し流す。射精する亀
頭が羊膜を破った。

「ごめんなさいっ……」

ヴォルフガングは子宮を突き上げる。首無しの子は自然出産できない。ダザ
リーヌやアヴェロアナを分娩させたときも、男根で迎え棒を行った。

「んんう♡んおおうっー♡んおっ♡おおっ♡おっ♡おっ♡ん
おおおおオオ〜♡あああっ♡んぎい♡ぎいっひいっ♡おおおお

おおおおおおおオー❤️」

ぢゅぽんつと男根が外れた。

栓の抜けた風呂桶から湯水が流れ出るように破水した。湯気の立ち昇る羊水が股を流れ這う。セックスで解され、十分に開大した産道を赤子が通る。

「はあはあっ❤️ はう❤️ ひいつ❤️ ふうっ……うう……❤
産むっ❤️ 産まれちゃうっ……❤ 出てくるううっ!!」

黒騎士の兜で覆われた頭部は涙を流さない。だが、もしベロニカの貌が残っていたら、大粒の涙を流していただろう。その涙が何を意味するのかはきつと本人でも分からない。

——首無しの女兒がこの世に産まれた。

産声は聞こえてこない。原生樹の根に取り上げられた女兒は頭部が付いていなかった。

（ふふっ……♡　なんて可愛いお嬢ちゃん。立派な貌をすぐに接いであげますわ）
原生樹は産まれたばかりの赤子をあやす。そして、生贄のカレンティアに語りかける。

（そんな怯えなくていいでしょうに……。安心しなさい。首を刎ねるだけ。殺さ

ないわ。ヴォルフ坊ちゃんを横取りしようとした貴方は気に入らない。けれど、憑代は増やしておきたい。若い召使いが欲しかったの。レーヴェ家のメイドになりなさい)

カレンティアの首がぐるりと回転した。頸部が振じ切れ、頭部を奪われる。血は一滴も出なかった。漆黒の暗闇が切断面を覆っている。

「はあはあ……♥ あれを見て……。ヴォルフ坊ちゃん。カレンティアが私達の新しい娘になりますわ♥」

「そうだね。ベロニカ……」

ヴォルフガングは素直に祝福できなかった。しかし、もはや自分では止められ

ない。

黒森と契約を結び、これまで維持していた異神との均衡を崩したのは自分だ。貞淑な未亡人であったベロニカの心を奪ったのも自分。誇り高き騎士であったダミーエーラを蘇らせたのも自分。全ては己が望んだ願いだ。

黒森の支配者はヴォルフガングの欲望を叶えている。

(誰かが裁いてくれるその日まで……。僕は……。捧げられた女性達を孕ませ続けるのだろうか……)

異形の赤子はカレンティアの頭部に手を伸ばした。断面の細胞が結合していく。頭蓋の大きさが縮み、赤子の身体に適合する。

黒森に産声が響いた。

首無しのカレンティアがゆっくりと起き上がる。

異父妹に捧げた頭部の代わりに、漆黒の無貌が形成される。完璧な憑代に仕上がった。主導権を奪われることは絶対にならない。

「乳房の重みが軽く感じられます。素晴らしいわ。若くて強い身体です。ベロニカは良い娘を作りましたね。自我が強かったけれど、首を落とせばおとなしいものですね」

赤子を抱き上げる。母親と勘違いした乳児は乳首を甘噛みしてくる。

「おやおや……。私はママではありませんよ。そのうち、母乳をあげられるよう

になるでしょうけれど……」

漆黒で塗り潰された貌は酷く不気味だ。しかし、無垢な赤子に恐怖心はない。

たとえばその頭部が以前は異形狩りの凄腕冒険者であったとしても。奪い取られた貌は、もう異父妹の身体に馴染んでいた。

「さあ、ベロニカ。どうぞ。貴方の可愛い娘ですよ。おっぱいを吸わせてあげなさい。お腹を空かせているわ」

「はあはあ……。わたしの……。むす……。め……。白金髪の……。可愛い女の子……。」

「ヴォルフ坊ちゃんはこちらに。おめでたいですわ。一緒に名前を考えましょう。」

産声を聞いたダミエーラが迎えに来るまでに決めたいですね」

母胎と赤子を繋いでいた臍帯を切断し、引きずり出した胎盤は原生樹の肥料となった。

疲労困憊のベロニカは渡された愛娘に授乳する。

娘を産むためにもう一人の娘を生贄に捧げてしまった。重たい罪悪感と新しい子供を産んだ幸福が混ざり合う。

「これからカレンティアの身体をずっと使い続けるつもりかい？」

「ヴォルフ坊ちゃんが望まれるのであれば、そういたしましょう」

無貌の異神は主人を抱き締めた。

「僕はそれを望まない……。胸が苦しくなる。きつとカレンティアに恨まれる」

「さあ。それはまだ分かりませんよ。私とダミエーラで、ベロニカを誘き寄せた四年前、ヴォルフ坊ちゃんは同じ言葉を仰っておりましたね。しかし、現在はそうなっていないません」

「……………。それって結果論じゃない」

「結果論にどんな問題があるのです？」

「一般的には大問題だよ」

ヴォルフガングは複雑な表情で、三人目の娘を眺めていた。生母の爆乳を美味しそうに頬張っている。

「……………」

四年前に出会ったばかりのベロニカだったら、カレンティアを生贖にする決断はしなかったはずだ。

ベロニカを淫母に変えてしまったのは、紛れもなくヴォルフガングだ。未亡人の寂しさに浸け込み、恋心を燃え上がらせた。

「ヴォルフ坊ちゃんはご自分が思っている以上に魅力的な殿方なのですよ。婚約者のいる女冒険者くらいお手の物でしょうに……………」
♥



帝都で名を馳せた女冒険者カレンティアの失踪事件は、大きな騒動となった。

母方の血筋が伯爵家であり、ちょうど後継問題で揉めていることも火に油を注いだ。四年前に母のベロニカ、そして娘のカレンティアが連続失踪。

大混乱の伯爵家は、さらなる事態に見舞われる。老齡の伯爵が心労で亡くなったのだ。

雪解けの春が過ぎ去り、夏の盛りに差し掛かった頃、カレンティアの搜索は打ち切られた。当主を失った伯爵家では、分家筋が代理当主を擁立していた。本家筋のベロニカやカレンティアが見つかってしまうと非常に不都合であった。

分家筋が支配を固めた伯爵家では、行方不明になった母娘の帰還を望んでいない。しかし、探し出そうとする者はいた。

ヒースウッド修道院に出入りする商人達から情報を得て、北方辺境の荘園に辿り着いた冒険者が一人。その男はレーヴェ家の当主が暮らす闇樹館の扉を叩いている。

「すみません。すみませーん！ クロヴィスと申します。帝都からやってきた冒険者です。レーヴェ家の方々に聞きたいことがあって、この地に来ました」

クロヴィスは手の甲で額に垂れた汗を拭う。北方の夏は涼しいが、炎天下で歩き続けたせいで、滝のように汗が出てくる。

「反応なしだな。本当に留守なのか？ 莊園の村長から聞いた話と違うぞ。レーヴェ家の人間はこの屋敷にいと……」

玄関の周囲を見渡す。人間が暮らしている気配はあった。

軒先に幼児用の玩具が片づけてある。土いじりをした痕跡も見つけた。綺麗な泥団子が天日干しされている。

（レーヴェ家の当主は火事で手足を失っている。そんでお世話係のメイドが一人、娘が三人だったか……？ 四肢を失ってもやることはやってんだな。恐れ入るぜ。俺と同じ年くらいで三児の父親だろ？ こんなド田舎でもお貴族様はやんごことな
いってことだ）

隣町でも情報は仕入れた。異教の地を統べるレーヴェ家の評判はとても悪かった。しかし、実際に訪れてみると莊園の住人はクロヴィスを歓待した。莊園の管理を任された村長の頼みで、冒険譚をいくつか披露すると、無償で食事や寢床を提供してくれた。

（やけに親切過ぎる気もするけどな。レーヴェ家の指示だったりするのか？ もつと排外的な村社会だと思ってたぜ）

今年の冬に行方不明となったカレンティア。父親の墓参りを済ませたのは、村の司祭から聞いている。ヒースウッド修道院では「商人に頼んで帝国北方に向かった」と分かった。カレンティアの足取りはレーヴェ家の莊園に続いていた。

愛する婚約者は、この地で消息を絶った。そんな気がしてならなかった。

莊園で働く住人はカレンティアについて「何も知らない」と口を揃える。だが、出入りする行商人は「今年の冬、カレンティアという娘がレーヴェ家を訪ねたかもしれない」と教えてくれた。

（この地を治めるレーヴェ家に聞けば何か分かる。……と思ったんだがな。誰も出てこない。本当に留守か？ 仕方ないな。一度、戻るか？）

クロヴィスは莊園に戻って出直すつもりでいた。踵を返した瞬間、闇樹館の重たい扉が開き、奇天烈な格好のメイドが現れた。

「どなたですか？ 商人さん……ではなさそうですわね？」

黒騎士の兜で素顔を隠したメイドだった。荘園の村長から話は聞いていた。火事で顔に火傷を負って依頼、レーヴェ家のメイドは素顔をひた隠しにしている。

「俺はクロヴィス。帝都の冒険者です」

「帝都の？ 冒険者？」

「……ああ、えっと……これ、ギルドカード……！ 確認してください。俺は怪しいものじゃないですよ」

メイドが扉を閉めようとしたので、クロヴィスは冒険者の身分を示すカードを見せた。去年の冬に査定で合格し、ランクが一つ上がっている。

「本当に上級ランクの冒険者様ですね。なぜレーヴェ家に？ ギルドに依頼を出

した覚えはありませんわ」

半開きの扉はメイドの警戒心を示している。クロヴィスを怪しむ口調だった。

「俺は人を探しています」

「誰かからの依頼で人探しですか？」

「違います。俺の……。個人的な要件です。カレンティアという女性を知りませんか？」

「知っていますよ。今、ここにおりますから」

「え……!？」

玄関の扉が全開になる。まず視界に飛び込んできたのは、メイドの豊満な爆乳

だ。

大きすぎる膨らみで、メイド服の乳袋がパンパンになっている。重力をひしひしと感じさせ、超大な存在感を放つ。素肌を一切見せていないのに、肉付きだけで淫猥な雰囲気がある。クロヴィスの男根が反応し、半勃起状態になってしまう。(すっげえ……デカパイだ……。まるでカレンティアみたいだぜ……。だけど、黒髪だし……声も違うな。それにこのメイドさんは……)

メイドは妊娠していた。

腹部の膨らみは肥満にも見えしたが、ボディラインの歪さで妊婦だと分かった。しかも、片手で小さな赤ちゃんを抱えていた。

「この子はカレンティアですよ。レーヴェ家の娘ですから、立派な女性レディですわね。冒険者様はこの子を探していたのでしようか？」

「あ……いや……。この赤ちゃん……カレンティアちゃんって言うんですか？」

「ええ。ヴォルフ坊ちゃんのお嬢様ですわ。去年の冬に産まれた子です。半年ほど前ですわね。白金の御髪が綺麗でしょう？ 他にも娘が二人おりますの。子育てで大忙しですわ」

「……メイドさんが母君で？」

騎士兜を被ったメイドは漆黒の長髪。抱いている女兒の髪は眩いプラチナブロンド。必然的にメイドが産みの母ならば、父親のヴォルフガングが白金髪だと思

い込んだ。

「私の名前はリリトゥナです。そして、質問の答えは肯定いたしますわ。隣町にも寄られたのなら、当家の噂を耳にしたのでは？」

「ええ。まあ……。はい」

「あら？　もしや勘ぐっておられる？　ヴォルフ坊ちゃんとは合意の関係ですわ。顔に大火傷を負った醜女を憐れんでくれたのです。感謝しておりますわ」

「俺は余所者ですし、偏見はありませんよ」

「ふふっ♥　帝都でだって珍しくはないでしょう？　ご主人様と使用人の肉体関係なんて、ありふれた話ですよ。もちろん、レーヴェ家が正式な奥方を迎え入れ

るときは、身を引くつもりですわ。無関係な余所様にお話すしすることではあり
ませんけれど……。ふふふっ♥ くふっ♥ くつくくくくっ♥」

リリトウナは嘲るがごとく大笑いする。

「気分を害したなら謝罪します。隣町では色々な噂を聞きました。でも、俺は町
の人間じゃありません。ただ……。行方不明の恋人を探しているんです。その赤ちゃ
んと同じ、カレンティアという名前の女冒険者です」

「そうだったのですか。お気の毒に。けれど、そんな女性は知りませんわ。荘園
で働く者達に聞かれては？ 余所者の相手は村長に任せておりますの」

「もう聞きました。誰も知らないと……。でも、ある行商人が……。昨年の冬、カ

レンティアがレーヴェ家を訪ねたかもしれない。そう教えてくれました」

「……そう。いい加減な行商人だわ。口が軽い癖に、真実でもないなんて。『昨年の冬、カレンティアという娘がレーヴェ家に誕生した』それを勘違いなさったのね。取引先の行商人を変えたほうが良さそうだわ。あとで、ヴォルフ坊ちゃんにお伝えしないと」

「昨年の冬は誰も来なかったんですか？」

「冬の間は誰も来ておりませんわ。唯一の道は豪雪で閉ざされ、春先は雪崩の危険があります。ここは辺境ですから」

黒騎士の兜でリリトウナの表情は見えない。しかし、言い表せぬ不気味な感じ

を覚えた。

(行商人から話を聞いたつてのは、言わなきやよかった。失言だったぜ。怒ってる気がする)

背筋がぞくりとする。迷宮の最深部で怪物と遭遇したかのような気分だった。

「そうですか。……お時間を取らせてしまって申し訳なかつたです」

「いえいえ。とんでもない。わざわざ当家を訪問してくださつたのです。よろしければお茶を飲んでいきませんか？ 炎天下の中、莊園から歩いてこられたのでしよう。ゆつくりと涼んでいってください。旅のお話や冒険譚をヴォルフ坊ちゃんにお聞かせく——」

闇樹館に招き入れようとした瞬間、リリトゥナの胸元に抱かれていた乳飲み子が泣き声を上げた。

「——おぎゃっ！ おぎゃあああー！ ふえええ〜んっ!!」

空気を押ししのける言葉なき叫びが鼓膜を揺らす。母乳のぬくもりを求めて、小さく柔らかな両手でデカパイを掴んだ。

「あら、あら。もう……。本当に……。普段は静かな子なのに……。カレンティアつたら……。今日はどうしたのかしら？ 仕方ありませんわねえ……。♥」

リリトウナは器用にメイド服の襟元を緩めて、ブラジャーをずらし、左の片乳を引っ張り出した。泣き叫ぶ乳児の唇に乳首を押し当てて。

「おっぱいを吸って静かにしていなさい。お客様の前ですわよ」

晒し現れた爆乳のバストサイズは、乳児の体軀を上回る。メイド服の上からでもデカパイなのは分かっていたが、実物が露出すると、その存在感は一層大きい。「じ、ちぶ……しっ、しっ、ごほん！　自分は失礼します！　ご厚意はありがたいのです。しかし、これ以上はご迷惑になるので！」

慌てた様子のクロヴィスは背を向けた。母乳をせがむ愛娘のためとはいえ、初対面の異性に乳房を見せたりリリトウナの行動に動揺した。

（なんていうか、貞操観念がやっぱ田舎だな。教会の教えが行き届いていない異教の地だからか？ 普通は見せないだろ……。はあ。こっちが悪いわけじゃないのに……）

恋人のカレンティアを思い出す。彼女も母親譲りの爆乳の美女だった。リリトゥナの授乳姿を目撃し、クロヴィスはみっともなくギンギンに勃起してしまった。

（メイドのリリトゥナさん……。乳輪がめっちゃデカいな。茶黒色だった。まさに母親^{ママ}の身体だな。子供を孕むとああなるのかな。——俺の探してるカレンティアとは大違いだ）

クロヴィスはカレンティアの美体を知っているつもりだった。乳首の突起は控

え目で、鮮やかな桃色の乳輪。爆乳の女性という共通点はある。だが、探している恋人とレーヴェ家のメイドは別人に違いないのだ。

「クロヴィスさんは莊園にいつまでご滞在なさるのですか？」

立ち去ろうとしたクロヴィスを呼び止める。

「分かりません。近日中に旅立つかもしれませんが。行商人の話を聞いてここまで来ました。カレンティアは見つかりそうもない。いつまでも村長のご厚意に甘えるわけにもいきません。……それに……もう半年以上が経ってしまった。俺だけならともかく、仲間にも迷惑をかけたっぱなしだ」

クロヴィスは振り返らない。黒森の細道を小走りで駆けてくる仲間の姿が見え

たからだ。

「あのお嬢さんがクロヴィスさんのお仲間ですか？　冒険者には見えませんね。あんな慌てた走り方では転んでしまいそうですわ」

「旅の同伴者ですよ。彼女は冒険者組合の受付嬢です。俺が北方に旅立つと言ったら、仕事を休職してついてきてくれた。俺まで行方不明になるんじゃないかと心配しているんですよ。長旅と夏バテで疲れていたから、村長の家に置いてきたんですが、追いかけてきたみたいです」

「……………。もし莊園を出られるなら明日がよろしいでしょう。夏は豪雨が降ります。ぬかるんだ悪路では地すべりも起こりますからね。帰れるときに帰ったほ

うがいい。おやまあ、やっぱりあのお嬢さん、転びましたね」

受付嬢は石ころで躓き、盛大にひっくり返った。

「あちゃあ……。たくっ……。怪我してなきやいいけど……。ドジな奴なんですよ」
「いいえ、あのお嬢さんは狡猾です。アレ、わざと転んでますね」

「へ……。まさか？ 演技？」

「はい。怪我はしていません。クロヴィスさんは慕われているのですね。
早く助けにいったらあげてください。あのお嬢さんはそれを期待していますわ」

メイドは玄関の扉を閉める。

「――末永くお幸せに」

別れの言葉を告げられた。

その声色は聞き覚えがあった。先ほどまで話していた使用人の口調ではない。勝ち気な女冒険者カレンティアの声に似ていた。自分を叱りつけ、時には励ましてくれた愛する婚約者。もう一度、レーヴェ家のメイドと話してみたくなった。

「え……あのっ……!! ちよっ……!」

息を呑んだクロヴィスは振り返る。しかし、もはや手遅れだ。

施錠の音が鳴った。闇樹館の扉はもう開かれない。

「何だったんだ。さっきの声……？ カレンティア？ いや……まさかな。俺の聞き間違い……か……？」

釈然としなかったが、クロヴィスは転んだ受付嬢を放置したままにはできなかった。

メイドが言った通り、派手に転んだくせに受付嬢は無傷だった。わざと転んだ可能性は高い。しかし、それを指摘するほど野暮な男ではない。手を差し伸べると、受付嬢は嬉しそうに笑顔を作った。

頬をリンゴのように赤く染めた受付嬢はクロヴィスに抱きつく。婚約者を失った男の心は揺さ振られている。カレンティアの手掛かりは途絶えてしまった。こ

れから先、見つかるかは分からない。

「痛い……。お尻を打っちゃいましたあ……。クロヴィスさん！ 酷いです！ 私だけ置いていくなんて！」

「悪かったよ。大丈夫か？」

「足を痛めたかも……。痛いです……」

「手を繋いで帰ろうか。ああ……。そうだな……。もう帰ろう……。十分、よくやっ
たよな。カレンティアは見つからなかったよ」

クロヴィスの旅は終わった。

この決断は大帝国の滅亡を決定づけたが、当人達にその自覚はない。



メイドは玄関の覗き窓からクロヴィスと受付嬢が帰っていくのを見届ける。

二人は恋人同士のように手を握っていた。不思議なことに嫉妬で怒りを覚えた。だが、婚約者の不貞を責める資格は、今の彼女にはない。

「これで……戻れないわね……。でも、これでいい」

肉体の主導権を移譲されたカレンティアは安堵していた。リリトウナはクロヴィスの首を刎ねるつもりで、闇樹館に誘い込む気だった。しかし、冒険者組合

の受付嬢が同行していると知った途端、潔く手を引いた。

正しい判断だ。利口で狡猾な受付嬢は旅の道中、帝都に手紙を送り続けていた。もし自分達が行方不明になったら、冒険者組合が本格的な調査に乗り出すための布石だ。

これから先、受付嬢は外堀を埋めていきだろう。帝都への帰路でクロヴィスを自分の物にしてしまう。

（腹立たしい女。でも、しょうがないわ。先にクロヴィスを裏切ったのは私なのだから……。私の子宮はヴォルフ坊ちゃんに恋している）

カレンティアは子供部屋に赤子を連れて行く。姉のダザリーヌとアヴェエロアナ

がお昼寝している横に寝かせた。自分と同じ名前を与えられた異父妹カレンティア2世。貌を覗き込むと、鏡を見ている気分になる。

「母乳は後で母さんからもらいなさい」

クロヴィスの前で授乳を披露したが、カレンティアの乳房は母乳が出せない。母胎の泌乳は出産を済ませてから始まる。他の先輩メイドと違って、新人メイドはまだ産んでいない。

——もし産むのなら生贄が必要だ。

カレンティアは寢室に向かう。真夏の最中だが寢室は窓を閉め切っていた。

熱気が籠ってしまいが、騒々しい喘ぎ声が漏れるよりはいい。扉をノックし、性宴の会場に入室する。

「おおっ♡んおっ♡あんっ♡さあ、ヴォルフ坊ちゃん♡たっぷりお飲みください♡」

「はあ♡んあっ♡ああんっ♡ベロニカ様ばかりずるいですわ。ヴォルフ坊ちゃん♡私のおっぱいもお召し上がりください♡」

ベッドの寝そべった二人の美熟女が、ヴォルフガングを豊満な乳房で挟んでい
る。乳首から噴き出るミルクを飲ませていた。四肢欠損の青年は交互に母乳を吸

う。

ベロニカの右手がヴォルフガングの陰囊を揉んでいる。陰茎の竿はダミエーラの左手が握りしめていた。二人の美熟メイドは股間に手を伸ばし、御主人様のオチンポを苛めるように搾精する。

「くふふっ♥ 出したいのですか？ ヴォルフ坊ちゃん♥」

「あらあら♥ でも、まだ射精してはいけませんわ♥」

射精の寸前で手扱きは動きを止める。完璧な射精管理によって、一度も放精が叶わない。龟头は我慢汁でずぶ濡れだ。

「ふふっ♥ ヴォルフ坊ちゃん。ほら、ご覧ください。やっぱり私の娘は戻って

きましたわ。裁きの日は遠退きましたね。賭けは私達の勝ち。これからずっとこの幸福な日々が続く♥ 永久に……♥ レーヴェ家の繁栄を謳歌したいのです♥」

「リリトウナの予想通り。当然だわ。帝都に残した恋人よりもヴォルフ坊ちゃんを選ぶ♥ 分かりきっておりますわ。さあ、カレンティア。服を脱いで、こちらに来なさいな。このままだと私とベロニカ様の手扱きで、射精させてしまうわよ」

ベロニカとダミエーラに急かされ、全裸になったカレンティアはベッドの上に登り、猛々しく勃起したオチンポに跨った。

身籠った下腹部の出っ張りがより目立つ。クロヴィスではなく、ヴォルフガングの精子で孕んだ胎だ。懐妊で肥大化した爆乳は、母親を凌駕する巨峰が実った。乳輪が茶黒に染まったのは、実母からの遺伝で間違いない。

伯爵家の母娘はそっくりだった。男の好みも――。

「私を探しに来た男は……私を諦めましたわ。私も……昔の男は捨てました。だから、お願いします……♥」

カレンティアは騎乗位でヴォルフガングと交わる。挿入された瞬間、溜めに溜められた精液が噴出した。膣内で精液が暴れている。

「くっ……！ うっ……。カレンティア……！ 僕は……!!」

必死に何かを訴える。左右から押し付けられた乳房に溺れて、ヴォルフガンクは苦しげだ。だが、カレンティアは構わずに腰を振り始めた。上下に尻の肉が揺れる。金槌で釘を打ち付けるように、リズムカルなテンポで肉音が鳴る。

「いいのっ……♡ もう我慢なんかしないで♡ 私を奪って……♡ 理性なんか
いらないうっ♡ 道徳心も……!! 教会の信仰も……!! ヴォルフ坊ちやんだつ
て、私を犯したいんでしょ？ 犯してっ！ 滅茶苦茶にしてえっ!! 私の心を墮
としなさいっ……♡ ダミエーラや母さんを虜にしたように……!! リリトウナ
を誘惑したように♡」

「カレンティア……？ 操られて……うわっ……!!」

「違う！ 本気だから……私は……本気っ……!! ほとぼりが冷めたら、帝都に行きましよう♥ 伯爵家の家督を奪いに……! お祖父ちゃんは遺言を書いているわ。分家筋に爵位や財産を渡しはしないっ……♥ 奪い返せるわ……♥ ヴォルフ坊ちゃんは伯爵家に乗っ取れるのおっ……♥ クロヴィスと結ばれたあの女にも、私の幸せを見せつけてやるんだからっ……♥」

「僕はそんなのっ、望ま……はうっ……くゅ……ん……!」

首無しメイド達は主人の身体に縋りついた。恥部を擦り付け、一斉に甲高い喘ぎ声を奏でる。三人の肉体に宿ったりリトウナが悦びを歌う。差し出された三人の乳房を啜える。

「もっと繁栄できるわ。お願いよ。私達の望みを叶えて……♡ 坊ちゃん♡」

「黒森の根を広げるのです。伯爵家の力さえ手に入れば、隣町を潰すのは簡単
だわ。本物の貴族になるのですから♡ 母娘おやこの懇願をお聞き入れくださいませ♡
坊ちゃん♡」

「レーヴェ家の繁栄は当主の義務ですわ。亡くなられた先代と奥方、使用人達の
遺志を汲んでくださいませ♡ 坊ちゃん♡」

誰かが裁きを下してくれる。しかし、ヴォルフガングの破滅願望は叶いそうに
なかった。

（いけないことなのに……。僕は……。快樂に負けてる……。これからも奪い続け

てしまおうんだ。カレンティアを盗ったように……。赤ちゃんの胎動が伝わってくる)

黒森の支配圏はこれからも広がっていくだろう。伯爵家の力を吸い取り、隣町を勢力下に置く。無論、その程度では侵略は止まらない。広大な帝国を少しずつ、長い歳月をかけて着実に蝕んでいった。



およそ一世紀後、大帝国を統べてきた帝室が挿^すげ変わる。異形の暗躍を悟った

冒険者組合は、諸外国に助けを求めた。しかし、反抗の隙を与えぬ鮮やかな帝位篡奪は止められなかった。

帝室男子は根絶され、皇女や皇妃などの若い女は新帝に娶られた。教会の一夫一妻制を廃し、新帝の子を作るハーレムが誕生した。

そして、一年と経たずに旧帝国の征服完了は帝室の胎で示される。

新帝国の樹立を宣言した日、国民の前で首無しの子供達がお披露目となった。若い皇女は当然、殺された皇帝の妻である皇妃、さらに徹底抗戦を唱えていた母后までも孕んでいた。

間引きは完遂され、旧帝室の血筋は完全に滅びた。レーヴェエ家の子種で妊娠し

た女だけが生存を許された。胎を膨らませた旧帝室の女達は敗北を認め、皇朝交代を国民に告げた。

レーヴェ家の繁栄は極みに達した。

黒森の根が国土全域に広がり、狂信的な国民は首を皇帝に捧げ始めた。いつしかそれが義務となり、頭部欠損の新生児が生まれるようになる。人間の国ではなくなった。

黒森に覆われた首無し帝国。異形の支配する魔境。原生樹の根本に埋まった供物の頭は、おぞましい山を築いていた。原生樹から注がれる生命力で、四肢欠損の大帝は老死を迎えられなかった。

「ああんっ♥」

オマンコを貫かれた首無しメイドが喘ぐ。憑代にされている美女は千人を超えた。

ハーレムの女は等しくメイドだ。妻に相応しい肉体をリリトウナは求め続けている。

今、抱いている首無し美女は旧帝室の女。ずっと抵抗を続けた皇帝の母親を犯している。何千人もの家臣を従えた高貴な淑女はメイドに零落し、何十人もの子供を産ませた。玉座に腰掛けた四肢欠損の不具者に性奉仕を続ける。

「ヴォルフ坊ちゃん……♥」

リリトウナの声が混じっている。母后は両手で乳房を揉み、嘔き散らかした。控えていた者達も続々と群がってくる。その中には古参メイドとなったダミエーラ、ベロニカ、カレンティアの三人もいる。原生樹から供給される生命エネルギーのおかげで、オチンポの精力は底なしだ。群がってくる女に種付けする生態系が築かれた。

「愛しておりますわ。もっと私達を抱いてえ……♥」

ヴォルフガングは無貌の美女メイドに愛されながら、裁き日を待ち続ける。

「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」

ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」「坊ちゃん♥」
「坊ちゃん♥」

取り囲むメイド達に代わる代わる種付けしていった。差し出されたオマンコに

オチンポを挿入する。交配し、孕ませ、産ませる。赤子には国民達が捧げた貌を
与える。植物栽培のような家畜的繁栄だ。

終わりなき幸福が続く悪夢。勇者が現れ、自分の首を刎ねることを望んだ。

——未だに終わりは訪れない。